

俳句の街 まつやま
俳句ポスト 365
作品集 2015

<http://haikutown.jp/>



目次

季語解説



第54回 風光^{かせひか}

〈春〉よく晴れた春の日に、やわらかな風が吹きわたる様子。春になると陽光が強くなり、吹く風もキラキラと輝いて見え、景色がまばゆく感じられる。

1

第55回 ぶらんこ

〈春〉ゆさわり、ふらふら、ぶらんこ、と時代と共に名称が変わってきた。鞆（しゅうせん）という呼び名は、中国北方民族のものが中国に伝わって呼ばれた名だといわれる。

2

第56回 春菊^{しゅんぎく}

〈春〉食用に栽培されるキク科の二年草。羽状に深く切れ込みの入った葉は、多肉で柔らかい。若芽を浸し物や煮

3

物で食べる。

第57回 田楽^{でんがく}

〈春〉長方形に切った豆腐を竹の串に刺して、味付けをした味噌を塗り、火であぶったもの。魚や野菜類、こんにやくなどを用いるものもある。

4

第58回 伊予柑^{いよかん}

〈春〉ミカン科ダイダイ類の品種のひとつ。原産地は山口県だが、明治中期に愛媛県での栽培が盛んになったことから伊予柑と呼ばれるようになった。

5

第59回 蘆^{あし}の角^{つの}

〈春〉蘆はイネ科の多年草。春の水辺に、蘆の芽がつんつんと生い出た様子を、その芽の鋭く尖った見た目から、角に

6

なぞらえた呼び名。

第60回 馬の子^{うまご}

〈春〉馬の胎生期間はほぼ一年とされる。生まれたばかりの子馬は、まだ頼りないながらも十分に発育しており、すぐに親馬と歩くようになる。

7

第61回 巣箱^{すばこ}

〈春〉木の穴を巣とする野鳥の保護や観察を目的として、営巣できるようにかけられる箱。巣箱を利用する野鳥は三千数種類におよび、鳥の種類それぞれに合わせてつくられる。

8

第62回 蛭烏賊^{はたらい}

〈春〉ホタルイカモドキ科の烏賊。胴長5〜7cmで、身体各部に発光器

9

がある。普段は深海に生息しているが、晩春の産卵期に浅海に上がってくる。富山湾のものが有名。

第63回 ライラック

〈春〉ヨーロッパ原産。モクセイ科の落葉低木。高さ約5m。4月頃、筒状の花の先が四裂した、芳香のある小花を穂状につける。

9

第64回 藤椅子^{とうし}

〈夏〉藤（とう）を編んで作った椅子。見た目にも涼感があり、肌触りもひんやりとしている。編み目を通る風の感触の心地よさを愉しむ。

10

第65回 守宮^{やもり}

〈夏〉ヤモリ科の爬虫類。全長12cmほどで蜥蜴に似ているが、頭が大きく、指の腹に吸盤を持つ。夜間、灯に集まる虫などを捕食するために壁や天井などにびたりと吸い付く。

11

第66回 麦^{むぎ}

〈夏〉イネ科に属する大麦小麦裸麦燕麦ライ麦などといった植物の総称。日本では、主に稲の裏作として、稲刈りを終えた後の田で栽培されてきた。

13

第67回 シヤワー

〈夏〉水や湯をじょうろ状の噴出口から浴びる装置。また、その水や湯のこと。入浴や行水などに用いられる。

14

第68回 植田^{うえた}

〈夏〉早苗が植えられた後の田んぼ。苗が根付き、その先が田んぼに張られた水の水面からわずかに出て並んでいる。

15

第69回 螢^{ほたる}

〈夏〉ホタル科の甲虫の総称。尾端に発光部を持っており、交尾のため夜に群れをなして飛び交う。清流付近に棲む源氏螢が一般によく見られる。

16

第70回 紫陽花^{あじさい}

〈夏〉ユキノシタ科の落葉低木で、梅雨どきを代表する日本原産の花。咲き始めは白いが、次第に緑、青、桃色へと色を変える。額紫陽花の改良種で、こんもりと穂状に咲く。

16

第71回 ソーダ水^{すい}

〈夏〉炭酸ガスを含む清涼飲料水。かつては天然湧出のものも市販されていたが、現在では人工的に作られるものがほとんど。甘味や香料を加えて飲んだり、無味のまま洋酒の希釈に使ったりする。

17

第72回 川開^{かわひらき}

〈夏〉江戸時代の隅田川両国橋付近で打ち上げられた花火がきっかけとなり、川開きといえは花火大会をいうようになった。今では各地の河川で催されている。

18

第73回 青田^{あおた}

〈夏〉根付いた稲が順調に生育し、青々としてきた田んぼ。また稲の隙間から水面が見える状態から、生育が進んで稲が密集している状態まで、生育段階によって情景は様々。

19

第74回 蓮^{はす}

〈夏〉スイレン科ハス属の多年草で、インド原産といわれる。沼や池などに生育し、夏に淡紅色や白色の花をひ

20

らく。仏教では極楽に咲く花として描かれるなど、仏教との結びつきが強い花でもある。

第75回 炎天

〈夏〉夏の日盛りの、やけつくような暑い空のこと。また、その天気のことをいう。

第76回 夏深し

〈夏〉夏の終わりの頃のこと。「晩夏」の意。「春深し」や「秋深し」などとは趣を異にするが、古くから使われている、心情的なニュアンスを含む季語。

第77回 法師蟬

〈秋〉8月、秋風の吹き出す頃に鳴き始める、体長4〜5cmの蟬。翅は透明体は暗黄緑色で黒斑がある。特徴的な鳴き声が名前の由来となった。

第78回 猿の腰掛

〈秋〉サルノコシカケ科 マンネンタケ科、キノブタケ科の菌類のうち、特に木質で多年生となるきのこの一般的総称。立ち木や枯れ木に棚状に生え、年々成長して厚さと幅を増す。

第79回 秋草

〈秋〉よく知られた草から無名とされる草まで、秋に花を付ける草全般を指している。一種類ずつ、一本ずつをいう場合も、複数を指している場合もある。

第80回 名月

〈秋〉陰暦8月15日の月。行事としてこの日のをめぐる風習は中国から伝わってきたものだが、それ以前より月は暦として生活に、とりわけ農耕に深く関わっていた。

第81回 秋燕

〈秋〉「しゅうえん」とも読む。南へ帰っていく燕が、夏の終わりから秋にかけて大群を成して人里近くなどに集まる景が見られるが、やがて秋の涼しさが増すと、その姿を見かけなくなる。「燕帰る」。

第82回 落し水

〈秋〉稲が実つてきた田んぼで、稲刈りの準備として、ひと月ほど前から田水を抜いて用水路などへ流す。これによってよく熟した稲穂となり、また田んぼも乾いて稲刈り作業がしやすくなる。

第83回 不知火

〈秋〉陰暦8月1日頃の夜中に、九州の八代海に見られるという怪火。火の正体がわからなかったことから呼び名といわれるが、実際には海上の温度差によって漁火などが屈折して見える現象である。

第84回 後の月

〈秋〉陰暦9月13日（十三夜）の月。陰暦8月15日（十五夜）の名月とあわせて、少し欠けた月を賞美した。名月のヶ月後の月であることからの呼び名。名月と同様、各地に様々な風習がある。

第85回 万年青の実

〈秋〉万年青はユリ科の常緑多年草。江戸時代から観賞が流行し、変形種や斑（ふ）入りなどの品種が育てられてきた。球形の実が、秋が深まるにつれて青から朱赤色に熟す。

第86回 鰯

〈秋〉ボラ科の魚で、浅瀬や湾内に生息する。長崎などでは卵巣から「がらすみ」を作る。成長にしたがつて名を変え、出世魚で、特に大型のものをいう「とじ」は、「とどのつまり」の語源でもある。

第87回 黄落

〈秋〉イチョウ、ナラ、クスギなどの秋になつて黄色くなつてた葉が、秋の終わりが近づき散り落ちる様、それぞれの木に、それぞれ趣がある。

第88回 夜寒

〈秋〉冬まではまだ少し間がある晩秋夜になつて少し肌寒さを感じる。暖房を入れるには幾分早く、着るものを増やしたり、早くと就寝したりする。

第89回 神無月

〈冬〉陰暦の10月のこと。古くからの俗説で、この月に諸国の神々が出雲の国に集まるため、諸国は神が居なくなるというわれ、神々が集まる出雲では神在月（かみありつき）と呼ぶとされる。

第90回 ジャケツト

〈冬〉ワイシャツやブラウスなどの上に羽織る、丈の短い上着。素材はさまざまで、デザイン性にも富んでいるため、カジュアル着として男女問わず広く着用されている。

第91回 冬の鵞

〈冬〉鵞は秋に平野に下りてきて越冬する。冬になると、なわばりも決まつて他の鵞と争う事もなくなるため、秋に比べて猛々しい高鳴きをすることなくなる。

第92回 鯨

〈冬〉哺乳類クジラ目に属する魚形の動物で、胎生である。現存する動物の中で最大のものも含まれる。主に南北両極の海に生息し、日本近海へは冬季になると回遊してくる。

第93回 牡丹鍋

〈冬〉牡丹とは猪の肉のことをいい、それを鍋に仕立てたもの。薄切りの猪肉を、葱、豆腐、白滝などと一緒味噌で煮込む。日本では猪肉は古くから食されてきた歴史がある。

第94回 冬至粥

〈冬〉冬至の日に食す小豆粥のこと。小豆には邪気を払う力があるとされ、また、陰暦11月23日の夜に小豆粥をお大師さまに供える大師講とも関係があるといわれる。

第95回 福引

〈新年〉元々は正月の屋内遊びのことで、二人でひとつの餅を引き合い、取れた餅の量で一年の吉凶を占った。現在では、くじ引きで様々な景品を分け取る催しのこと。

第96回 寒蛭

〈冬〉寒中にとれる蛭。通常、蛭の旬は春だが、この時期の蛭は夏の土用の頃と並んで珍重される。

第97回 冬芽

〈冬〉春になると萌え出す芽は、大抵が秋のうちにできており、寒さに耐えられるように固い鱗片で覆われて休眠・越冬する。「冬木の芽」ともいう。

第98回 採氷

〈冬〉川、湖沼、池などの天然の水を鋸で切り採って貯蔵する。かつては氷室に貯蔵し、夏場の飲料用とされた。現在は主に北海道・東北地方で、冷凍用の水として採氷される。

第99回 冬服

〈冬〉主に厚手の素材や防寒素材を使用した、冬に身につける洋服。冬服と言った場合には和服は含まれない（和服が含まれるのは「冬着」の場合、冬ならではのデザインを楽しむものが多い）。

第100回 白梅

〈春〉梅はバラ科の落葉高木。桜より以前は、梅が春の花の代表であった。梅の品種は300種以上ともいわれるが、そのうち花の色が白色のものを「白梅」と呼ぶ。白以外にも、紅や淡紅の品種がある。

第101回 蛤

〈春〉マルスターガイ科の二枚貝。汐干狩などで浅瀬とともにボビュラーな貝として知られる。殻は滑らかで様々な模様がある。身は上品な味をしており、また殻も様々な目的で利用される。

365オプ会報告

表6

出張俳句ポスト報告

表5

風光る

天

ランナーを追う連写音風光る

笑松

今週の兼題「風光る」は愛媛マラソン応援企画と銘打っており、愛媛マラソン当日にフェイスブックで募集した席題は「走」。こちらはすでに入賞作品が発表され、最優秀の一句には松山市からささやかな賞品がプレゼントされております。

当然のことながら、兼題「風光る」にも同じ賞品が用意されており、やはり愛媛マラソンに関わりのある句を選ぼう♪という段取りになっております。えええー！それなら愛媛マラソンの句を沢山投句すればよかった！と後悔しても、あとの祭りでございます（笑）。

さて、今週の「天」に推したこの一句、カメラの「連写音」という言葉を巧く使いこなしましたね。言うまでもないことですが、俳句は上五から順に読んでいきますから、一つ二つの言葉を眼球が捉えその意味を脳が解読して、脳内に映像やイメージを作っていきます。この句、上五が「ランナーを」とありますから、当然、走者の姿が浮かびますね。「ゝを」という助

詞はたったの1音ですが、「ランナー」を何かの対象としていることが分かります。私たちの脳は、たつた5音の文字情報から瞬間的にこれらのことを読み取ります。

次に脳内に伝達されるのは「ゝを追う」という動詞。あ、なるほど、ランナーがランナーを追っているのか、と思った瞬間に「連写音」という単語が出てくる！ここに鮮やかな映像の転換が起こるわけですから。

一句の視点が、沿道でカメラを構えている人物のファインダーの中にあったことがわかったと、ファインダーを通して見る「ランナー」の表情や筋肉の動きが生きてきと再現されていきます。次々に切るシャッター音、観客の歓声も広がります。レンズに写る光景すべてが「風光る」という季語の世界に鮮やかに存在している、そんな一句でありました。

地

ランナース・ハイ風光るにはまだ遅い

葛城蓮士

愛媛マラソンを素材とした作品からもう一句。「ランナース・ハイ」とは「マラソンなどで長時間走り続けると気分が高揚してくる作用」と辞典には解説してありますが、Yahoo!知恵袋の質問を拾って読み添えて「ほとんどの人が「ランナース・ハイ」を勘違いしてま

す。「セカンドウィンド」のことをランナース・ハイと間違えているんです」という記述も見つけました。マラソンもなかなか奥が深いようです。

この句を二読した時、「風光るにはまだ遅い」は季節の進む速度に対しての言葉かと思ったのですが、いやいや違っていました。そう読んだのでは、勿体ないですね。

「ランナース・ハイ」の真つ只中にいる僕は、もつともつと走れるよ！風を光らせるぐらい走れそうだよ！「風光る」には「まだ」遅いよ！もつともつと早く走れるよ！という心の高揚を詠ったのではないかと解しました。「ランナース・ハイ」風光る」という比喻によつて、季語を表現した意欲作だといえるでしょう。

行けど行けど大阿蘇の中風光る

あい

嗚呼、これも気持ちの佳い光景ですね！「行けど行けど」から「大阿蘇」の光景への広がり、「ゝの中」という一見不要に思える言葉も上五「行けど行けど」と呼応しています。「大阿蘇」を吹きすぎてゆく「風光る」という季語のなんと鮮やかなことでしょう。

内陸に繋がる無線風光る ちとせ

「内陸に繋がる無線」ということは、どこからその無線を発しているのでしょうか？外洋でしょうか、

離島でしょうか。遠洋漁業から戻る船の、次第に陸地が近づいてくる実感かもしれませんし、「風光る」ような日には「無線」が際鮮明に聞こえるよという喜びかもしれません。ガーガーという「無線」の雑音も「風光る」音のような気分になさてくれる一句ですね。

サメの歯の出そうな地層風光る

小木さん

「サメの歯の出そうな地層」とは、元々は海だったことが分かる「地層」なんでしょう。そんな地層を前にして、作者はこゝ体が海であつた頃のことを夢想しているのでしょうか。ここには「風光る」海が広がっていたに違いないという思いが、眼前の「風光る」光景をさらに新鮮なものに感じさせます。

「サメの歯」ではなく、貝殻でも魚の骨でもいいといえはいいのですが、「サメの歯の出そうな地層」というフレーズに勢いがあり、強い好奇心も感じ取れて、そこが好きでした。

風も未だ少年だから風光る ミル

おお、こんな発想もいいなあ！と共感した一句。たしかに「風光る」は三春の季語ですから、一年間の季節のサイクルから考えると「少年」のイメージはぴったり。普通「〇〇だから〇〇」という叙述は説明的になるので成功しにく

いのですが、その叙述をちゃんと詩の言葉にしてしまえるところがこの作家らしい個性と実力です。

風光るさつき転んだのが長女

台所のキフジン

ふふ、可愛いね♪少し離れたところで、大人たちは子どもたちの様子を見守っているのでしょうか。「さつき転んだのが長女」と語るこの言葉から、何人かの子どもたちが一緒に遊んでいることが分かりますし、「転んだ」という動詞から、一緒に走ったり追いかけてりしているのも分かります。

さらに、わざわざ「長女」と述べていることから、次女もどこかにいてお姉ちゃんのを追いかけてたり、小さな子のグループの中で遊んでたりするのもかもしれないと、さまざまな想像が広がります。たつた十七音の叙述だけで、それらの光景をありありと立ち上げるのですから、大したものですね。

母を追ふ子象100キロ風光る

大阪華子

「母を追ふ」のが「子象」であり、すでに「100キロ」の体重であるという光景が微笑ましく、愉快です。「追ふ」という動詞からヨチヨチせつせと小走りで動いている様子も想像できます。「100キロ」の「子象」が走るたびに、「風」はさらにきらきらと光の量を増やしていきそうです。

根子屋

「風光る」光景の中にさまざまなき物がある句も沢山届きました。その中で、「風光る音に待たせる」という発想に強く惹かれました。「風光る音」が聞こえそうなという比喩は美しいけれど、ちよつと無理があるか……と思う瞬間に「盲導犬」という言葉が出現し、ハツとします。

「盲導犬」の目には光る風が映っているのだけれど、ご主人は「風光る音」に耳を澄ませているという詩的真實を大変美しく感じました。

浄化される山彦風光る

ヤッチー

前半の叙述はさらに推敲の余地があるかとは思いますが、「山彦」は「浄化」されて戻ってくるのだよという発想が素敵です。自分の声なのに自分の声じゃないみたいな感覚の理由を、率直に解説してもらったような気分です。

「風光る」は、風の印象のみを述べた、映像を持たない季語ですが、音という要素と相性が良い季語なのだというのを、今週は再認識しました。「光る」という動詞の視覚的な印象が、逆に聴覚の要素を際立ててくれるのだなあと、実感した一週間でした。

ぶらんこ

天

凶暴なるぶらんこの王者は二歳

カリメロ

ははは！この「王者」の目つきが見えてくるようで、笑ってしまつたよ。子どもたちにとつて「ぶらんこ」は人気ベスト3に入る遊具といつてもいいでしょう。順番を待つたり、割り込んだり、割り込まれたり、泣いたり、そんな子どもたちのシーンをスバリ「凶暴なる」という言葉で表現したのがお見事です。

「凶暴なる」は「ぶらんこ」にかかるとはなく、「ぶらんこ」の王者」にかかると考えるべきですね。大好きな「ぶらんこ」を手に入れるために、ちよつと意地悪したのかもしれないし、一番に突進して鎖を握り、他の子たちを断固排除したのかもしれないし、親の言うことを聞かずに「ぶらんこ」を占拠しているのかもしれないし（笑）。「凶暴なる」が「ぶらんこ」にかかるとかと思えば、「ぶらんこの王者」にかかり、さらに「王者は二歳」であるという事実が積みかけられていく語順が愉快にして巧みなあ！

「ぶらんこ」に仁王立ちしている二歳児は、「ぶらんこ」を制圧

した喜びに満ちあふれているのでしょう。その「凶暴なる」笑顔を想像すると可愛くてたまりません。他の子たちを見下した視線で、ゴンゴンこぎ始める「ぶらんこ」。猛な青空をも従えんばかりに、「凶暴なる」二歳の「王者」はこのシーンに君臨します。

地

しのめ公園ぶらんこ同盟また明日

めいおう星

@松山市立東雲小学校出身

「凶暴なるぶらんこの王者」というキャッチコピー？（笑）も愉快でしたが、「ぶらんこ同盟」もいいなあ！この「公園」の常連である子どもたちを繋ぐささやかな連帯感が感じられるネーミングです。「しのめ公園」という固有名称も、このネーミングを引き立てます。「また明日」の有りがちな台詞も、新鮮な響きとなつて。

跳びおりてぶらんこがらうと笑う

ひで

こんなシーンを詠んだ句は幾らでもあると思いますが、後半の措辞「がらうと笑う」が面白いです。ね。「ぶらんこ」の鎖が「がらうと」鳴つただけなのですが、「笑う」という擬人化が一句を楽しく支配します。「笑う」という動詞が子どもたちの笑い声を連想させる効果も持っていますね。「ぶらんこ同

盟」もこんなふうにして遊ぶんだろうなあ（笑）。

ぶらんこや地べたに俺に空が青い

くろやぎ

「ぶらんこ」という季語に対して、青空を配する句は沢山ありますが、「地べたに俺に空が青い」という措辞に屈折した個性があります。「ぶらんこ」を漕いでいた時代は怖い物知らずだった「俺」ですが、今は、「空」の青すぎる青さが心に突き刺さるのです。

ぶらんこや我と鉄鎖を磨り減らせ

午後

これもオトナの「ぶらんこ」ですね。限りなく揺れ続ける「ぶらんこ」のキイキイと軋む音が聞こえてきます。日々の生活に摩滅していく「我」と、永遠に揺れ続ける「鉄鎖」。下五「磨り減らせ」という切れのないつぶやきもキイキイと軋み続けます。

ぶらんこの句ひ左右の手に熱し

福家

ブランコを漕いだ後の手の「句ひ」を詠んだ句もさまざまありましたが、この句の特徴は「ぶらんこの句ひ」が「熱し」と表現した点にあります。わざわざ「左右の手」と言わずもがなの措辞を挟むことによって、読者に「左右の手」を意識させ、最後の「熱し」という実感を生々しく再生させる手

法も巧いですね。

ぶらんこに泣くか籠もるか飛び出すか

ぐわ

昨日の「並選」および「人」の作品を確認していただければ一目瞭然ですが、「ぶらんこ」+動詞「泣く」の句も沢山ありましたよね。が、ここまで動詞を積みかけるのも一手だなあ！と納得。「泣くか籠もるか飛び出すか」の三つの動詞が「ぶらんこ」という季語のシーンを、それぞれ想像させる効果があります。

もどらないことだつてあるぶらんこよ

小市

「ぶらんこ」が「もどらない」つて現象はあり得ないでしょ……！と思つた瞬間、いやいや「もどらないこと」つて確かに色々あるよね……！という感慨が心に広がってきます。淡々と述べるこの口調が、一句の思いに寄り添います。「ぶらんこ」は「もどらないこと」をあれこれ振り返るための装置かもしれない、とも思います。

解剖を終へぶらんこを漕いでみる

音絵

「〇〇を終へ」て「ぶらんこ」を漕いでいるという類想は幾らでもあります。が、「解剖」の一語にオリジナリティがあります。医学生が初めての「解剖」実習に挑んだ日でしょうか。日々の仕事として

「解剖」を手がけている人物でしようか。はたまた、生物の授業でカエルを「解剖」したのかもしれない。たった一語から広がる想像を楽しませてもらいました。

酢こんぶ銜へてぶらん 漕いでる

もね

ははは！なんちゅーミスマツチな取り合わせでしょう。「酢こんぶ」「ぶらんこ」、しりとりみたいな二つの言葉が俳諧味を醸し出します。コンビニで缶ビールと「酢こんぶ」買ってきて、公園で飲み始めてるのか。いやいや、「凶暴なるぶらんこの王者」＝二歳児が妙に「酢こんぶ」好き？！なんてことも否定できないぞう（笑）。

第56回 2014年3月10日週の兼題

春菊

天

母という魔女春菊も食えと言う

ミル

「読、一句の愉快に笑いました！好き嫌いを「母」に論される句は数えきれぬほど読んできましたが、「母」という魔女」という比喩一つで完全なるオリジナリティを手に入れることができる快哉！見事な発想です。

いつもお伝えしていることではありますが、俳句は17音しかあり

ませんから、「く」という魔女」の5音分のオリジナリティは作品の約三分の一を占めます。世界で最も短い短詩系文学である俳句は、この5音分の新しさや真実味を追求していけばよいのだと、改めて証明してくれる作品だと思っています。

この句で検証しなくてはいいけないのは「春菊」以外の野菜に置き換えられはしないかという問題です。例えば「人参」「ピーマン」「ほうれん草」など好き嫌いのありそうな野菜を入れてみるとどうか？ということですね。

実際に当てはめて考えていただと分かるかとは思いますが、この句の眼目である「魔女」という言葉に対して「春菊」は絶妙な野菜。独特のあの匂いは、「魔女」が調合する薬の匂いのようにもあり、ぞわぞわと脇芽を増殖させていくさまや、意外に可愛い花を咲かせるさまも魔法のようでもあります。

「母という魔女」は大きな鍋に薬草を放り込むような手つきで「春菊」を入れ、さあ体に良いのだからお食べなさいと迫ってきます。「魔女」の微笑みに気圧されて、「春菊」の怖ろしい匂いと味を飲み下す、そんな子どもの様子も見えてくる作品でした。

地

春菊の香り渦巻く排水口

むすびめ

「春菊」を詠むとなれば、その特徴である匂いは大事な要素。さまたまに「春菊の香り」を詠んだ句が届きましたが、この句の実感と描写、実に巧いですね！「春菊」ならではの強い「香り」は、洗った水を捨てる時も確かに匂います。

「春菊」を洗った水が匂っている」と書けば類想類句も予想されますが、「く」香り渦巻く排水口」と表現するだけでオリジナリティが生まれますし、描写の精度が高いのでリアリティもありますね。これも「天」に推したかった作品です。

新薬のやうに春菊匂ひけり

クズウジュンイチ

この比喩もいいなあ！「春菊」の匂いがどうにもダメだという人は、どうも馴染みにくい？本当に効くのかと疑ってしまう？「新薬」みたいな気分がするのかもしれない（笑）。この句にしても「新薬の」という5音分のオリジナリティで成立しているわけですね。この作家らしい、比喩の鮮度の高い作品となりました。

そこらちゅう春菊の香よ取材の日

ばるこら

下五「取材の日」で5音分のオリジナリティを獲得しているのは、

この句も同じ。「取材の日」で二氣に光景が立ち上がってきます。

お料理教室に雑誌記者が取材にくるのでしょうか、我が家にテレビカメラが入る！なんて日かも知れませんが、食材は「春菊」。強い香りが否応なく緊張を高め、ていくようでもあり、賑やかな現場のドタバタを笑っているようでもあります。

買い忘れたのは春菊夫へ」

みちる

ははは！これもありそうな発想なんだけど、語りが巧いなあ。「買い忘れたのは春菊」と一気に12音を畳みかけ、「夫（つま）へ」と3音、さらに「」（テレテル）で2音、合わせてちゃんと17音になるという仕掛けです。

どんな野菜でも入るといえる入るのですが、「買い忘れたのは」という措辞から判断して、鍋なんだろうと推測ができるあたりがこの季語の力がありますね。

春菊の海で肉片拾いけり ヤモリ

ははは！これもありそうな句なんだけど、表現にユーモアがあります。「春菊の海」という比喩は、ドロドロと溶けた「春菊」を思わせ、その「海」に箸を突っ込んで探す「肉片」は切ないまでの存在。「海でく拾いけり」という措辞の俳諧味にノックアウトされた一句です。

中年の危機はひたひた菊菜喰ふ
やのたかこ

ふふふ、まさに「ひたひた」って感じだなあ（笑）。「中年の危機」は夫婦の危機というヤツでしようか。二人で黙って「菊菜」を「ひたひた」喰ってるさまに、悲哀と笑いがこみ上げます。「春菊」ではなく「菊菜」としたこと、関西のご夫婦を想像。大阪弁の会話があれこれ想定された点も、作品の個性となりました。

同時投句「春菊を曲がらせてある場合かよ」も、胡瓜でも茄子でもいいといえはいいのですが、茎をねじ曲がらせて増えている「春菊」を思うと、その困惑が可笑しくなりません。中年の危機も、こうやって面白い作品になりますから、大事に育てて下さい（笑）。

春菊をさくさく私も姑

ぐわ

おおー、これも実感やなあ。若妻であった頃の気分が今もずーっと残っていたことに気づくのは、自分が知らぬ間に「姑」の立場にいることを実感した時かもしれないですね。お義母さん、春菊はどんなに切りましようか？なんて質問されると、「春菊」なんてどう切っても同じでしょ！とい返しそうになるが、いやいや、そんな言い方では、私を泣かした「姑」と同じ物言いになるではないか……と、グツと言葉を飲み込

む「私」がいるのかもしれない
(笑)。「春菊をさくさく」という
措辞から匂い立つ独特の春菊臭は、
「私も姑」という思いを際立てます。

春菊の塊 二つ相撲部屋

四万十太郎

これも面白い光景。「相撲部屋」
ですから、食材の量はハンパでは
ないでしょう。「春菊」を「塊」
と表現したところに、リアリティ
が生まれ、「二つ」という数詞も
言わずもがなの効果です。

勿論、他の野菜でもいいのです
が、「春菊」は日々のちゃんこ鍋
を思わせますね。「春菊の塊 二つ」
が無造作に置かれている「相撲部
屋」の台所の光景がありありと見
えてきます。

春菊と煮るは雄鹿のアキレス腱

ちとせ

「春菊」でどんな料理をするか。
白和え、お浸し、鍋等など様々
な料理を詠んだ句も沢山届きま
したが、その中で異彩を放っていた
のがこの一句。作者ちとせ君は、
北海道在住。こんなスゴイ料理を
思いつくのがスゴイのか、はたま
た日常的に作っている料理なのか？
まあとにかく吃驚！

「雄鹿のアキレス腱」はどう考
えても硬そうだし、きつと長い時
間かけてグツグツ煮るのだろうな
と推測します。雪の下から「春菊」
を掘り出し、肉の臭いを消すため

に「春菊」を放り込む、そんな光
景を勝手に思い浮かべた次第です。
いやはや、凄じぞ北海道！

春菊喰うて君は春の動物 三重丸

ほおー、こんな発想もあるの

か！「春菊」の独特の香りから「君
は春の動物」というフレーズを導
き出す感覚が実に魅力的。「春菊
喰うて」の7音の後に、「君は春
の動物」と畳みかける10音のな
んと新鮮な調べでしょう。「春菊」
の強い匂いが、「君」を「春の動物」
に変えてしまうという措辞には、
若々しいエロティシズムも感じら
れ、この季語への新しい感覚を提
示してくれました。「春菊」を食
べるたびに思い出してしまいそう
な作品です。

春菊や近くて遠き国の記事 紗蘭

近いようで「遠き国の記事」は
毎朝毎日ネットやテレビのニュー
スで入ってくるのだけれど、実感
とは違うところにあるような……
感覚を、作者は「春菊」という季
語に託しました。

「春菊」の原産は地中海だそう
ですが、日本の食卓での「春菊」
は和食の脇役として個性を発揮
します。水曜日のお便りコーナー
だったかな……野純くんがフラン
スで「春菊」を探したことを書
いてくれてましたが、「春菊」は、
世界の中の日本を意識させる食
材なのかもしれないと、納得させ

られた次第です。

オーストラリア留学中の中学
生俳人紗蘭ちゃん作品だという
前提を外しても、この句における
「春菊」の効果は十二分に鑑賞で
きる取り合わせです。

ワグナーを聴いた春菊とはこれか

桜井教人

トマトにモーツァルトを聴かせ
ているとか、酒蔵でクラシックを
常に流しているとか味がまろやか
になるとか、そんな話を聞いたこ
とがありますが、なんと「ワグ
ナー」を聴かせた「春菊」という
発想が愉快！

「ワグナー」といえば重厚な
曲想の作曲家ですから、関東系の
荒々しくも逞しい「春菊」が育っ
ているのかと想像しました。「
とはこれか」という措辞に作者の
ささやかな驚きもあつて、一緒に
この「春菊」をみているかのよう
な楽しさがあります。

わたしは浪花節的な春菊

桜木レイ

かたや、こちらは西日本で流通
しているタイプの「春菊」でしょ
うか(笑)。水曜日お便りコーナ
ーにて北大路南天くん、とおとさん
からの情報にもありましたが、関
東あたりの「春菊」は臭いも味も
強烈なのに対して、西日本の「春
菊」は柔らかくて優しい味なのだ
そうです。

桜木レイさんのいう「浪花節
的な春菊」はまさに西日本系な
んでしょね。かたや「ワグナー」
だという人がいて、かたや「浪花
節」だという人がいる。「春菊」
という季語の幅を見せてもらった
愉快な二句！旅をする土地土地
で、スーパーの「春菊」を観察し
てみようと思います(笑)。

第57回 2014年3月17日週の兼題

田楽

天

千仞に吊橋田楽の匂ふ 桜井教人

「千仞」は「千尋」とも書いて
「せんじん」と読みます。「尋」も
「仞」も長さの単位であり、「山な
どが非常に高いこと。また、谷や
海などが非常に深いこと」を意味
する言葉でもあります。

なんととっても巧いのは前半の
「千仞に吊橋」という表現だけで
映像を描き切るテクニク。特に
「仞」という助詞の効果をきつ
ちり使いこなしている点は、さす
がベテランの技です。

さらに後半、「田楽の匂ふ」と
光景が切り替えられることによつ
て、「吊橋」の向こう側から「田楽」
が匂ってくるに違いないと想像さ
せます。「千仞に吊橋」という措
辞だけならば遠目の光景とも読
めますが、「田楽の匂ふ」と続け

ば、吊り橋のと真ん中にいると読
んだほうが楽しいですね。眩暈の
するような「吊橋」の上で足もす
くんでいるのに、鼻だけは「田楽」
の香ばしい匂いをキャッチしてい
る姿も滑稽。自分が「吊橋」のど
真ん中にいるような臨場感を楽し
んでこそその一句ではないでしょ
うか。

吊り橋を渡りきつて、ああ怖
かったね、揺れたね、なんて話し
ながら、橋のたもとの田楽屋さん
へとワイワイ向かう、そんな光景
までもが見えてくるような作品で
した。

地

田楽や強力背負ふ当り鉢 蘭丸

「強力」とは「1.力が強いこ
と。また、そういう人や、そのさ
ま。2.登山者の荷物を背負い道
案内をする人。3.修験者に従つ
て荷物を運ぶ下男。」と三つの意
味があります。この句の場合でし
たら、2か3を想定できますが、
個人的な好みとしては修験者の
下男かなあ。当り鉢は「播
り鉢」の忌み詞ですから、修験者
という読みにも似合うのではない
かと。

「田楽」好きな主のために、「強
力」は常に「田楽」味噌を摺る
ための播り鉢を背負って歩いてい
るのでしょ。兼題「田楽」の世
界から、こんな「当り鉢」を見い

だしてくる作者の想像力？観察力？に脱帽です。

粉挽き節のテブ伸びたる田楽屋

初蒸気

こんな「田楽屋」ありそうで、思わず爆笑！気の利いたBGMのつもりで店内で長し続けてきた「粉挽き節のテブ」もだいぶお疲れのようです。「テブ」の伸びきった音がありありと想像できる愉快。こんなところにも句材は転がっているのだなあと感心しつつも、不味そうな「田楽」売ってそんな店だなあと、再び爆笑。

鬼のやうに美味い鬼嫁の田楽

ポメロ親父

ははは！美味しいものの表現として「鬼のやうに美味い」ってのは愉快！しかもそれを作っているのが、近辺では有名な「鬼嫁」だということです。愉快も二倍です。

勿論、最後の季語は「草餅」

でも「おでん」でも良いといえは良いのですが、「田楽」の香ばしい香りや「鬼」という言葉との取り合わせを思うと、やはり「田楽」が一番良からうと考える次第です。

素性わからぬ田楽の種ひとつ

毛利あづき@静岡おでんの

「黒はんぺん」が好きです。

「田楽」は食べ物だけでなく、芸能も意味する言葉です。【初め

民間の農耕芸能から出て、平安時代に遊芸化された芸能。田植えのときに、田の神を祭って歌い舞ったのが原形で、鎌倉時代から室町時代に流行、專業の田楽法師も出た」と辞書には解説してあります。

掲出句の場合も、季語は「おでん」でも良いのではないかと考える人もいるとは思いますが、「素性わからぬ」が田楽法師のイメージにも重なり、季語の成り立ちの妙を合わせて味わいたい作品です。

一股の田楽串の翠かな

みちる

「田楽串」を詠んだ句がどれだけあったかは、木曜掲載の並選・人選を再度ながめていただければ分かりますね。類想類句の吹き溜まりの中から掲出句を金曜日

田楽と辛口地酒死神と

もね

なんとこれも酒の名前が面白い！「辛口地酒」の「死神」とはよくぞこんな名をつけたものだと。めちやくちや美味い「田楽」を肴に、こんな酒をひっかけてると、明日の朝はロクな目に遭わないよ、きつと……と身につまされた一句です（笑）。

べとべとの味噌田楽や山頭火

ときめき人

下五「山頭火」という人名が出てきたとたん「べとべと」という措辞にリアリティが生まれてくる感覚を味わいました。酒好きであった「山頭火」は、屋台の安い「味噌田楽」ひと串を手、にいかにも美味そうに一杯ひっかけていたに違いありません。手につく「べとべと」の味噌を、埃まみれの法衣に擦り付けている様子が目に浮かんでくるかのような作品です。

第58回 2014年3月24日週の兼題

伊予柑

天

指相撲に勝った指なり伊予柑むく

奈津

これだけ多くの柑橘類が出回っている昨今ですから、「伊予柑」らしさをどう表現するか、非常に悩ましい兼題でした。品種改良された柑橘たちと「伊予柑」との一番の違いは、やはり「剥く」という行為。その一点突破を目指した奈津さんの勇気を買いましよう！（笑）

「伊予柑むく」という行為を「父が剥く」「太い指が剥く」「汁を飛ばしてむく」等と表現すれば、やはり類想が山盛り。一点突破の発想として「指相撲」がでてきたと

ころが愉快です。

上五「指相撲に」が一音字余り、中七「勝った指なり」で七音、「伊予柑むく」が一音字余りで、676のリズムになつてはいませんが、全体の調べに無理がなく一気に読み下せます。また中七を「なり」と断定して「指」に視点を集めている点にも工夫があります。

「指相撲」で遊び、ちよつと喉渇いたねと、そこにあつた「伊予柑」を手にしたところでしょうか。いつもは「むく」のがめんどくさい「伊予柑」ですが、「指相撲」のチャンピオンとしては、この「指」を自慢する場面は今ですもんね（笑）。「伊予柑」にむぐつと入れる王者の親指に視線が集まり、一氣に香りが広がってくるさまも想像できます。さつきまで賑わっていた「指相撲」の歓声もまた余韻として一句を引き立てます。

地

伊予柑ひとつ二草庵の勝手口 蓮睡

「伊予柑」の特徴を「二草庵」という固有名詞で表現しようとした一句。「二草庵」は種田山頭火がその晩年を過ごした庵です。乞食放浪の人生を過ごした山頭火ですが、最後は温泉のある暖かい土地でぼつくり往生したいと、松山の弟子たちを頼りました。

「二草庵」は、松山市御幸の寺

町界隈に、今にも山頭火が帰ってきそうな佇まいで保存されています。その庵の「勝手口」に誰が置いたのか「伊予柑ひとつ」。山頭火の声が聞こえてきそうな一句です。

困るほど晴れ切つて伊予柑の島

大塚迷路

「伊予柑」には太陽のイメージがつれそいますが、そんな「伊予柑の島」の頭上には「困るほど」の青空が広がっているという措辞の愉快！リズムが557で合わせると17音になるという破調ですが、一句の内容に似合っていますね。

魚やれば伊予柑貰ふ浜の暮

天宮風牙

こんな光景が日常的に繰り広げられる「浜」の暮らしを素朴に表現した一句。「魚」を獲ってきた人と「伊予柑」を育てている人たちは、半農半漁の「浜」に暮らす人々。下五「浜の暮」という情景描写が効果的に一句を包み込みます。

さきほどの車夫より伊予柑を貰ふ

るびい

「さきほどの」という措辞によつて、一句以前の「車夫」との交流を想像させる上五の巧さを誉めるしかないですね。「車夫」ですから、観光地の人力車を思い浮かべました。さつき載せてもらった「車

夫」たちが休憩しているところに行き当たり、あら？と会釈すると、彼らが食べてた「伊予柑」を差し出されたという場面を、たったこれだけの言葉で生き生きと切り取りました。

勿論「伊予柑」でなく「草餅」でも「大根」でも良いといえれば良いケースではありますが、「伊予柑」とすることで、「伊予」という地名を想像させ、観光地の「車夫」という読みが導かれやすくなりますね。

伊予柑や生涯訪はぬ本籍地

七七子

これも「伊予柑」でなくても成立するケースですが、「伊予柑や」と詠嘆することで、「本籍地」がどういう土地であるかを想像させます。「伊予柑」を食べるたびに、我が「本籍地」である「伊予」を思い、その地を「生涯」訪れることはないだろうなあという感慨に浸る一句として鑑賞できる点が巧いですね。

チェンソー止める伊予柑一個食う間

不知火

これまた「草餅」でもいいじゃないか、という声も聞こえてきそうですね（笑）。しかし、「チェンソー」を使っている人物にとつて、「伊予柑」は喉の渴きを潤すもののなのだろうと想像できます。この時期、山仕事に行く時は「伊

予柑」を持つていく、ひよっとすると自分の「伊予柑」畑にちよいとよつて、「伊予柑」をもういから山に入っていくのかもしれない。「チェンソー止める間」山にはささやかな静寂が戻ります。短い時間を「伊予柑一個」分という単位として表現することも、詩を発生させるテクニクの一つです。

帰りこぬ亭主伊予柑二個目剥く

十猪

ははは！深夜の妻ですなあ（笑）。電話一本も寄越さず、もうこんな時間になつてるじゃないかと、「亭主」への怒りを沸々と滾らせつつ「伊予柑二個目」を剥き始めているのです。

先ほどの句は「伊予柑一個」という時間の単位を作るやり方ですが、こちらは「伊予柑二個目」という時間の経過を表現するやり方です。「二個目」ともなれば、めりこむ親指にも力が入ってるんだらうなあ（苦笑）。

伊予柑の転がり出づる玩具箱

山童

子どもの「玩具箱」には思いもよらないものが仕舞われていることありますが、小さな子どもにしてみれば、ちよつと変わったボールぐらいに思つて「玩具箱」にお片付けしたのかもしれないね。「伊予柑」が転がりでてきた時の

驚きを想像するだけで愉快ですし、意外性もあります。いつそこれを「天」に推そうかと、最後まで悩んだ大好きな一句であります。

第59回 2014年3月31日週の兼題

蘆の角

天

今飛んだの見た蘆の角揺れている

河合郁

眼前にあるのは、揺れ残っている「蘆の角」のみですが、「今飛んだの見た」という言葉が生き生きと映像を伝えます。「今飛んだの」がなんであったかは語られていませんが、鳥であったことは分かれます。その鳥がどんな鳥かは読み手の知識や体験の範囲でさまざまに想像されるでしょう。鳥の名前を知らなくても、その映像だけはありありと見えてくるころがこの句の魅力。「今飛んだの見た」という言葉に臨場感が溢れている作品です。

ねえねえ、今見た？その「蘆の角」に止まつてたの見た？青い綺麗な鳥だったよ！このあたりを縄張りにしてる翡翠かもしれないよ。でも、翡翠つて夏の季語でしょ？うん、そうだけど、この辺りに翡翠の巣があるから、時々飛んでるのを見るよ。そんな会話が

交わされていたのかもしれない。「今飛んだ」鳥を見つけたささやかな興奮が、春の岸辺の散策の楽しさを語り、揺れ残っている「蘆の角」が作者の心に春の印象的なシーンとして刻まれます。きらめく春を喜ぶシーンのなんと楽しいことでしょう。

地

水底よりごぼりとあぶく葦の角

ポメロ親父

水面から顔を出した「蘆の角」の足下をのぞき込めば、こんな様子も見えてきます。「水底」の泥の中から「ごぼり」とわきたつ「あぶく」は、目覚めた亀の息でしょうが、大地から生まれる春の生氣でしょうか。

流れ来る物草の角までゆるり

不知火

これもよく見えますねえ！「流れ来る物」の動きをじっくりと描写する俳人の観察眼が光ります。「蘆の角までゆるり」という措辞が、動画としての描写の精度を裏証している作品。見事な写生です。

キリストの足が踏み抜く蘆の角

みちる

聖書では様々な場面で「蘆」という植物が象徴的な意味をもつて物語られています。「キリストの足」が痛々しくも「踏み抜く」の

だという「蘆の角」もまた象徴的な意味合いを持ちます。人々の罪を背負つて生まれ、そして死んだ「キリスト」の足下から、新しい春が生まれているのです。

蘆の角此れ伊邪那岐の産みし島

鞠月

こちらは古事記の世界ですね。「此れ伊邪那岐の産みし島」はまさに日本列島。「蘆の角」の泥の雫がぼたりぼたりと落ちて、我が島々が産まれたのだなあと、高い視点、神の視点から見下ろしているような一句です。

蘆の角生え初め痒し中つ国 とおと「中つ国」とは、日本列島のことであり、黄泉の国との中間にある国という意味もあるようです。「蘆の角」が「生え初め」と「痒し」という発想が愉快。あのツンツンした「蘆の角」が一斉に我が体に入ると思うと、それもまた春らしいモゾモゾした実感です（笑）。

蘆牙や光湛える汚染水 土井探花

●被災地から遠い我が手賀沼も未だに魚をとつて食べることが禁止されています。／土井探花

「蘆牙」は「蘆の角」の傍題。上五「蘆牙や」という詠嘆から、中七下五で一気に広がる光景の恐ろしい静けさ。「光湛える」水ならばただ美しい光景ですが、その水が「汚染水」であることの恐怖。

春の息吹を思わせる「蘆牙」との対比、静かな不安がじわじわと押し寄せてくる作品です。

馬の子

天

野良犬の暫く匂ふ蘆の角 葦信夫
近づいてきた「野良犬」の饞えたような臭いを感じ取る嗅覚が俳人ですね。「暫く匂ふ」という描写も正確な措辞。「野良犬」の臭いに鼻が慣れたと思ったら、「蘆の角」をかいていた犬もどこかへ行ってしまうのでしょうか。

檸檬な夢はさみどり蘆の角

あつちやん

不思議な一句ですが、強く惹かれる感覚です。「檸檬な夢」は春のエネルギーのようでもあります。中七の最後の位置におかれた「さみどり」の一語が、それぞれの言葉を送りげなく繋ぐ働きをしている点に工夫があります。

蘆の角村に一人の日本人カリメロ

中国奥地みたいな「村」を想像しました。まさかこんなところに「日本人」が住んでいるなんて！という率直な驚きと、日本の川辺でも見る「蘆の角」の存在とがマッチします。

世界の果てとも思える場所に住んでる日本人を訪ねるTV番組がありますが、ひよっとしてそれを観ての一句かもしれないとちよっと疑り深い気持ちもあります（笑）。

雨の野や馬の子の名はルミエール

東ゆつこ

「馬の子」の出産現場を描いた生々しい作品もあった今週、それらの句のリアリティを推したい気持ちも強かったのですが、今週は取えて、取り合わせた二つの言葉が実に美しいこの作品を「天」に推したいと思います。

「ルミエール」とはフランス語で「光」の意。「馬の子の名」としての美しさはもちろんなのですが、このような名前をつけるということは、生まれた「馬の子」はサラブレッド系ではないかと、想像が動き出します。フランスの牧場を思い浮かべてもいいですね。

「馬の子の名はルミエール」という詩句をさらに美しくしているのが上五「雨の野や」という詠嘆です。「馬の子」が春の季語ですから、この「野」は春草の芽吹き広がる野原です。朝の雨を想像したのは「ルミエール」という言葉の余韻でしょうか。朝の雨が降る明るい野の美しさ。今朝生まれた「馬の子の名」を「ルミエール」と決めた瞬間の感動が、読み手の心にもさざなみのように広がってきます。

やがてこの輝く野を、光のような鬣をなびかせ、光のように疾駆する「馬の子」は、今やつと立ち上がって母馬の乳房に鼻をすり寄せているのでしょうか。

地

羊水の満ちたる小屋に子馬立つ

理醇

嗅いだこともない「羊水」の匂いが鼻孔に押し寄せてきた一句「羊水の満ちたる小屋」という表現に力があります。「子馬立つ」という音の言葉を使ったのは沢山沢山届きました、上五中七の描写によってオリジナリティとリアリティを獲得した作品です。

馬の子の蹄の膜を拭ひけり 蘭丸

これも凄いなあ！テレビ番組で「馬の子」が産まれ落ちる瞬間を観た記憶があるのですが、「膜」とは羊膜ですよ。羊膜が裂けて羊水が飛び散り、その膜の一部が「蹄」に引つかかっているのでしょうか。下五「拭ひけり」の動詞がベストなかどうか、そのナマの現場を知らないで微妙な判断になりますが、さらに生々しい動詞が存在しているような予感がします。

馬の子のしとどのめり拭きにけり 木 よし

こちらはまさに「拭きにけり」でしょう。「しとどのめり」とい

う言葉がいかに産まれたばかりの感触です。「拭きにけり」というゆつたりとした語調の詠嘆が、無事に産まれてきたよ、という安堵と喜びを表現しています。

シエパードに臭ひ嗅がれてゐる仔馬

ボメロ親父

一句に2種類の生き物を詠み込むのは難しいテクニックなのですが、それをさらに言葉にしているのが巧いですねえ！「シエパード」の好奇心、まだ警戒心の欠片もない「仔馬」の表情。これから一緒に暮らす仲間同士の初対面のワンシヨットです。

脚と胴まだ馴染まずに馬の子よ 笑松

「馬の子」が足をがくがくさせながら立ち上がる姿や、ぎくしゃく歩きだす様子を詠んだ句は沢山届きました、脚と胴まだ馴染まずに」という発想が愉快！しかも読み手を納得させるオリジナリティとリアリティを獲得しているので、作品として揺るぎがありません。

馬の子の離す乳首の濡れてをり

やのたかこ

よく観察したなあと思います。「馬の子」が立ち上がって「乳首」を吸い始めるところからじつと見つめていてこそ小さな発見です。ユーチューブ吟行かもしれま

せんが、そこからこのような細部を見いだせる想像力もまた実力のうちです。

光るまで梳らるる仔馬かな 登美子

産まれて、立ち上がって、おっぱい吸って、その後の場面でしょうか。「光るまで梳らるる」という描写がきちんと映像を確保していますし、「くまで」の二語に産まれた喜びも溢れています。下五「仔馬かな」の詠嘆もさりと利いています。

馬の子の瞬くたに跳ねる空ミル

「馬の子」で、「跳ねる」という動詞を使った句も沢山あったのですが、この句の工夫は「馬の子」ではなく「跳ねる空」とした点です。「馬の子」がああ大きな瞳を瞬かせるたびに、頭上の春空が「跳ねる」かのようにだよ、という詩句に魅力があります。

詩を生み出すテクニックはさまざまありますが、「馬の子」が跳ねる↓跳ねるのは空」と二ひねりする方法、皆さんも挑戦してみてください。

空青し馬の子圧し潰さむと くらやぎ

「馬の子」を「圧し潰さむと」ばかりに「空」が「青」いよ、という発想に驚きます。先ほどの句の「空」は軽やかに跳ねていまし

たが、こちらは癡猛なまでの明るさをもった「空」。春の爆発的なエネルギーが満ち満ちている「空」です。

発想のオリジナリティが、詩的リアリティを引き出してくるというタイプの作品。楽しませてもらいました。

第61回 2014年4月14日週の兼題

巣箱

天

空つぽの巣箱やまびこ入り込む

不知火

「巣箱」に鳥がいない、鳥が入ってくれない、という発想の句は沢山沢山ありましたが、その「空つぽ」の「巣箱」には「やまびこ」が入り込んでいるんだよ、という発想が楽しい一句です。「やまびこ」を単純に擬人化しただけではない、詩的真実がそこに描かれている点も誉めたいところです。

「巣箱」が掛けられた森に一歩足を踏み入れると、自分のかすかな足音さえも小さな木霊となって響きわたっていくような静けさ。頭上に掲げられた「空つぽ」の「巣箱」に入り込んだ「やまびこ」たちは、いたずらしたくてクスクスとこちらを盗み見てるに違いありません。

実は「巣箱」と「やまびこ」の

句、他にも二句ありました。（昨日の「人」選に入ってますので、どんな句か確認してみてください。）

ほぼ同じ発想の句があるとはいえず、句中ここしかないという位置に、これしかないという言葉が的確に置かれていますので、一句に揺るぎがありません。中七「巣箱やまびこ」というリズムも声にだして唱えると、実に気持ちのよい調べ。一読、覚えてしまえるのも秀句の条件ではないかと思えますよ。

地

淋しき木淋しき巣箱ひとつ抱く

雪うさぎ

季語「巣箱」から、「希望」という言葉を連想する人もいれば、「淋し」という感情を想起する人もいるようです。これまた昨日の「人」選・並選を丁寧に読み返していただと、分かりますね。

「淋しき木淋しき巣箱」というリフレインが短調の韻律で読み手の心に流れ込んできます。下五「ひとつ抱く」の「ひとつ」は淋しさの感情に繋がり、「抱く」という動詞の向こうにはのかな希望めいた感情が読み取れなくもない作品でした。

巣箱吊る講師役場の係長

ボメロ親父

子どもたちの野外学習でしようか。大人たちも参加しての森を守る

るボランティア活動かもしれませんね。「役場の係長」は森を愛する公僕。「講師」は公私半々、喜んで引き受けてくれたのでしょうか。子どもたちへの説明はお手のもの、賑やかな質問の声も飛び交ってそうですね。

一つづつ巣箱を持ってバスに乗る

中谷麗夢

非常にシンプルな言葉しか使っていないのですが、状況がはつきりと描写できている点を誉めたいですね。「一つづつ巣箱を持って」です。それから、子どもたちが（あるいは大人も）自分の作った「巣箱」を「持って」、これから巣箱を掛けに行くのだということが、ちゃんと読み取れます。下五「バスに乗る」は、ワクワクした期待感も伝えてくれますね。一人一人大ききの違う「巣箱」を大切そうに膝に置き「バス」の座席に座っている様子が、生き生きと浮かんできました。

金次郎巣箱の番を頼まれる

八木ふみ

人名がでてきました。実在の「金次郎」さんと読むよりは、校庭のどこかに設置されている二宮金次郎像だと読むほうが楽しいですね。イマドキの学校には置かれてないのかもしれませんが、一昔前は薪を背負いながら本を読んでいる「金次郎」さんの像は、どここの

学校にもありました。

働きつつ本も読んでいる彼なのに、「巣箱の番」まで頼まれたらこりや大変だね〜という俳諧味の一句。千句集まった投句の中で、この発想は一句だけでした〜（笑）。

巣箱不在エアロスミスの漏れる庭

Blanca

「エアロスミス」はハードロック・バンド。「漏れる庭」ですから、閉ざされた窓の中では彼らの曲がガンガンかかっているのでしょうか。くぐもった音と、相変わらず鳥の入っていない「巣箱」のある庭。「巣箱不在」の一語から、高い梢に掛けている「巣箱」というよりは、庭先の低い木あるいは庭先のテーブルめいたものの上にボーイと置かれたままの「巣箱」を想像しました。空虚な昼下がりの訪問を、こんなふうに切り取ることができるのだなあと感心した作品です。

巣箱より盛んに巣箱小さいと

ミル

この発想も楽しい！「巣箱」があつて、その中から鳥の声がしていただけなだけ、鳥の言葉が分かる人には、ちゃんとこんなふうに聞こえるってことだね。「盛んに巣箱小さい」という言葉の愉快が、絵本のページのような味わいになりました。これもまた「巣箱」という季語の持つ魅力の一つですね。

じき父の野鳥の本と巣箱かな

誉茂女

「亡き父」の部屋を片付けている場面を想像しました。父にもこんな趣味があったのかと微笑ましい驚きをもって「野鳥の本」や「巣箱」を手に残しているのか、はたまた鳥が好きで毎年新しい「巣箱」を作っていた父を偲んでいるのか。下五「巣箱かな」の詠嘆に作者の心が溢れます。

白樺に妻の掛けたる巣箱かな

山歩

小説やアニメ映画の中にそんな場面はなかったとは思いますが、「風立ちぬ」の世界を思わせるような作品です。「白樺」の措辞で光景を、「妻の掛けたる」で場面を、さらに下五「巣箱かな」でクローズアップの映像を描く、このカメラワークが巧いですね。

今年も鳥は来てくれるかしらと笑う「妻」の笑顔がそこにあると読んでもいいし、一人の春を迎え亡き妻を思う一句だと読んでもいいでしょう。

吾に妻あり森に巣箱のあるやうに

ヤスハル

なんと美しい妻恋の一句でありましょうか。「巣箱あるやうに」が比喩になっているので、季語としての力が弱いと考える俳人もいます。ですが、この比喩の向こうには鳥たちが恋を語る春の気分は

十二分に読み取れると、ワタクシは思います。

「吾に妻あり」の誇らしげな語り、「森の巣箱があるやうに」という愛の賛歌。嗚呼、世界の夫たちよ、この句を愛唱して下さい。そして、世界の妻たちにこの句をつぶやいてあげて下さい（笑）。

第62回 2014年4月21日週の兼題

蛭鳥賊

天

酒ほどの薬有ろうか蛭鳥賊 鞠月

酒飲みの一人として、「酒ほどの薬有ろうか」という台詞にまずはやられます（笑）。酒は百薬の長とも言いますから、酒飲みの言い訳と決めつけるわけにもいきませんしね。

下五の季語は動くか？と一瞬思ったのですが、いやいや「蛭鳥賊」といえば富山、富山といえば薬売り……と連想をなぞっていけば、おおなるほどこれは富山という土地へのご挨拶でもあるのかと合点がいきます。富山の薬売りは有名だけれど、それにも勝る美味しい酒がある。そしてその酒を引き立てくれるのが、春の味ともいえる当地の「蛭鳥賊」であることよ、という賛歌！嗚呼、いいですなあ♪

これから「蛭鳥賊」を食べるた

びに「酒ほどの薬有ろうか」とつばやきそうな、癖になりそうな一句であります。

地

蛭鳥賊800キロの青光り みえ

この数詞の迫力、説得力のある「800キロ」ですねえ！「蛭鳥賊」が「青光り」するという発想の句は沢山ありましたが、数詞の力によって、リアリティとオリジナリティを手に入れた作品です。

蛭鳥賊百年前の星と思う お手玉

「蛭鳥賊」を「星」に喩えた句も沢山ありましたが、「百年前の星」という時空を含んだ比喻が個性的。海底というよりは、汀に打ち寄せる「蛭鳥賊」を想像しました。一見、不要にみえる「〜思う」という措辞は、作者と読者の共感の軸を作る言葉として機能しています。

ボセイドン怒りは青く蛭鳥賊

津葦

ここにも「青」がでてきますが、「蛭鳥賊」本体が青いのではなく、「ボセイドン」の「怒り」が青いのだという発想がいいですね。「ボセイドン」という響きが「怒り」「青」という言葉と響き合い、季語「蛭鳥賊」を強い印象で描きだしている作品です。

ちと惜しいと思ったのが「青く

と連用形になっている点。ここは、中七でしっかりと切るほうが得策かと思います。上五字余りになりますが、「の」を入れてもいいか。「ボセイドン」の怒りは青し蛭鳥賊」

蛭鳥賊死にゆくときの真つ平

クズウジュンイチ

「蛭鳥賊」でなくても「死にゆくときの真つ平」は成立するのですが、「蛭鳥賊」が「身投げ」をする生き物であるという特徴を思えば、このフレーズは切々たる詩的現実を含んでいるなあと納得する次第です。

翅生ゆるくと蛭鳥賊茹でらるる

不知火

たしかに「茹でらるる」ことによって、鱈？の部分のピンと張って「翅生ゆるく」に見えるなあと、その観察に納得。茹でられて、天使みたいな小さな「翅」が生えるのだという、これもまた「蛭鳥賊」という季語が有する詩的現実ですなあ。

句は待たれよ蛭鳥賊山ほど皿に

ももかん

飲み屋での句会を想像。ももかんちゃん、投句締切時間来たよ！いやいや、「句」はちよいと「待たれよ」、今はこばれてきた「蛭鳥賊」を食せずして、一句できるわけがないではないか（笑）。「蛭鳥賊山ほど皿に」の後半の措辞か

ら、富山への吟行旅行かもなあとさらに羨ましく想像が膨らみまして。行きたいなあ、富山♪

仕送りの前借り蛭鳥賊の目玉

雨月

また息子から「仕送りの前借り」催促メールが届いたよ、という場面でしょうか。今日の晩酌の当ては「蛭鳥賊」、両親のつつましい暮らしを知ってか知らずか、全くもつてあの息子め……と思う心に、「蛭鳥賊の目玉」が引つかります。がちと嘔み潰す後味も苦く……。こんな想像をしたのですが、雨月さんは娘さんだそう（笑）。

●娘が金沢で一人暮らしをしています。普段はまったく音沙汰なしですが、お金が足りなくなると連絡してきます。きつとそのお金で蛭鳥賊を食べていると思います。／雨月

蛭鳥賊ほどと灯油の尽きる音

やのたかこ

春とはいえ、まだまだ寒い北の国。ストーブの「灯油」が「ほど」と「尽きる」「音」がするという描写が巧いですね。漁具の作業小屋のような場所を想像したのは、「蛭鳥賊」という季語の力でしょうか。作業を終えて、ストーブで燗した酒をすすりつつまむ「蛭鳥賊」です。

猫背一族蛭鳥賊囲みある

吾平@我が家は基本酢味噌ですが、わざわざ醬油もときどき。

ははは！一読、大笑い。吾平くんの「猫背一族」ネタは今までもあったけど、「蛭鳥賊」は絶妙な取り合わせですな。小さな「蛭鳥賊」を「囲みある」という構図も愉快。市井の生活の悲哀のようなものも滲み出て、愛さないではいられない一句でした。

第63回 2014年4月28日週の兼題

ライラック

天

母いまも内地と呼べりライラック

雪うさぎ

今週の「天」悩みました。「ライラック」の5音に対して「リラ」ならば2音。「リラ冷」は、その気温のほうに軸足がある傍題かとも思い、あれこれ悩むことしきり兼題「ライラック」を使っている

句から選ぼうと決めました。北海道が持つ歴史の中において、この手の類想があるのかもしれないと思いつつも、「母いまも内地と呼べり」というたった12音の措辞が内蔵する物語の深さに、やはり肯くしかない一句です。

この「母」を開拓時代を生き抜いてきた母だと読むか、祖父祖母の体験談として聞いてきた比較

的若い母だと読むか。「内地」という言葉に対する認識は、時代と共に移ろっていくのだろうと推測します。「内地」という言葉への郷愁と反骨の入り混じる世代にとって「ライラック」が美しく咲けば咲くほど、「内地」への複雑な思いが募るのかもしれない。

「いまも」に籠もる感慨、「呼べり」の完了の意味の効果、それぞれが適切に機能している作品です。

地

リラ冷えや遺跡の街に水売人

登美子

「リラ」はヨーロッパ東部の山野に自生する植物だということですが、そこにはこんな「遺跡の街」もあるに違いないと。「水売人」という言葉が異国情緒をかきたてます。「リラ冷えや」という詠嘆が、売られる水にもひたひたと響いてくるような味わいです。

リラ冷えの空にスーザのマーチかな ウルトラのはとこ

「スーザ」という作曲家は沢山の「マーチ」を作りましたが、すぐに思い当たるのが『星条旗よ永遠なれ』運動会には必ずかかる定番の二曲です。意外な取り合わせだなあと考えたのですが、調べてみると以下のようなエピソードもありました。

【日本へは明治23年に米国人宣

教師サラ・クララ・スミス女史が生まれ故郷のアメリ力から持ち込んだ1本が、はじめとされていきます。」「リラ冷えの空」は故郷アメリカに続く空でもあります。

瑠瑠の白の水差しライラック

やのたかこ

「瑠瑠（ほうろう）の水差し」といえば「白」は不要ではないかと悩んだのですが、いやいやこの「白」の二字が季語「ライラック」の色合いとの対比となるのだから、捨て石の働きをする一字と考えてよいのではないかと、納得。シンブルなモノとの取り合わせですが、季語を十分に活かしています。

通訳を待ちたるホテルライラック

蘭丸

「通訳を待ちたるホテル」で状況がありと分かるのが巧いですね。季語はいかようにも動くと言われれば、その通りですが、「ライラック」の咲きあふれる異国の街の情緒はたつぷりと伝わります。ヨーロッパの上品なホテルを想像しました。

領事には五人の娘ライラック

るびい

「領事には五人の娘」のなんと豪華なこと。「ライラック」の花のように匂やかな娘さんたちなのでしょう。「領事」の一語がその背景となる洋館や、そこで開かれ

るパーティーのイメージを広げていきます。

リラ香る三輪明宏の声のごと

ハラミータ

「リラ」の香りを様々に詠んだ作品は沢山とどきましたが、この比喩には完全に意表を衝かれました。NHKの朝の連続テレビ小説『花子とアン』のナレーションを「美輪明宏」さんが担当してらっしゃいますが、濃厚な薫りが漂うような声は、そうか「リラ」だったのかと、痛く共感した次第です。

ライラック宛名は夏目鏡子様

ミル

人名との取り合わせとして、これも意外性がありました。「夏目鏡子」は夏目漱石の奥さん。悪妻として有名になってしまいました。が、この時代の良妻のイメージから少々逸脱してただけではないかと推測しております。漱石は留学先から「夏目鏡子様」としたためた手紙をたくさん送っていたようです。異国の地で妻を思いつつ手紙を書く男の心持ちに「ライラック」の花の香が似合います。

リラ咲いて石炭船の霧笛かな

みなと

「リラ」「石炭船」「霧笛」という三つの単語から、イギリスの港を思い浮かべました。「石炭船」「霧笛」が暗いトーンの季語「石炭

「霧」をイメージさせつつ、「リラ」という季語を主役に立てている点を誉めたい作品。「リラ」の花の向こうに、薄暗く沈んだ港が見えてくる遠近感の作り方も巧いですね。

第64回 2014年5月5日週の兼題

天

藤椅子

藤椅子や追伸に山青きこと

ハラミータ

「藤椅子」という季語の成分として「涼感」はかなりのパーセンテージを占めるのだらうと思います。今回届いた千句余りの句を分析してみると、季語の本意である「涼感」を描こうとしたものと、季節感というよりは「藤椅子」に座った時の実感（あるいは「藤椅子」の在る場において発生する実感）を詠んだものと、大きく二つに分かれることに気づきます。

今週の「天」に推したこの一句は、明らかに前者ですね。ゆったりと「藤椅子」に座っている人物の手には葉書があり、その「追伸」には「山」がとても「青」いことがしたためられているというのです。避暑にかけている家族からの便りでしょうか。外国に赴任している息子が娘からの手紙かもしれない。

「追伸に山青きこと」としか書かれていないのに、この人物が自分の宛の葉書なり手紙なりを手に入れていること、その内容が十分に涼やかであること、座っている「藤椅子」の感触が「追伸」の内容を実感させるかのような内容であることが、ありありと想像できます。

さらにもう一つの読みがあります。「追伸」を書いている人物が「藤椅子」に座っている人物であるという読みです。避暑に訪れた山々の「青」の清々しさに心が洗われんばかり。旅の思いを家族へ友人へ友人へ伝えたいくなるのは、当然の心持ちでしょう。「追伸」を書き終えて、座り直すと「藤椅子」は静かに軋みます。その軋みもまた心安らぐ旅の実感でありましょう。いずれの読みをとるにしても、佳い時間を過ごしているのだなあとこの句が、「藤椅子」の涼感と触れあいます。

地

藤椅子に腰かけ八重山の時間

ボメロ親父

この句には、季語に対する涼感と実感が共存しています。「八重山の時間」という表現は、南の島という場所、そこに流れるのんびりとした時間を伝えてくれます。一瞬ムダな言葉かと思わせる「腰かけ」も、句中の人物のゆったりとした動作を映像として描写してい

ますので、必要な言葉であることに気づきます。

「藤椅子」の周りに流れる「時間」の実感と、南の島だからこそ「藤椅子」の涼感が同時に表現された作品です。

藤椅子に今日いちにちの女帝となる

とおと

こちらも「藤椅子」に腰かけた時の実感と涼感が共存している作品ですが、実感のほうに心持ち強いでしょか。

「今日いちにち」の仕事を終え

どっかりと「藤椅子」に座る瞬間がこの人物にとっての最高のくつろぎ。「今日一日の女帝となる」の実感に強い共感を受け止めます。「藤椅子」を持つゴージャスな気分が「女帝」という比喩への発想となったのかも知れませんが、現実的には一家の主婦が「今日いちにち」の家事雑事を終え、やれやれと座っている光景でしょうから、「女帝」という言葉とのギャップも愉快。いやいや、主婦は「一家の女帝」ですよ、と読めばその思いもまた愉快です。

藤椅子やさしもの父に日暮れきて

青菊

涼感というよりは、実感の強い作品です。「やさしもの」とは「さすがの。あれほど大した」を意味する連語です。さすがの父にも日暮がきているよ、という意味にな

ります。

廊下の定位置に置かれた「藤椅子」に日がな一日座っているのが年離れた「父」の仕事。毎日毎日なにを考えているのか、飽きることはないのかと思うほど、身じろがないままじっと座っている「父」。その「やさしもの父」にも「日暮がやってくると、のっそりと」藤椅子から立ち上がり、夕餉の席へと向かうのでしょうか。

「藤椅子」のある場面には、こんな「父」も存在しているに違いないと思わせられた作品です。

藤椅子に居なければ床屋じゃないの

雨月

これも実感の一句。あれ？お父さんいない？「藤椅子」に座っていないとすれば、トイレか「床屋」じゃないの？という会話がそのまま一句になりました。先ほどの青菊さんの描く「父」の周辺にもこんな会話があるに違いないと、ダブルで共感した作品です。口語の語りが実感に満ちていて、さりげなく巧いですね。

「風立ちぬ」読み終え深く藤椅子へ

マーベーター

「藤椅子」で読書をするという発想の句は沢山とどきました。が、「風立ちぬ」は嵌まりすぎるほど似合っている選択。この取り合わせだけだとやや物足りないのです

が、後半「深く藤椅子へ」という描写を誉めたい作品です。「読み終え」という動作から、「深く藤椅子へ」という動作の流れが滑らかで、映像を言葉にするというのは、こういう描写のことをいうのだと思います。「へ」の二字の効果が大きいいことは言わずもがなです。

藤椅子の日課となりぬ双眼鏡

樫の木

別荘のベランダに置いてある「藤椅子」かしらと想像しました。夏を過ごす避暑地の「日課」として「双眼鏡」を手にするようになったという一句。他人の別荘を覗いているわけではないですよ（笑）、バードウォッチングだと読みたいね。涼しい山の風を浴びながら、今日来ている鳥たちの姿を探す。優雅な避暑の日々です。

藤椅子と床に豚児の一と二

葦信夫

こちらは全く優雅ではない「藤椅子」です（笑）。「豚児」とは「自分の子どもをへりくだって言う言葉」。涼感を主たる成分とする季語「藤椅子」が置かれている「床」には、「豚児」が寝そべっています。木の床は涼しいですから、お昼寝の布団から転がり出したまま寝ている様子を想像しました（笑）。その「豚児」も「二と二」と転がっているという光景のなんたる愉快！「藤椅子」をこんな視点か

ら描くかと、驚いた作品でした。

藤椅子で養命酒爺様は年上が好み

日暮屋

涼感めいたものはどこにもないな、こりゃ。なんとも暑苦しい「爺様」が見えてきて、一読爆笑してしまいました。「藤椅子」で「養命酒」を舐めながら、デイサービスで知り合った「年上」の彼女の話を話しているのでしょうか。「藤椅子」がここまで涼しくない句は滅多にないだろうと思います。が、逆説的な意味で「藤椅子」という季語を認識させてもらった怪作であります（笑）。

守宮

第65回 2014年5月12日週の兼題

天

伽藍炎上守宮は何を見ていたか

塔山音絵

佳句が多かった今週、嬉しい悩みを続けました。迷いに迷った末に、このドラマチックな一句を推すことにしました。

「伽藍」とは「1 僧が集まり住んで、仏道を修行する、清浄閑静な場所。2 大きな寺・寺院の建物」と二つの意味があります。が、この場合は2の意味だと解するのが妥当でしょう。寺の「守宮」を描いた句もありましたし、「守

宮は何を見ていたか」という発想も沢山あったのですが、上五が違うだけでこんな光景も描けるのですね。

七塔伽藍の並ぶ大きな寺院。その「伽藍」の一つが「炎上」する凄惨な場面を、「伽藍炎上」の7音で一気に言い放つ迫力。上五の字余りは凄みをもって読み手の脳裏に流れ込みます。火の手と煙の匂いにいち早く気づいた「守宮」たちは、ザワザワと逃げ始めるのでしょうか。「伽藍」に住む数知れない「守宮」たちは小さな声で囁き交わしながら、危険を知らせ合っているのかもしれない。闇の中を走り出す「守宮」たちの背後には「炎上」の火が迫ってきます。ひよっとすると「守宮」の群れの中には、出火の顛末を覗き見た一匹がいるのかもしれませんが。その一部始終は「守宮」の言葉で群れの噂となってヒタヒタと広がっていくのでしょうか。

三島由紀夫著「金閣寺」炎上の場面が、一句の背後に立ち上がってくるような作品でした。

地

はめ殺し窓の守宮の五指ねばし

うに子

「窓」に張り付いた「守宮」を描いた句はそりゃあ沢山あったのですが、「はめ殺し」という言葉と下五「ねばし」という形容詞の

取り合わせが、作品世界を深めます。ぺつたりと張り付いて「守宮」の「五指」が生々しい臭いをもって息づいています。

白壁を腰振り走る守宮かな

富士山

「白壁」と「守宮」の句も沢山ありましたね。が、中七の「腰振り走る」は率直な写生の言葉。獲物を狙う時は微動だにしない「守宮」ですが、いざ逃げるとなるとまさにこんな動きをします。観察することは、作句における基本中の基本です。

土の上落ちて守宮の速からず

八十八

これも観察の句。白壁や窓硝子に張り付いている時はあんなに素早いのに、「土の上落ちて」しまうと、モタモタと動いていてではないかという小さな発見。「遅し」ではなく「速からず」という言葉の選択もまた「守宮」の動きを的確に表現しています。

お悔やみの玄関灯の守宮かな

とうへい

「玄関」辺りの「守宮」を描いた句もありましたが、「お悔やみの」という限定が「玄関灯」の心理の色合いを表現している点に工夫があります。訪れた家を包む悲しみの気配が「玄関灯」にも及んでいるのでしょうか。その「玄関灯」

に張り付いた「守宮」の姿が強い印象となつて刻まれる一句です。

喪主未だ決まらぬ窓の守宮守宮

大塚迷路

こちらも喪の家の光景ですが、さらに複雑な事情がありそうです。喪主未だ決まらぬ」とは一体はどういう状況なのでしょう。親族が集まり、様々な思惑の錯綜する中で喪主の務めを譲り合っているのか取り合っているのか、故人は身寄りのない人で、遠い親戚がいたような話は聞いているがその人と未だに連絡が取れない……という事情でもあるのか。

かなり複雑な状況を「喪主未だ決まらぬ」で語ってしまえるのがベテランの技術。下五「守宮守宮」のリフレインが、うんざりとした気分にも似合っています。

解体は明日や守宮へ最敬礼

このはる

「守宮」は家を守ってくれるのだから殺してはいけない、という発想の句も沢山沢山沢山ありました（笑）。が、それをストレートに述べるのではなく、このような状況での「最敬礼」という言葉で表現できるということ、大いに学びたいですね。

「解体」という一語の言葉の経済効率も見事。さらに「解体は明日」という措辞から、この家で過ごす最後の夜であることも分か

ります。「ゝや」の切字から、「守宮へ最敬礼」と展開する切れ味もいいですね。うっかり「に」にしがちなところですが、助詞「へ」の選択も確かです。

守宮這ふ速度で家の古びけり

十猪

同じ発想の句がもう一句あったのですが、「守宮這う速度」という叙述が巧いですね。「家」が古びていく時間の意識を、その「家」に住み着いている「守宮」の這う速度に変換したところに工夫がありました。下五「古びけり」という詠嘆が、一句の内容をしつかりと受け止めています。

神棚に置く臍の緒や守宮鳴く

ハラミータ

「神棚に置く臍の緒」は、小さな桐の箱に入っているのでしょう。生まれたばかりの子どもの健康と成長を願っているのだらうと、中七の切字「や」までは、そう読みました。が、下五「守宮鳴く」が目に入つたとたん、代々生まれた子の「臍の緒」が幾つも幾つもの神棚には供えられているのではないかと、思えてきました。

仮に下五に「柿若葉」のような季語を入れた場合と比較してみると、その違いに気づけるのではないかと思います。

守宮ゐてわが胸底のぬらぬらす

牛後

「守宮」が家を守ってくれる益虫であると分かっている、どうしても好きになれない人も多いのでしょう。「守宮」を見る度にざわつく心をこのように表すこともできるのですね。

「わが胸底」に起こる摩擦を「ぬらぬらす」と表現することで、「守宮」という生き物の存在を際立てる、そこに巧さのある作品です。

指の血を洗ふ浴室守宮鳴く

中原久遠

「浴室」の窓に張り付いた「守宮」を詠んだ句も沢山ありましたが、「指の血を洗ふ」という状況を附することによって、「守宮」の持つ不気味な気分が助長されます。「指」から「血」が出ている状況とは何があったのだらうと、想像が動き出します。「血」の生臭さが「守宮」の声にも及んでいくかのような感触です。

焚惑は冷たき星よ守宮這ふ

ヤスハル

「焚惑（けいわく・けいこく）」とは火星のことなのだそうです。私も初めて知りました。火星が冷たく光る夜「守宮」はゆつくりといつもの窓にやってきます。窓越しに見える「守宮」と「焚惑」はお互いの存在を知りつつそこにじつと居るのであります。

物売りと守宮と神と雨のバレ

とおと

「バレ」とはバリ島のあずま屋のことなのだそうです。言葉の意味が分かれば、光景も一気に立ち上ってきます。「〇〇と〇〇」という並立の型は、ややもすれば安易になりがちなので、カンタンそうに見えて要注意の型なのですが、それを見事に成立させている手腕も鮮やか。「物売り」「守宮」「神」「雨のバレ」が、バリ島の光景としてありありと見えてきます。

満点じゃない日守宮が待っている

だいい

小学生俳人だいいちゃんにとつて「満点じゃない日」ってどんな日だろう。テストの「満点」だと読んでもいいし、いつもは「満点」の楽しい日ばかりなのに今日はちよつと嫌なことがあった……読んでもいいね。重い足取りでたどり着いた家の玄関には「守宮」が張り付いているのでしょうか。

日の本は戦はぬ民守宮寝ぬ

みなと

近隣諸国との間で、きな臭い状況が続いている「日の本」の国。「日の本は戦はぬ民」という宣言を大きな声で叫びたいメッセージソングです。先日新聞にも集団的自衛権についての論説がかまびすしく紙面を埋めておりましたが、私たちは「戦わぬ民」として何を

どう決定し、どう発信していけばよいのか、考えさせられるばかりです。

「守宮寝（いぬ）とは、守宮も寝静まった夜の深さを表すと同時に、平和への混沌たる闇を表現しているとも読めます。

赤坂の女将と守宮口固し あらた

ちょっと笑ってしまいました。「赤坂の女将」という限定が、さまざまな密会を思わせるのでしうか。政治的な密会、談合のための密会、男女の密会：人に知られたくない様々な場面を思えば思うほど、「赤坂の女将と守宮」という取り合わせが、皮肉な面白さとして広がってきます。「口固し」とはいえ、「守宮」もかすかに鳴きますから、この「女将」がかすかに漏らす情報が政局を左右することになったりもして…と勝手に深読みもまた。

第66回 2014年5月19日週の兼題

麦

天

星々は麦の隣人幾久しく こま

ハードルが幾つもあつた兼題「麦」でしたね。「麦」の二字が入っていいというわけではなく、夏の植物のジャンルとして使われていなくてはいいけないこと、さら

に「麦」を秋の植物「稲」に置き換えても成立する？！となると、これまたアウト。

様々な困難を越えて（笑）、悩みながらの選句となりましたが、その中から浮かび上がってきたのが、この作品。まさに「麦」ならではの詩的世界が描かれています。

まずはなんと言つても「星々は麦の隣人」というフレーズがいいですね！「麦」はメソボタミアの時代から、人類と共に生きてきた命の作物です。ネット辞書によると「テル・アブ・フレイラは古代のレバント東部・メソボタミア西部にあつた考古遺跡。今から二〇〇〇年以上前に穀物を栽培した跡が見られ、現在のところ人類最古の農業の例となっている」とあり、この穀物というのが野生種の数種類の麦だつたのだそうなんです。

農耕が二千年以上前から行われていたということは、我々人類は二千年以上も前から、天体を見ては農耕の時期を図っていたということです。【古来から天体と農耕は親密な関係】との作者こまさんの添え書きのあつた一句ですが、その事実を「星々は麦の隣人」という詩語に言い換えることによって、この12音は詩的真相を獲得しました。

そして、読めば読むほど佳い言葉だなあと感じ始めたのが、下五「幾久しく」という美しい和語。いつまでも変わらないさまを表現

する言葉ですが、この言葉が二千年前から現代へ、そして二千年後へと詩的真相を繋いでいきます。

「星々は麦の隣人」を思いついたとしても、下五は凄く難しい展開だと思つたのですが、よくまあこの言葉を見つけ出したものです！

作者こまさんのコメントの中に「乙女座のスピカは麦の穂ですね」との一文もありましたが、天体に詳しい人は、季語「麦」の向こうに「スピカ」という美しい星の名前を思い浮かべることができのんだなあと、さらなる感銘を受けた作品です。

地

麦の穂や山羊のチーズを切るナイフ

鞠月

「山羊のチーズを切るナイフ」は、まるでアルプスの少女ハイジの世界みたい！です（笑）。

「麦の穂や」は、一本一本の穂麦がアップで映されているような詠嘆。「麦」「麦畑」と比較してみると、その映像の違いが分かるのではないかと思います。「麦の穂」の映像からカットが切り替わり、「チーズ」を切る「ナイフ」の映像へ。そこにはテーブルを取り囲む人たちの笑顔もあるでしょう。「山羊のチーズ」という素朴な味わいが、再び「麦の穂や」という詠嘆を際立てます。

刈れとばかり朝は鳥来る麦の空

ドクトルバンブー

「刈れとばかり」という状況を思う時、「麦」ではなく「稲」でも成立はするのですが、「麦」と「稲」の違いは、夏と秋の違い。「刈れとばかり朝は鳥来る」というフレーズの後に出てくる「麦の空」は夏のエネルギーを秘めた青空です。「刈れとばかり」という言い回しの力強さ、「朝」という時間の爽快感、「鳥」たちの明るい映像が、広大な「麦」の畑とその頭上に広がる「空」を気持ちよく描き出している作品です。

麦の穂の光すずめの白き腹 雨月

この句も「稲の穂」でもいいんですが、そこに「すずめ」とくると、かなりのベタつき。「麦の穂」だからそのベタ付き感が薄れるということとは間違いない事実です。「麦の穂の光」の中に、ちらちらと見え隠れする「すずめ」の「白き腹」を描くことで、映像がより鮮明になります。「麦の穂の光のなかの雀たち」という表現と比較してもらうと分かり易いかと思いますが、「白き腹」を映像として切り取ることによって、季語「麦の穂の光」がさらに鮮やかになるという仕組みの二句です。

芒持てる麦の反骨ありにけり

クズウジユイチ

「芒」は「のぎ」と読みます。【稲

や麦などイネ科植物で、花の外側の穎（えい）の先端にある針状の突起】のことです。

「稲」だつて「芒」があるのだから「稲の反骨」でもいいんじゃないかという考え方もあろうかと思ひます。が、「反骨」という言葉は、より「麦」に似合います。稲作の出来ない北の開拓民のイメージが「麦の反骨」という詩語からにじみ出てくるからかもしれません。「芒」の小さなトゲトゲに象徴される「反骨」という言葉は、北の大地に生きる人間の精神性を表しているのかもしれない。

麦星をはねあげている麦の波

根子屋@麦星IIうしかい座のアルクトウルス

今週の「天」の句と同じように天体に発想を飛ばした作品。「麦星」というのもあるんですね！知りませんでした。「麦星」を跳ね上げるかのような豊かさでゆつくりと風にうねっている夜の「麦」。「はねあげている」という中七の措辞が、広々とした大地の映像へとつながっていきます。

こ東京向かふ埼玉麦熟る

じろ

「ここ東京向かふ埼玉」という地理的な解説がそのまま詩語になるという楽しさ。下五「麦熟る」によって、映像が広がっていくのがニクイですね。俳句ってこ

れでいいのかよ?!というタイプの句ですが、俳句ってこれでもいいです!

麦茎活けてみよ描いてみよ

みちる

自由律で攻めてきた作品。「最初「麦二茎を」として17音に収めようとしたのですが、「を」を落とした方が力があると判断しました」とのコメントも附されていたのですが、この力強いフレーズは作者の意図とおりのものになっていますね。

「稲」でもいいんじゃないの系の疑問をもたれる作品でもありますが、いやいや、実るほど頭を垂れる「稲」とは違い、「麦二茎」は空へ向かって立つ力強さがあります。「活けてみよ描いてみよ」のダブルの命令形を受け止める季語として、「麦二茎」は凜々しき直立の形です。

今日きりか今日きりか麦輝けり

江

「麦」が実る頃を「麦の秋」と呼びます。「麦の秋」は時候のジャンルですから、今回の兼題においてはアウト!でしたが、掲出句のようなやり方で「麦」を描きつつ、麦秋の気分も表現できるのだなあと納得しました。

「麦秋」の麦畑の美しさは言葉にし難いものがありますが、江(ごう)さんは、この美しさは「今日

きりか今日きりか」と毎日眺めているのでしょうか。ある日突然始まる麦刈りまで、「今日きりか今日きりか」と「麦」の輝きに見られる、そんな作者の心理的現場証明がありありと感じとれる作品でした。

第67回 2014年5月26日週の兼題

シャワー

天

九龍の錆吐き出せるシャワーかな

奈津

「九龍」は香港の地名。「九龍」は日本人独特の読みだそうですが、この固有名詞の持つ連想力イメーজ喚起力は、充分に詩語と成り得ますね。

「九龍の錆」とは何だろう?「錆」を「吐き出せる」とはどういう状況だろう?と、我が脳が目まぐるしく意味を探ろうとしたとたん、

下五に「シャワーかな」と季語が出現します。この語順がなんととも絶妙ですね!

なるほど、香港の「九龍」のホテルの「シャワー」から出る最初の水は「錆」の混じった水だったのかと意味が分かったとたん、錆の臭いが我が鼻腔にありありと再生されます。香港を歩き回った一日の埃と汗を流そうとし水に混じる「錆」は、エネルギーシユな香

港の街の臭いのようでもあります。シンプルな表現ですが、一言一句が適切に選択され、ここしかないう位置に置かれているのが、さすがですね。【はるか昔、香港の九龍地区を訪れた時の記憶です。気温も人いきれもムツとする街だった】と語る奈津さん。「シャワー」という季語が引き出してきた鮮やかな記憶の再生です。

地

カンツォーネ歌ってシャワー全開す

渕野陽鳥

「シャワー」を浴びながら鼻歌を歌うという発想の句は沢山ありましたが、「カンツォーネ」の明るさがいいですね。ご機嫌で高らかに歌う「カンツォーネ」の声に、勢いのよい「シャワー」の音が重なってきます。真夏の明るさが「カンツォーネ」の一語に広がっていくかのようです。

目を閉じてシャワーアジアの端の端

塔山音絵

上五「目を閉じて」は、自分自身が目を閉じている気分になりつつも、目を閉じて「シャワー」を浴びている人物をも想像させます。句末がりの句切れから「転、「アジアの端の端」という表現が実に鮮やかです。

【先程、締切前最後の吟行!】(笑)とばかりにシャワーを浴びていた

ら、シャワーからアジアの音(アジアのある地域の音楽というわけではなく、うまく言い表せないのですが、アジアそのものが放つている音、のような)が聞こえた気がして、そのまま俳句にしました」と語る音絵さんの感性が素敵です。

トゥクトゥクに揺られ 時間シャワー浴ぶ

みえ

「トゥクトゥク」とは三輪タクシーのこと。この一語で東南アジアの街の光景が浮かんできます。「トゥクトゥクに揺られ二時間」

観光してきたのでしょうか。街の埃と風を体に浴びての「二時間」というこの数詞が巧いですね。下五の季語「シャワー浴ぶ」が汗と埃を一気に流してくれる爽快感もいいなあ!

立ったまま溺死つかの間シャワー浴ぶ

雪うさぎ

「立ったまま溺死」という言葉にまずは驚いてしましますが、「つかの間シャワー浴ぶ」で、ああ成る程そういうことかと納得させられる、実に言い得て妙な表現です。しかも「溺死」できそうながら水の水量で浴びているのだということも分かりますね。「溺死」してしまいうような心を抱えて「シャワー」を浴びているのかもしれないと、そんな想像も広がってきます。

シャワーぬるし四十の膚をぬたぬたと

初蒸気

「シャワー」という季語には、健康的な爽快感と、退廃的な空気があるのだということを、改めて認識した今週でしたが、この句は後者の気分。「シャワーぬるし」という温度が、中年に差し掛かった年齢「四十の膚」の弛みを思わせます。「ぬたぬた」という擬態語が、この「シャワー」の温度をさらにぬるくしていくかのようです。

シャワー浴ぶアンドロメダを見つけた夜

柳葉魚

「アンドロメダを見つけた夜」は天体観測でしょうか。初めて自分の望遠鏡で「アンドロメダ」を見つけたささやかな興奮の夜なのでしょう。「シャワー」を浴びながら「見つけた」瞬間を反芻する夜。涼しい夜の心が広がっていく一句です。

シャワー浴び女将の顔を見に行くか

笹百合

台詞がそのまま俳句になりました。飲みに行くのではなく「女将の顔を見に行く」という言い回しが愉快です。行きつけの店には、美人の女将がいて、近所の男たちは一日の汗を「シャワー」で流せば、そそくさと「女将の顔」を見に集まってくるのでしょうか。

シャワーお湯になるまでしばし修行せん

カリメロ

ははは！「シャワー」から「お湯」が出るまでのささやかな冷水で「修行」してるってのが、バカバカしくて可笑しい。「しばし修行せん」という勿体ぶった言い方が、二句の味わい。これもまた「シャワー」という季語ならでは一句であることは間違いないね（笑）。

第68回 2014年6月9日週の兼題

植田

天

峠より順に植田の澄んでいく

不知火

難しい言葉の何一つない一句ですが、光景が見事に立ち上がってきます。「峠より順に」ですから、棚田の光景でしょう。「峠」から見下ろす千枚田は、光の鏡のように水を蓄え、夏の太陽を弾いていきます。

一句の描写の実に巧いのは、「峠より順に」澄んでゆく」という措辞です。これによって、田植への作業は「峠」に近いところから始まったことも分かります。千枚田全てに苗を植え終わった光景の中、一句の視点は「峠」から「順に」下っていきます。植え終わった田を点検している農夫でしょうか。よしよし、今年も無事に田植えが

終わったぞと、小さく仕切られた田の二つ二つを眺めながら、下っているのでしょうか。

「峠」の一番上の一番小さな田の水はすつかりと「澄んで」います。下の方の「田」は田植えの泥が沈殿しておらずまだ濁ったままです。毎年見るその光景もまた「植田」を眺める充実感。農夫の視点と一緒に、読者である私たちも、その充実感を味わいつつ共に「峠」を下っているかのような追体験をさせてくれる作品です。

地

一日にして八方の植田かな八十八水の順番が回ってくると、その地区の田は一齐に田植えが始まります。朝はまだ水が張ってあるだけの田だったのに、夕方には「八方」が「植田」になっているという実感の一句。「二日」「八方」と数詞の入った単語を二つ入れた点も工夫ですが、この素直な実感を素直に味わいたい作品です。

何事も無かったようにある植田

笑松

苗を運ぶ軽トラの音、田植機の音が止んでしまえば、そこには「何事も無かったように」広々とした「植田」が存在しているよ、という実感。「何事も無かったようにある」というレトリックが、季語「植田」の本意に直結した作品です。

浮くものもあらん二目目の植田

大塚迷路

田植えの終わった後、所々に苗が「浮いて」しまうことがあります。ちゃんと根付かず倒れてしまう苗です。「二目目の植田」と限定することで、「浮くもの」の姿も見えてきます。現場を知っている人でないと出来ない一句ですね。

差し入れる指に植田の生ぬるし

やのたかこ

浮いた苗の代わりに補充する苗は、田植えの終わった田の隅に活かしておきます。補充の作業は手仕事。「差し入れる指」とはまさにこの作業のことでしょう。昨日の田植えから一夜、田圃はすっかり「植田」の表情です。少し「生ぬる」い水や泥の感触が、いかにもリアル。「差し入れる指に」が感知する「植田」の感触です。

爪の泥濡く倅の植田澄む

関屋

「爪の泥」を濯いでいるのは、田植えを終えた「倅」です。去年までは自分が作っていた田を、今年から息子に任せただけでしょう。心配しつつも、頼もしく思う気持ち。「倅の植田」という表現に滲みます。「植田澄む」という描写も、その心にならっていますね。

近在の寺の護符立つ植田かな あい今週の兼題「植田」の一句、皆

さんそれぞれ挑んで下さいました。自分の作った句の季語を「青田」に変えても成立しないだろうかと、と自問自答してみても下さい。「青田」でもバツチリ意味が通じるとなれば、「植田」という季語は機能しているんだらうか、と疑ってみる必要があります。

例えば、この句。一見、「青田」にしても成立はするのですが、どちらがより良いかと考えると、やはり「植田」でしょう。

田植えの始め、「近在の寺」から頂いた「護符」を畦に立て、お供えをし花を飾り、田の神様に祈りを捧げます。真新しい「護符」の端っこが風に吹かれている「植田」の光景が、瑞々しく広がってくる一句です。

相伝の植田の臍は古墳なり

森ばふ

「相伝」とは、「代々受け継いで伝えること」ですね。自分の家の田として伝えられてきた「植田」の真ん中に小さな「古墳」があるというのです。田圃の真ん中にそんなものがあると、田植機は使いにくいし、煩雑極まりないわけですが、その小さな「古墳」を守ることも「相伝」されているのでしょう。「古墳の臍」という表現が、一句に俳味と映像をもたらします。

この句も、「青田」でも成立するタイプですが、苗が植えられたばかりの「植田」の時期こそが、植

田の臍は古墳なり」を最も実感する期間なのでしょう。むつくりと膨らんだ「臍」のような形の「古墳」に「植田」を渡る風が集まります。

風止みて死海の如き植田かな

クズウジュンイチ

小さな苗がちよろちよろと風にゆれる「植田」の光景は印象的ですが、その「風」がびたりと止んでしまうと「死海」のようだという表現に個性があります。「死海」の光景に似ているというだけではなく、この字面が比喩的イメージをも醸し出します。「植田」という季語の持つ世界を少し裏切ることで、逆方向から「植田」を表現してみたという作品です。

月光の火山灰に静もる植田かな

田中憂馬

これもまた「死海」のように、風の無い夜。「月光」の中に降り続く「火山灰（よな）」は、怖ろしくも美しい光景です。音もなく降り続く「火山灰（よな）」の下に広がるのは「植田」。いとけない苗たちにとって過酷な夜が更けていきます。

螢

天

螢火やキトラ古墳に獸の絵

桜井教人

「キトラ古墳」は奈良県明日香村の古墳。亀虎古墳とも書くのだそうです。ネット辞典には「東

西南北の四壁の中央に四神の青龍、白虎、朱雀、玄武が描かれている。(中略)四神の下に、それぞれ3体ずつ十二支の獸面(獸頭)人身像が描かれていると想定されているが、北壁・玄武の「子(ね)」、東壁・青龍の「寅(とら)」、西壁・白虎の「戌(いぬ)」、南壁・朱雀の「午(うま)」など6体の発見に留まっている」とありますので、掲出句のいう「獸の絵」とは、これらの獸面人身像を指しているのかもしれない。

私たちが入っていくことは出来ない「キトラ古墳」ですが、修復のためにその壁面は剥がされ、キトラ古墳展として公開されているようですし、写真等で壁面の映像を観ることは可能かと思えます。

かつて「キトラ古墳」が封印される前には、この古墳に絵を描いていた人物がいたはずで、古墳の中に灯された松明に、描きかけの「獸の絵」がゆらゆらと揺れていたに違いありません。一日の作

業が終わり、静けさを取り戻した古墳内の闇に、「螢火」が一つ、二つと点滅していく、作者の脳内ではそんな光景がありありと再生されているのでしょうか。

生きて在る「螢」の「火」と、壁面に描かれた「獸」たち。微臭い古墳の匂いと、生臭い螢の匂い。虚の「螢」と実の「螢」。そんな断片がコラージュのように浮かんでくる作品です。

地

濡れ髪にほうたる付けてゐて正気

とおと

自分の「濡れ髪」にふと「ほうたる」が止まったという光景。風呂上がりの「濡れ髪」のまま川辺の「ほうたる」を観に出ていったのか、あるいは家の中に迷い込んできた「ほうたる」か。「髪」に「螢」を縫らせている我が身の姿に狂気を感じつつも、尚も「正気」でいることへの理不尽。女の情念の強靱。

獸めく雨の残り香螢の夜

やのたかこ

長く降り続く「雨」に「獸めく」「残り香」を嗅ぎ取る鼻は、いかにも俳人らしい感知。「螢」の生臭い匂いが、「雨の残り香」に混じっていく実感。「螢の夜」は情緒的に詠まれることが多いのですが、この句のように感覚的に把握

することも季語の本意に迫る一手です。

その骨は恐らくタロー螢散る埋醇

何かの理由で土地を掘り返していたのでしょうか。「骨」のようなものが出てきて、これは一体?!と訝しむ人たちに、「その骨は恐らくタロー」だよと呟いたのは、その家の老人か、その村の長老か。上五中七の呟きだけで、「タロー」の死をめぐる出来事が、読者の脳裏に描かれていきます。「螢散る」の「散る」はやや過剰な動詞かとも思いましたが、「タロー」への格別の思いを表現した言葉かと許容致しました。

鎮守てふ巨石に風と螢火と

田中憂馬

「鎮守」の働きをしている「巨石」を見上げていると、その「巨石」を吹き上げるように「風」が出てきます。そして、その「風」に吹かれて「螢火」が一二つと現れます。上五中七までは昼間の光景かと思わせ、下五「螢火と」で一氣に夜の光景となる構成も巧みでした。

戦争の終つた年の螢かな

あつちやん

「螢」に人間の魂のイメージを込めた作品は数知れずあります。今週もその手の発想の句は沢山届きました。それらの作品とこの

掲出句との違いは、ものを言い過ぎてない点です。

「戦争の終つた年の」と限定された「螢」が想起されているだけ的一句ですが、きつとこの「年」

は「螢」が異常発生していたのではないかと、そんな思いが過ぎります。亡くなった人たちの魂が「螢」になるのであれば、「戦争の終つた年の螢」はいかばかりであつたろう……という思いを、敢えて言葉にせず、「かな」の詠嘆に託すのが、俳句という十七音の極意というものでしょう。

山姥の螢食ろうた口が光る

可不可

「山姥」が「螢」を食べるという発想にも惹かれましたが、それをただの空想にしていけないのが「螢食ろうた口が光る」という措辞です。「螢」なんぞ食べてないぞ!と言いつつ「山姥」の「口」がゆつくりと光り始める光景は、日本版ホラーファンタジー。その口が次第に大きく裂けていつて、作者をも飲み込むのかもしれない。

象の見る夢にもきつと螢飛ぶ

ヤッチー

こちらはまさにファンタジー。あの大きな「象」はきつと「夢」を見るに違いありません。そして「象の見る夢」の中にも、今夜の見事な「螢」の残像が飛び交うに違いありません。

この発想の根底には、今宵の「螢」に感動した作者の思いがたゆたっています。

第70回 2014年6月23日週の兼題

紫陽花

天

あじさいへ孔雀は威嚇するかたち

もね

一読、こんなやり方で「あじさい」のポリウムや多彩な色を表現できると思っていなかったのので驚きました。ただ「天」に推すかどうかさんざん迷ってしまったのは、「孔雀」が羽を広げるのは求愛の行為であつて「威嚇」ではないという事実をさて、どうすればよいか、ということでした。

が、「孔雀」が求愛として羽を広げている行為が「あじさい」への「威嚇」のように見えた、という作者ならではの詩的把握だと考えることも可能ではないか、と思ひ直しました。試みに「あじさいへ孔雀は求愛のかたち」とすれば事実は尊重できるのですが、「孔雀」が「あじさい」をメスだと勘違いした、という句意になりますね。作品の底がやや浅い感じになるのではないのでしょうか。対して掲出句の「孔雀は威嚇するかたち」は、「あじさい」の美しさに対する嫉妬や警戒とい

う意味合いになります。事実ではなく、詩的眞実という意味で「あじさい」の美しさがクローズアップされる作品になるのではないかと、考え直したわけです。

今日はあざやかな色に咲いている「あじさい」に向かって「孔雀がいきなり羽を広げている光景に驚く作者の目には、まるで「孔雀が「あじさい」に向かって「威嚇」しているかのように見えた」と解釈させていただきました。「あじさい」と「孔雀」の取り合わせから生まれた、新しい表現のかたちを

楽しませてもらいました。

地

あぢさゐや利休風といふ湿り

江戸人

「利休風」とは「緑色を帯びたねずみ色」を意味する言葉です。「あぢさゐ」という季語のまわりにある「湿り」を「利休風」の色だよと感知するところに作者の感性が光ります。さまざまな色合いで咲く「あぢさゐ」に対する「利休風」色の対比も、上品な取り合わせ。「利休」の文字面から、茶室に楚々と活けられた「あぢさゐ」を想像させる効果もあるでしょう。

あぢさゐはまだ緑児の爪の色

三重丸

「みどり」は「嬰兒」とも書

きますが、この句の場合は「緑児」という文字面が効果的です。「緑児」は「三歳以下の男児」を意味する場合もありますが、「新芽のような子」の意から、生まれたばかりの赤ん坊」だと読んだほうがいいですね。その「爪の色」のような「あぢさゐ」だよ、という豊かな感動。「まだ」という一語から、これからさまざまな色に変わっていくにちがいない「あぢさゐ」という季語の本意も読み取れます。

ロープウェイは紫陽花の尾根を越え

ボメ口親父

勿論「紫陽花」が「石楠花」であってもいいのではないかと考える人はでてくるかと思いますが、がこの手の作品は「紫陽花」であることの良さ、その光景を味わうべきだと、私は考えております。

「ロープウェイ」がぐんぐん上がっていくと、「尾根」近くは「紫陽花」の群生が広がっています。その「尾根」を越えてみると、さらに「紫陽花」が咲き広がっていると分かった瞬間の感動も想像できました。眼下の「紫陽花」は、美しい色彩の海です。

あぢさゐや炎のやうに古代土器

松本 だりあ

「あぢさゐ」の形に対しての「古代土器」の形。「あぢさゐ」の色に対しての「古代土器」の色。「あぢさゐ」の水のイメージに対する

「炎のやうに」という比喩。それぞれの言葉の効果を非常に巧く配した作品です。ペタランの巧さを感じさせる、余裕のある作品です。

紫陽花の墳墓のごとき果ての村

天玲

「紫陽花」の群生がもはや「墳墓」のごとき「果ての村」の荒涼たる光景。住む人もなくなった「村」の「紫陽花」たちは、手入れもされず剪られもせず、太り放題に太っていく、果ては「墳墓」のよう大きな墓に膨れあがっているのです。これらの「紫陽花」が、やがて枯れきってしまっている光景も、一句の向こうに、静かな迫力をもつて浮かんできます。

あぢさゐや亡き姉だけがものしづか

空見屋

「亡き姉」の写真の前に活けられた「あぢさゐ」でしょうか。「亡き姉」が丹精していた「あぢさゐ」でしょうか。賑やかな家族の光景の中で、「亡き姉」だけが「ものしづか」にそこにいる、という感知は、作者の「姉」に対する思いを切たるものとして、読者の心に伝えます。

風吼えてあぢさゐ乱る崖の家

Muse

「風」が吹くのではなく「吼え」ているわけですから、頭の大きい

「あぢさゐ」は乱れに乱れているでしょう。一瞬、小説「嵐が丘」の光景（あれはたしかヒースの花だったと思いますが）を思い浮かべたものですから、下五「崖の家」という措辞が、かの小説とはまた違った不安を掻き立てる効果で迫ってきました。

あ、そういえば「嵐が丘」の主人公ヒースクリフの名前は、「ヒースの崖」という意味ではなかったかしらん？だとすると、作者MEBさんの発想の根っこも、そのあたりにあったのかもしれないなあ。

日ざらしのあぢさゐ魚は煮詰まりぬ

中原久遠

「あぢさゐ」が「日ざらし」となった光景を描くという視点そのものが個性的なのはいうまでもないのですが、そこに「魚は煮詰まりぬ」という状況を取り合わせる感覚に、軽い驚きを感じました。

瑞々しく水々しい「あぢさゐ」ばかりを読んできた今週ですが、この一句が描く光景もまた「あぢさゐ」という季語の持つ側面に他なりません。

宿す子と紫陽花の丘遠く海

理子

語りそのものが巧いというわけではなく、むしろ拙なるよろしさを味わうべき作品かと思えますが、一句の感覚が非常に瑞々しいですね。我が胎内には「宿す子」がいて、「紫陽花の丘」に立ち、

遠くには「海」も見えるという光景そのものが清々しいですし、生まれてくる子に今日の「紫陽花」の色を伝えたい、遠くに光る「海」の美しさを共に味わいたいと願う、母になる日の心持ちが、素直な言葉で表現されています。好感度の高い作品です。

第71回 2014年6月30日週の兼題

ソーダ水

天

ソーダ水浮かぶ島から制覇せよ

福熊猫

兼題「ソーダ水」の今週、一千近い句を黙々と読ませてもらいました。いろんな意味で悩み多き今週でありましたが、膨大な恋の句に少々ゲツプがでそうになった身に（苦笑）、こんなストレートな一句が飛び込んできました。

「ソーダ水」に対するイメージは、年代によって違うのだろうと思いますが、ワタクシのような五十代の人間にとっては、緑色の液体に缶詰めのサクランボが放り込んである、あれが懐かしの定番。そして、お金や心に余裕のある時は、ささやかな贅沢としてアイスクリームを浮かべた「クリムソーダ」を注文したものです。一読「ソーダ水」の後に出現する「浮かぶ島」って、目の前にあ

る島?と思うのですが、下五まで読み通してみると「浮かぶ島」が「ソーダ水」の中に浮いているアイスクリームの比喩であることが分かります。まずは、この白くて冷たくて甘い「島」から「制覇せよ」という司令めいた表現には、「ソーダ水」を目の前にした愉快があふれていますね。

「浮かぶ島」が、読み手の脳に一瞬、海の光景を思わせる仕掛けは、サブリミナル効果のように一句の世界に作用します。冒険を促すような「制覇せよ」という言葉と相まって、夏という季節を楽しむ心が弾ける作品です。

地

ソーダ水二十の勇気がわき上がる

空清

「ソーダ水」の泡を「わき上がる」「弾ける」という言葉で描写した句はたくさんあったのですが、それを「二十の勇気」だと表現したことで、大きなオリジナリティを手に入れました。泡の一つ一つが「勇気」となつて心に湧き上がってくる。それが「二十の勇気」にまでなつたよ、という表現の楽しさ!これも「天」に推したかった作品の一つです。

沈みたる核桃黒しソーダ水

小野あらた

勿論「ソーダ水」「核桃」共に

季語ですが、見事な強弱のつけかたです。懐かしの定番である緑色の「ソーダ水」に沈められた「核桃」を「黒し」と描写できる眼力の確かさ。この措辞によって、二つの季語の強弱が確定され、映像としてのリアリティも獲得します。ワタクシと同世代の人間が、懐かしい「ソーダ水」に、生きてきた人生の翳りを重ねた一句かと推測していたのですが、蓋をあけてみると作者は大学生!シブイなあ、小野くん。

カナリヤのような人座すソーダ水

あい

「カナリヤのような人」という比喩に惹かれます。「カナリヤ」の黄色というよりは、ツンとおすましているような、それでいて少し淋しげな表情を思いました。そんな「人」の前に置かれている「ソーダ水」は、やはり懐かしい緑色のやつでありましょう。

老婦人ソーダ水召す一部始終

三重丸

この「老婦人」も「カナリヤのような人」ではないかと思えます。「召す」という動詞の選択が巧いですし、下五の「一部始終」で彼女を見つめるともなく見つめている作者の存在が示唆される点も見事。以下、作者三重丸さんのコメントが、この一句にちゃんとパッキングされているなあと感心

しました。

●銀座資生堂パーラー。80歳を有に超える婦人がひとり。注文ストロー捌き、眺める泡、窓外溶けるクリーム…この方の午後は長い。／三重丸

幕間の犯人さがし曹達水

あつちゃん

「幕間」なので劇場を思いました。「幕間」「犯人さがし」の言葉がコンパクトに機能しています。「曹達水」を漢字で書いた効果も評価できます。以下、あつちゃんのコメント、幸運も実力のうちやな(笑)。

●原句は「犯人を占う幕間ソーダ水。送信しようと、入力をはじめた途端、画面に「まくま」は「まくあい」の誤読と吹き出しが現れ再考する羽目に。ソーダ曹達もパソコンでひよっこり変換されたのを採用。パソコンに助けてもらってます。／あつちゃん

白亜紀の大きな骨だソーダ水

ボメロ親父

夏休みの自由研究で出掛けた博物館を想像しました。「白亜紀の大きな骨だ」という口語の表現が、子どもの言葉のようでもあります。見学が一段落しての「ソーダ水」も夏の楽しい思い出ですね。

梅田地下友とはぐれてソーダ水

このはる

「梅田地下」というのが妙にリアルで、笑ってしまいました。友だちと遊ぼうぜ!と訪れた地下街で自分だけがぐれてしまった、携帯電話もない時代の思い出でしょうか。一人でも平気……!と自分を励ますように、一人茶店に入つて注文した「ソーダ水」なのかもな(笑)。

いつまでもメロンソーダの子であたし

はまゆう

今週の選は、どうしても昔懐かしい「ソーダ水」から離れられません(笑)。「メロンソーダの子」とは、お父さんとの思い出ではないかと想像します。時々、娘を喜ばせたくてデパートの食堂で「メロンソーダ」を飲ませてくれた父。「いつまでもメロンソーダの子であたし」という呟きそのものが、四十年前の自分と重なってしまいました。はまゆうさん、同年代ですよね、きつと。

買ひ物の好きなお財布ソーダ水

ミル

ははは!つつい散財してしまふ自分のことはさておき、「買ひ物の好きなお財布」と言い放つてしまふのが愉快です。今日一日で、なんでこんなにお金がなくなつての?!と「お財布」を覗き込む様子が目に見えるような一句。今

日の最後の無駄遣いの「ソーダ水」が買ひ物疲れの喉を潤します。

第72回 2014年7月7日週の兼題

川開

天

水神に火の粉浴びせよ川開

兼題「川開」ある季寄せには「花火大会のこと」と書いてあり、ある歳時記には「水辺の安全を祈願する行事」等とも記載されているわけですから、なかなかの曲者季語でありました。

でも考えてみると、季語というのは、年月と共に様々な情報が蓄積されて季語としての性格を形成していくわけで、そのおかげで俳人たちは少しずつ変容していく季語を、年々新しく詠むことができるのかも知れません。

今週の「天」に推した二句は、「水神」「火の粉」という二つのキーワードで、季語の複雑な性格を表現した発想を強く誉めたい作品です。「川開」という季語の現場にあるのは真つ暗な水。そこには人間の傲慢を罰しようとする「水神」もいるに違いありません。そんな「水神」へむかつて浴びせる「火の粉」は贖罪であり、鎮魂であり、祈りであり、また生きてある喜びでも

あるのです。

中七「浴びせよ」は、そのようなさまざまな思いを凝縮した二語。暗い水面を渡る「火の粉」の映像だけでなく、「川開」という季語への思いも、見事に表現し得ています。この一語の選択が、「水神」「火の粉」「川開」の三語の取り合わせを見事な詩として昇華させたといっても過言ではありません。

地

川開風の臭いの変わる宵 雪花

「川開」という季語に対して、火薬の匂いを詠んだ句はたくさんあったのですが「風の臭い」が「変わる」のだと把握したことで、ささやかなオリジナリティを獲得しました。しかも「匂い」ではなく「臭い」ですから、不快な部分も有している感覚。河童たちが水面に顔を出しているから、風も臭くなってくるのか……なんて想像も広がってきました。

舟すべて静止して待つ川開 じろ

こちらは、花火の始まりを待つ「舟」ですね。「舟すべて静止」という状況を提示し、なぜ?と思うせておいて、「待つ」という動詞を投げ、さらに「川開」という答えを見せる、この語順が巧い一句。特段珍しいことを述べているわけでもないのに、「一句の中に「川開」の光景がありありと広がっていく、

ここいらがベテランの味わいですね。

勿論、下五を「花火の夜」としても成立するのですが、「川開」とすることで、「舟」という言葉との親和性が高くなり、それによって水の匂いや川風の感触がよりリアルに伝わってくる効果があります。

男振佳き橋の名よ川開 ハラミータ

「橋」を素材とした句、「橋」の名を詠み込んだ句も沢山ありましたが、そこをちよいとヒネてきたのがこの一句。「男振佳き橋の名」とはどんな橋の名だろうと、読者は考え始めますが、下五「川開」という季語から、浅草界隈を思い「業平橋」という美男の名を冠した橋の名に思いが至ります。勿論、この橋のみに読みを限定する必要はありません。全国各地の「男振佳き橋の名」に思いを馳せつつ、今宵の花火を見上げるのも一興でありましょう。

橋が人で出来てゐるやう川開

ウルトラのはこ

なんたる率直な感想!思ったことをそのまま言葉にすれば俳句になるかという、それはまた違うのですが、偶にこの句のように成功する幸運に巡り会えます。俳句の神様が下さる贈り物のような一句ですね(笑)。この句も下五を「花火の夜」と

しても成立するのですが、季語「川開」と置くことで、「橋」の欄干にびっしりと縫っている人々へ吹く川風や、橋の下をくぐっていく舟などを想像させることが可能になります。

船頭もきこしめしおる川開き 軌一

これも同様。「船頭もきこしめしおる花火の夜」でも「船頭もきこしめしおる鵜飼かな」でも成立するのですが、下五に「川開」という季語が座ること、この「船頭」としての仕事が忙しくなる季節到来の気分がぐつと高まります。「きこしめしおる」という表現に俳味もほんのり。

川開き岸辺に治水完成図 夢堂

暴れ川と呼ばれ、水難の事故も多い川なのでしょう。「川開」の夜の花火大会の喧噪の中で、ふと目にとまったのが「治水完成図」という看板。「治水完成碑」ならばすでに工事は終わっているでしょうが、「治水完成図」ですから、これから始まるのか、まだ完成をみていないという状況。そうか、この川も変わっていくか、という感慨が作者の胸をよぎります。

川開水の匂へる供花のあり

内藤手皐

この川での事故がまだ生々しい記憶として残っている「供花」でしょうか。何年たっても忘れられ

ない事故の記憶として、毎年「川開」の日に手向けられる花かもしれません。「水の匂へる供花」という言葉の持つ祈りは、「川開」という季語の歴史とも響き合います。

濡れた眼の河童はあの子川開

雪うさぎ

「河童」を詠み込んだ句も沢山ありましたが、この句の怖ろしさにドキツとしました。川で溺れた子たちが河童になるのだという伝承は全国各地にあると思いますが、そんな伝承からこんな一句も生まれるのですね。

「濡れた眼」のクローズアップから始まる一句は、暗く濡れた「河童」の顔となり、背後に広がる「あの子」が死んだ事件となり、今宵の「川開」の花火の残像へと繋がっていきます。美しく怖ろしい一句です。

幾万の耳たぶ垂れて川開

塔山音絵

これも怖い句だと思えます。花火を観に来た「幾万」の人々をじつと眺めていると、なぜみな「耳たぶ」が垂れているのだらうと、気になりだします。人間というのは、気になりだしてくると、それがどんどん昂じてきて、なんで耳というでつばりが顔の側面についているんだらうとか、顔の真ん中によきつと突き出している鼻とい

うヤツは面妖ではないか、と思えてくるものです。

「幾万」の人々は「幾万」の「耳たぶ」を垂らして、花火が始まるのを待っているのでしょうか。それとも、真つ暗な川の面からこの川で死んだ人々の声が立ち上ってくるのを聴き止めようとしているのでしょうか。書いてるうちに、さらに段々怖くなってきた作品です。

青田

第73回 2014年7月14日週の兼題

天

壺のごとき村に青田の溢れけり

初蒸気

「青田」の傍題を使った佳句も色々あったのですが、今週はズバリ「青田」を詠んだ句を選びたいなあと思ひまして、あれこれ選を悩みました。最終的にこの句を推そうと決めたのは、表現としてのオリジナリティです。

まずは「壺のごとき村」という比喩の面白さ。「壺」みたいな「村」だというのは、切り立つた山に囲まれた小さな盆地なのでしょう。このような比喩を思いつくということは、作者は取り囲む山の峠から、眼下に「村」を眺めているに違いありません。壺の底に小さな集落があり、それを取り

囲むように幾百の棚田が上へ上へとせりのぼっているのです。

小さな棚田の一つ一つは、今、真つ青な「青田」となつて風にそよぎ風に光っています。その様子を「溢れ」という動詞で描いた点も見事。「けり」の詠嘆がどつしりと一句を支え、小さな「村」の豊かな光景がありありと立ち上がつてきます。

地

金星は冷まし難きよ青田風

ハラミータ

宵の明星「金星」は「ゆふづつ」とも呼ばれますが、夏の金星はまだ空が明るいうちに光り始める一番星です。

夕風の頃、風はぱたりと動きを止めますが、「金星」がその光を強くする頃には、風が少しずつ動き出します。「金星は冷まし難きよ」は、今日一日の暑さを思い返す言葉であると同時に、夏の夕空に残る暑さの名残も表現しています。「冷まし難きよ」という詠嘆の後に吹いてくる「青田風」のなんと爽快なことでしょう。青空の名残は次第に紫を濃くし、カナリア色の金星は次第にその光を濃くしていきます。美しい夏の夕暮れの「青田」です。

青田風ぐ北斗が水を溢す頃 鞠月

「青田」の風を読んだ句はたくさんあつたのですが、「青田風ぐ」

という表現で、逆に風を想起させる発想がユニーク。夕暮れの頃に止んだ風は、夜になると陸風となつて動き出します。「溢す」は（あぶす）余す。残す。）と読んだのでいいのでしょうか。後半の措辞もまた美しい比喩です。

青田より来る風城を吹き上がる

じろ

ストリートに気持ちの良い「風」が読み手である私たちのところまで吹いてきたかのような作品です。「より来る」という動き、「吹き上がる」という勢いを表現した措辞が、さりげなく巧いですね。「植田」ではなく「青田」だからこそその勢いでもあります。

米つくづく白く研ぎ青田そよいでいる

日暮屋

自由律の飄々たる調べが、一句の内容にマッチしています。「米つくづく白く」の後に「研ぎ」という動詞が入ることで、作中人物の動作が見え、「青田そよいでいる」という措辞で、米から上げる視線も描いています。「白」と「青」の対比も嫌みなく一句に収まっています。

亀がいる青田揺れおるひところ

軌一

「植田」だと水が見えてますから、「揺れおるひところ」という描写は成立しません。まさにこ

れぞ「青田」という一句です。「亀」がそこに入っていくのをずっと観察してたのか、「青田」の揺れをいぶかしんでの推測なのか。いずれにしても興味津々で「揺れ」を眺めている作者の視線が楽しいですね。

稗頭一つ抜けたる青田かな

天宮風牙

「青田」の中に「稗」が生えているのでしよう。そのさまを「頭一つ抜けたる」高さになっているよ、と見たまを描写できた点を誉めたいですね。「稗」をクロースアップすることで「青田」の広がり表現するという発想も見事です。

右に青田左に青田ある遅刻 牛後

ははは！これはまだまだ学校遠いんだろな（笑）。「右に青田左に青田」と光景を描いた後の「ある遅刻」という展開が無条件に可笑しい！息せき切つて「青田」の中を走っているのか、それとも諦め半分で歩いているか、そんな姿も想像できます。

あをによし奈良の青田の息着し

ちびつぶぶどう

「青田」の「あお」という発音を活かしてやろうという発想の句も色々あつたのですが、ここまでしつこくやってしまうと、これはこれなりの作品になってしまうか

ら面白い。下五「息着し」が上五の枕詞「あをによし」に戻っているような気配が、一句の味わいとなりました。

どうと風来てのち青田獣臭し

可不可

「どう」という表現が「風」の重さを表現し、それによつて「青田」の揺れが想像できます。下五「獣臭し」という不穏な措辞は、生臭い台風の前風のするような湿気を思わせつつ、夜になると猪が荒らしにくるかなのような予感も漂わせます。

可不可さんから、以下のようなお便りも。

● 俵万智さんにサザンオールスターズの短歌があり、それを見た中学生が「短歌はいいなあ。俳句でサザンオールスターズ使つたら、あと七音しか使えないよ！」と嘆いていたので、使ってみました。「軽トラのラジオ青田にサザンオールスターズ」どうだ！俳句も自由だぞ！？／可不可

第74回 2014年7月21日週の兼題

蓮

天

蓮眩し輪廻を外れると決めた

鞠月

「蓮」とくればどうしても仏教

的なイメージが付き纏いますから、「極楽・浄土・仏・輪廻転生」等の言葉は類想のど真ん中だろうと推測できます。が、そのど真ん中に飛び込んで、見事なオリジナリティを掴むこともできるのだ！と目から鱗の感嘆です。

そもそも「輪廻」とは仏語で「生ある者が迷妄に満ちた生死を絶え間なく繰り返すこと。三界・六道に生まれ変わり、死に変わりすること」を意味し、三界とは「生まれ、また死んで往來する世界。欲界・色界・無色界の三つの世界」であり、六道とは「衆生がその業によつておもむく六種の世界。生死を繰り返す迷いの世界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道」なのだそうです。

それにしても「輪廻を外れると決めた」とは、なんたる決意でしょう。自分はもう生き死にを繰り返す「輪廻」からは外れよう。生まれたり死んだりを繰り返す「生」に飽き飽きたよ。こんなに「蓮」の眩しい朝に、「輪廻を外れると決めた」と宣言する作者の心にあるのは、それなりによく生きてきたよという充足感でしょうか、それとも清々しい諦めでしょうか。辞書によると、「輪廻」は「執着の深いこと」も意味するのだそうです。ワタクシのこの執着の深き性を捨てよう！という決意と読むことも可能。いずれの読みを取るにしても、「蓮眩し」という上五

の光景は、鮮烈な印象をもって読
み手の脳裏にゆらりゆらりと光を
弾いています。

地

水上に日々の暮らしや蓮の花 雨月

水上生活者と呼ばれる人々の
「暮らし」でしょう。調べみると、
水上生活者とは「広義には、東
南アジア諸地域の河口地帯の水
上生活民、ホンコンの蛋民（たん
みん）、日本の家船（えぶね）な
ども入るが、狭義には、大きな港
湾や大都市の河川運河で、はしけ
に住み、貨物の輸送や荷揚げ作
業に従事する人々とその家族をい
う。」とありました。

掲出句を二読、私は東南アジア
の光景を思い浮かべました。「水
上に日々の暮らしや」という調べ
がゆつたりとしていて、しかも下
五「蓮の花」という季語の出現
によって、丈の高い蓮の花や葉の
間を縫うようにして小舟を操る
人々の様子が想像されるからで
しょう。

後になって、作者からのこんな
お便りを発見。やはり！と納得し
た次第です。

●ミャンマーの観光地、インレー
湖には自生の蓮が群生していま
す。湖の中には水上織物工房があ
り、そこでは、蓮の繊維を撚った
糸を使ってストールなどの織り物
を作っています。かつてはごく一

部の高僧のための袈裟が作られて
いたそうです。／雨月

蓮の華夜明け息づくのをとおと

旧通信のタイガース

「蓮の華」が「夜明け」に咲く
時に音を立てるという説もあり、
そのような発想の句もたくさん届
きました。が、「夜明け」の「蓮」
の近くで聞こえた音が「うを」が
「息づく」音であつたよ、という展
開がいいですね。あ、音がした！
と振り向いて、「蓮」が咲く音で
はなかったか、と「うを」の水輪
を眺める作者の視線や心持ちが
そのまま伝わってくる作品でした。

姫君の悩み白蓮咲かぬ池 ぐわ

「白蓮」という季語に「姫君」
という言葉が寄り添わせたい気持
ちは分かりますが、それを作品と
して成立させるのはなかなか難し
い技。そこを「姫君の悩み」と置
いて、その「悩み」とは「白蓮が
咲かぬ池」のことだと畳みかける
叙述、巧いですねえ。

「白蓮」の群生する「池」は、
王宮の庭の中でもことさら「姫君」
お気に入りの場所なのでしょう。
どうしてだろう、今年はちつとも
「白蓮」が咲かないわ……という「姫
君」の眩きから始まる物語は、一
体どう展開していくのでしょうか。

王国の悲鳴を聞いて蓮開く

ゴマ四郎

「王国」の捉え方によって、一句
の読みはさまざまに広がります。
私は、小さな「王国」が内外の事
情によって翻弄され軋み揺らいで
いく「悲鳴」を、王宮の「蓮」はじつ
と聞きながら、その推移を見つめ
ている、というふうに読みました。

「蓮」という季語から、東南ア
ジアの小さな立憲君主国を想像。
例えばタイ王国のようなイメージ
かなあ。「蓮」が開く時にたてる
と言われている音は、あれは「王
国の悲鳴」なんだよ、という発想
に強く惹かれます。まさか、「王
国」とはワールドカップのブラジ
ルだ！なんて言っては欲しくない
（笑）、魅力的な作品です。

蓮を見て先ゆく舟を見失ふ

やにほ

何艘かに分譲しての「蓮見舟」
です。「蓮見舟」というと人事の
季語の気分が強くなるのですが、
上五「蓮を見て」と打ち出し、そ
の「蓮」の美しさに気を取られて
いるうちに「先ゆく舟」を見失っ
てしまったよという叙述のおかげ
で、「蓮」は植物のジャンルのおか
げとして堂々と表現されています。
同じ「舟」に乗って、大きな茎や
間近に揺れる「蓮」の花に手を伸
ばしているような、追体験として
の感動がある作品です。

蓮にほふ草冠を脱ぐ如く

今野浮儚

なるほど、「蓮」の大きな花は、
花であって花でないかのような迫
力があります。その感覚を「草冠
を脱ぐ如く」と表現するとは楽し
い発想。「草冠を脱ぐ如く」とい
う倒置法が、尚更「蓮にほふ」の
実感を伝えてくれます。

くおんたむくおんたむ蓮ひらく

櫻の木

「蓮」が開く音をさまざまに表
現した作品ありましたが、「くお
んたむくおんたむ」というオノマ
トベの不思議な実感。真言のよう
な響きが、「蓮」の持つ仏教的な
イメージに似合っていますし、「蓮」
自身が開く時、実はポツ！と開く
のではなく、じわじわと音の無い
音で開いていくのではないかと、と
いう気もしてきます。

作者のコメントを読んで、さら
に吃驚の一句でありました。

●蓮は仏教と関連づけられること
が多いですね。蓮を見ていて浮か
んできた言葉や句にしました。と
ころが調べたらこの言葉が辞書に
ありました！Quantum（英語で
量子という意味です。）不思議な
感じがします。／櫻の木

白蓮の手汚れていると思う 空

「白蓮」が清らかに咲いている
から「この手汚れている」と思

う」と我が手をしみじみ眺める感
慨に、静かな感銘を受けます。生
きてあるということは「汚れ」る
ことなのでしょうが、この汚れた
「手」をもって生き続けることが、
人間に与えられた罪と罰なのかも
しれません。

戦争のできる日本蓮揺れる

小木さん

「戦争のできる日本」という言
葉に込められた昨今の時勢への
シブレヒコール。これでいいの
か日本、という自問自答は作者
の胸の中で揺れ続けます。大きな
「蓮」の花が、風にゆらりゆらり
と揺れるさまは、そんな作者の胸
中を象徴する映像として描かれ
ているのです。

第75回 2014年7月28日週の兼題

炎天

天

幾度も炎天を落ち棒高跳 櫻の木
「幾度も炎天を落ち」という不
思議な措辞が、下五「棒高跳」に
よって一気に景を手に入れた時、
なんとまあ美しい落下だろう！と
うっとりしてしまいました。

火曜日「俳句道場」にて皆さん
が書かれていた季語「炎天」に対
するイメージフラッシュ、覚えて
ますか？「暑さだけでは収まらな

「炎天」という響きに通じる「死の匂い」「そこはかたなく寂しい感じ」「影」、このようなキーワードが、季語「炎天」に内包されていると考える時、掲出句の世界がまさに「炎天」の本意の中にあって、独自の世界を構築していることに気付きます。

下五「棒高跳」という言葉が出現したとたん、読者の脳裏には「棒」から手を離し、バーを越え落下し始めるまでの、時間が止まったかのような瞬間がありありと想起されます。「炎天」に近づき「炎天」から落ちる、その繰り返される「落下」は、「炎天」という季語が持つパワーであり、炎帝に我が身を捧げる生贄のような落下であり、落ち続ける寂しさであり、そこには死に似た匂いも感知されます。「幾度も」幾度も眩しい「炎天」の中を「落ち」てゆく跳躍は、自分の「影」という一点に向かって落ちていく美しい恐怖と恍惚でもあるのです。

地

炎天裡釜蒸藤と塩の華

めいおう星

「炎天」という季語を塩田に求める発想の句も色々ありました。が、この句の特徴は字面の工夫。「炎天裡」「釜蒸藤」「塩の華」と画数の多い文字を重ねることで「炎天」の熱を伝えます。最後に「塩

の華」に焦点が当たるという語順も正解でしたね。

炎天にこれより煮出す豚の骨

ボメロ親父

同じ煮る場面ですが、「これより」ということは、まだ煮られていない生臭い「豚の骨」が堆く積まれているのでしょうか。

ちと読みを悩んだのは、「炎天」の「に」です。「や」ではないかとも思ったのですが、野外に持ち出した大鍋で煮る、という可能性も否定できませんし、「や」にすると句としては整うのですが、何か逆に現場の迫力が欠けるような気がするというか…悩んだ末に原句を尊重致しました。

炎天下ギザの水売り声囁らし

公毅

「ギザ」は「エジプト、ナイル川下流西岸の都市。首都カイロの対岸に位置し、クフ王のピラミッドをはじめとするギザの三大ピラミッドやスフィンクスがあることで有名」です。その地で商売をする「ギザの水売り」です。「炎天」という兼題からこの旅の記憶が蘇ってきた一句ではないかと思えます。「ギザ」という短い濁音の地名が、「炎天下」「声囁らし」という言葉に似合っていますし、エジプトの乾いた土が匂ってくるようでもあります。

濁音を吐く炎天の鴉なり 葦信夫

その辺で鳴いている「鴉」だって、「炎天」という季語を感じできる句材です。鴉はいつもいるけれど、「炎天の鴉」は…と限定すること

で、季語をクローズアップした方法にも工夫があります。

「濁音を吐く」が「炎天の鴉」であると分かった瞬間、読者の耳にはあの独特の声がありありと再生されます。「吐く」という動詞、下五「なり」という断定の助動詞もまた的確な選択です。

炎天を報道ヘリの掻き巻る 牛後

こちらも濁音だろうと思います。が、その音の種類を「掻き巻る」と表現したところが巧いですね。「炎天を」の「を」は経過する場所を表現する助詞。この「報道ヘリ」は同じ空域を何度も何度も行ったり来たりしながら、眼下の現場の写真・映像を撮ろうとしているのでしょう。その轟音はますます「炎天」を熱くします。

炎天や鋸引くやうな犬のこゑ

写俳亭みの

同じ音なのに、この「犬のこゑ」の何と痛々しく、不快なのだろうと、軽い驚きを感じました。「鋸引くやうな」という比喩は奇抜なようでいて、強いリアリティも感じ取れます。「炎天や」という切れによって「犬のこゑ」がますます生々しく描かれ、非常に気にな

る作品でした。

恋文の白さで炎天を鳥は

ミル

「炎天」という季語が持つ「力」「パワー」のイメージから、「恋」という言葉を連想したのでしようか。「恋文の白さ」は文字の多い少ないではなく、「恋」という感情の眩しさを表現した言葉だと受け止めました。「恋文の白さ」という比喩が、「炎天」を飛ぶ「鳥」の鮮烈な印象を引き出します。

「炎天の」ではなく「炎天を」としたことで、動きも表現し得た点は、先ほどの「報道ヘリ」の句の「を」という助詞の使い方と同じです。この辺りの選択が巧いんだよね、ベテラン陣は！

炎天やまた突つ立つて太陽の塔

ねこ端石

「太陽の塔」は大阪万国博覧会の象徴のような建造物でした。景気のよかつた頃の日本、怖い物がないような錯覚に陥っていた日本の、ある時代を象徴する「塔」でもありました。

「また突つ立つて」の「また」の一語には、作者自身のあの時代に對する皮肉が込められていると読みます。「炎天」に聳え立つ「太陽の塔」のしかめつ面は、今の日本をどう眺めているのでしょうか。

炎天の角を曲がるとはや戦前

不可

今週皆さんが提示して下さった「炎天」という季語が持つイメージワードをもう一度、思い出してみましょう。「炎天」というのは単に暑い夏の気象状況を述べるだけではなく、ある種のイメージを読み手に想起させる力を持っているのです。

この「炎天」の下、あの「角」を「曲がると」…という提示は、様々なイメージワードを一気に引き出してきます。渦巻く想念の中に、「はや戦前」という言葉は櫻のように突き刺さり、今年の「炎天」をさらに怖ろしいものにしていくのです。

最後に、作者のコメントも附しておきたいと思います。

●こうやってあの夏の続きが始まるのだと思うと、悔しくて恐ろしい。／可不可

夏深し

天

夏深し海の底めく閉架書庫

不可

「夏深し」の「深し」は形容詞【事物の性質や状態などを表す語】ですから、夏が深くなっているという状態を表現しています。「夏

「夏」の傍題に「晩夏」がありま

すが、こちらは「夏の終わり」という時期を指していると考えるべきでしょう。「夏深し」という季語を、どんな場面、どんな場所

どんな匂い、どんな色、どんなモノに感知するか、実に多種多様な「夏深し」が集まった今週でした。さて、掲出句をみてみましょう。映像を持たない季語「夏深し」が提示された後に出現するのが、「海の底めく」という言葉。「夏」という季節が内包する「海」の光景が一瞬フラッシュバックし、「深し」という形容詞が「底」という言葉とイメージの上でからみ合います。「めく」という比喩がどんな言葉を引き張り出してくるのかと思った瞬間、「閉架書庫」という場所が出現する、この語順が実に巧いですね。

「閉架書庫」は「目録を元に資料を探す方式で一般利用者は実際に書架の間を歩いたり、本を直接手にとったりしながら探すことはできない」方式の書庫です。利用者から指定された本を探しに入っていく書庫は、ひんやりとした静寂に満ちています。少しかび臭い本の匂い、自分の靴音、かすかに動くものが視界に入れば、それは別の本を探している係員。ここにある静けさは、「海の底」のようだという感知が、季語「夏深し」という季語が内包する夏を惜しむ気持ちと、かすかにかすかに響

地

伊能図の空白に居て夏深し

根子屋

「伊能図」とは、「江戸時代に伊能忠敬が測量した日本地図」「大日本沿海輿地全図」の通称です。伊能忠敬は、海岸線を測量して回りましたから、海岸と街道は見事な精度で描かれているのですが、内陸部はほとんど「空白」なのです。その「伊能図の空白に居て」とは、作者の住んでいる場所がそこにあると読んでもいいですし、その「空白」に自分の物思う心を置いていると読んでもいいでしょう。「夏深し」という季語の持つ、移ろう季節への思いを、この「空白」に感じとる作者の感覚に共感します。

保津川図屏風左隻に夏深し

とおと

●「保津川図屏風」は「江戸時代の絵師・円山応挙の絶筆と言われる八曲二双の屏風絵」なのだそう。ネット検索で、画像を見ましたが、なるほどと納得しました。以下、解説を少し引用します。【右隻に描かれているのは、水しぶきを浴びそうな迫真の激流。第一扇から始まるのは、怒涛の落差で流れ落ちる大きな滝です。圧倒的な水量は巨大な岩を呑み込

み、轟音を立てながら下流へと流れを加速させていきます。対する左隻は、ゆったりとした溪谷の風情。悠然と流れる溪流は、多彩な表情を見せていきます。】

「夏深し」とは、まさに「左隻」に描かれた光景。こんな作品に出会うと、こんな発想もあったか！やられたな！という思いが、愉快に広がります。

夏深し骨が横たふ展丕室 蘭丸

当たり前ですが、俳句は頭から読んでいきますので、季語「夏深し」のあとに「骨が横たふ」という措辞がでてくるとギョツとしますが、下五「展示室」にて光景が一気に立ち上がってくるという構造の作品です。夏休みの子どもたちで賑わった博物館も、今は静けさを取り戻しているのでしょうか。

夏深し印度更紗の碧い鳥 露玉

「印度更紗」の手触りや色合いが、「夏深し」という季語が持つイメージに寄り添います。「印度更紗」の絵柄の中の「碧い鳥」を抽出することで、「碧」という色が「夏」を惜しむ気持ちと呼応するかのよう、綺麗な印象の一句です。

夏深む荘の玻璃戸の潮濕り

松本 だりあ

「夏深し」は形容詞ですが、「夏

深む」は動詞です。しかも他動詞になりますので、「夏」を深めるという意味になります。「荘」別荘の「玻璃戸」ガラス戸の「潮濕り」が「夏」を深めているよ、という句意だと読めばよいでしょう。

ひと夏を楽しんだ「荘」の光景として、その「夏」を惜しむ気持ちとして、「潮濕り」の「玻璃戸」に焦点を当てるセンスを誉めたい作品です。

筆洗の水の鈍色夏深し ぐわ

夏休みの写生画、趣味のスケッチを楽しんだ「夏」でもあったのでしょう。「筆洗」という言葉だけで、ある情景が立ち上がってきますし、「筆洗の水」に焦点を絞り、そこにある「水」が「鈍色」であるよと描写することで、季語「夏深し」の気分が広がっていきます。

ガムシロップ垂れゆく夏の深さまで 塔山音絵

「夏深し」をこんなふうにアレンジする方法があったか！と、楽しい驚きを与えてくれた一句。「夏深し」の気分を「ガムシロップ」が垂れる様子にキャッチする作者の感性を誉めたいですね。「夏の深さまで」という切れない型も、作品の内容に似合っています。

夏深しおさびし山の風をまつ ちびつぶぶづ

ああ、好きだなあ「おさびし山」。この山は、ムーミン谷の東に位置する山なのだそうです。このネーミング、絶妙だと常々思っているのですが、その山の名に「夏深し」という季語を感知する感覚に、大いなる共感を持ちます。行く夏を思いつつ、夏の深まりに溜息をつくスナフキンの姿も浮かんできます。

錫杖の列往く夢や夏深し 雪うさぎ

「錫杖の列」ですから、巡礼の列でありましょうか。僧侶の列だと読んでもいいですね。そんな不思議な「夢」を見た明け方。窓を開けてみると真夏の風とは違った「夏」深き風に気付いたのかもしれない。あの「夢」は一体なんだっただろう……と、不思議に感じる「夏」深き朝の心象風景です。

夏深し46サン手砲は電車になった夢を見る ねこ端石

「46サン手砲」は戦艦大和にも装備されていたのではないかと思います。「夏深し」は季節の移り変わりを意味する季語ではありますが、そこには心理的な要素も入ってきます。

あの大戦の終わった「夏」の記憶が、「夏深し」という感慨に繋がりが、火を吹き続けた「46サン

「千砲」は、自分が落かされて「電車」に生まれ変わっている「夢」を見ているかもしれないよというつぶやき。「夏深し」という季語に、深い反戦の思いが重なる作品です。

第77回 2014年8月11日週の兼題

法師蟬

天

法師蟬船霊さまへ申し上げ

重桜みかり

「船霊」とは、船の守護霊です。帆柱の根の部分に納められるという話を讀んだことがあります。その御神体について調べてみると、以下のような記述がありました。【神体は女の髪、男女1対の人形、2個のさいころ、一文銭12枚、五穀など。帆柱の根元の「へつ」という部分に納める。」】

「板子」一枚下は地獄」と言い慣わされているように、かつて船乗りとは、死と背中合わせの危険な男だけの仕事であつたわけですから、「船霊」として「女の髪」「男女1対の人形」を納めるという思ひは、分らないでもないか……と驚きつつも納得した次第です。

「法師蟬」が鳴きはじめると、台風シーズンの到来でもあります。自然の驚異の前において、人間の非力を心底知っているのが船乗りたちでありましょう。「法師蟬」

の声は、この秋の航海の無事を祈る思いと重なっていきます。「船霊さまへ申し上げ」は、船乗りたちの信心深さを思わせる措辞であり、敬虔に頭を垂れる船乗りたちの姿を想像させる効果もあります。つくつくぼうしつくつくぼうしという鳴き声は、「筑紫恋し」と聞きなされてもいたようです。船乗りたちの陸を恋う思いもまたつくつく恋しつくつく恋し、なのであります。

地

仏壇の金箔暗し法師蟬 とりとり

「法師蟬」という兼題の難しいところは、「蟬」「秋の蟬」に置き換えられるのではないかと、この部分の検証ですね。そこを保証しようと考えた時に、「法師」という字面のイメージを取り込んでみるのも確実な一手です。

この句の場合でしたら、「仏壇」と「法師」の二語で、取り合わせの調和を取るという考え方です。この方法は、失敗するとベタ付き（季語とそれ以外の言葉の関係が近すぎて、かえって味わいを損なうこと）になってくるのですが、それをベタにしないのが、中七の描写の巧さですね。「金箔暗し」という描写が、しっかりと映像を再生している点を誉めたい作品です。

法師蟬ピース一本供えけり あい

こちらは「法師」に対して「供え」という動詞が、取り合わせの接点となつています。そして、取り合わせられているのが「ピース一本」というモノ。煙草の銘柄の「ピース」だと分かれば、たちどころに映像が浮かんできます。

愛煙家で、特に「ピース」を好んでいた故人の墓に、火を付けたピースをお供えしている光景です。下五「供えけり」という詠嘆に、思いが籠もります。「法師蟬」の鳴き始めるお盆の頃の光景でありましょう。

法師蟬空の手前で落ちてしまふ

ミル

「空の手前」ってどこ？という疑問を持つ人もいるかもしれませんが、なんだかか不格好に飛ぶ「法師蟬」を思う時「空の手前で落ちてしまふ」という突き放したような措辞に強いリアリティを感じます。「法師」という字面が哀れを誘います。

つくつくぼうしつくつきのときをさるす

塔山音絵

「つくつくぼうし」を見つめながら、じーっと聞き耳を立てていると、こんな光景に出会ったのでしょう。「つくつく」の部分の鳴いた時に「ぶるぶる」したというささやかな描写が、写生の生々しい言葉として機能しています。こん

な句に出会ふと、俳句はつくづく観察だなあと思いを新たにします。

油臭き木の電柱や法師蟬

クスウジュンイチ

「電柱」に「法師蟬」が止まっているというだけの句なら頂けないのですが、「油臭き木の電柱」となると、一昔前の「電柱」がありありと浮かんできます。腐食防止のための何かを塗っていたのだろうと思うのですが、新しい「電柱」のあの「油」臭い匂いが、「法師蟬」の声と共にリアルに蘇ってきた一句です。

ぼた山は熱を孕みてつくつくし

七草

「ぼた」とは、「石炭を掘る際まじってくる岩石や、質の悪い石炭塊」ですから、「ぼた山」の大きさは掘り出された量と比例します。かつて隆盛を極めた頃の炭鉱の光景でしょうか。それとも、「ぼた山」だけがかの時代を思わせるように残っているのでしょうか。残暑の「熱」を孕む「ぼた山」を取り囲むように、「つくつくし」が鳴き続けています。

はじまりはをはるはじまり法師蟬

野風

常々この思いをおのれに言い聞かせているものですから、「はじまりはをはるはじまり」というフレーズに強い共感を抱きました。

何かを始めるということは、それが「をはる」日に向かって動き出すということと同義語である、という真実。それが連載の一つであっても、恋愛であっても、人の生き死にであっても、法則は一切変わりません。「法師蟬」はそんな思いを知り尽くした上で、つくつく恋しいつくつく恋しいと鳴いているのかもしれないね。

またひとつひこきおちて法師蟬

花屋

先般の、ミサイルで撃ち落とされた悲惨な飛行機事故を思い出しました。「またひとつひこきおちて」という平仮名書きの事実のなんと怖ろしいことでしょう。

「また」とありますから、かつて墜ちた「ひこき」への思いも内包している一句。御巢鷹山の事故もまた思い出されます。冥福を祈るように鳴く「法師蟬」であります。

この秋があの秋となるつくつくし

じろ

こんな季重なりの句が成立することに軽い驚きを覚えつつ、読ませて頂きました。「この秋があの秋となる」という時間の経過を担うことが可能な季語として「つくつくし」はしっかりと主役の座を占めていて、読み手一人一人の心の中にある「この秋」や「あの秋」の記憶を引き出します。「つ

猿の腰掛

天

くつくし」の痺れるような鳴き方が、我が脳髓を刺激するかのよう
に、一句の奥に響きわたります。

さるのこしかけさつこからは蟲ノ国

とおと

「蟲」という字を見ると反射的に、『蟲師』という漫画作品を思い出してしまいます。【精霊でも生物でもない妖しい生きもの「蟲」が起こすさまざまな現象を鎮める「蟲師」の旅を描く】漆原友紀さんの作品です。この作品を見たたん、そうか「さるのこしかけ」は「蟲ノ国」に生えるものなんだと、腑に落ちてしまいました。

森の中を奥へ奥へと入っていくと、周りは鬱蒼と暗くなり、湿った匂いが鼻先に漂い始めます。ふと目をやった古木に「さるのこしかけ」を見つけ「さつここからは」と思わずつぶやく作者。そう、ここからはいよいよ「蟲ノ国」に踏み入るのです。

「さるのこしかけ」という名は滑稽なようであって、怖ろしくもあります。猿が平然とこの茸に腰をおろし、森に入ってくるものを睥睨しているのかような、滑稽と恐怖。「さるのこしかけ」を横目

に見ながら、いよいよ「蟲ノ国」へ踏み込めば、ひんやりとした冷氣が首筋をよぎります。

同じ作者の句、「猿茸てん、と踏み越え天狗の子」もまた、「猿の腰掛」の傍題「猿茸」を見事に使いこなした一句。この季語の世界に自分を放ち、そこで見たきものを作品にできるのが、「妄想使い」とでも呼びたい俳人の特技。とおとさんもまた、見事な「妄想使い」俳人です。

地

また樹皮を猿の腰掛噛んだまま

大塚迷路

「猿の腰掛」を採取してきたものの、「また樹皮」を「噛んだまま」の状態であるよ、という描写が的確です。【木材を分解して栄養源とする白色腐朽菌や褐色腐朽菌】を持っている「猿の腰掛」は、取り付いた樹木を最終的には枯渇させてしまうのだと知れば、自身が採取されながらも「まだ樹皮」を噛んでいる執念こそが、「猿の腰掛」という生き物の本性に違いないと思えてきます。

胞子吹く猿の腰掛ごと倒す 理酔

伐採の場面を想像しました。「猿の腰掛」は取り付いた樹木を枯らせていきますが、その「猿の腰掛」もまた健気に生きようと「胞子」を飛ばしているのです。「胞

子吹く猿の腰掛ごと」樹木の命を奪う行為を、淡々と語る「倒す」の一語。この一語の置き方の巧さに、唸ります。

猿の腰掛といふ死に近きもの

クズウジュンイチ

「猿の腰掛」は樹木を枯らせるという意味で、「死に近きもの」であります。その効用が癌などの病気に効くという説もあり、藁にも縋る思いで「猿の腰掛」を手に入れようとする患者家族の思いもまた「死に近きもの」であります。前「一句のように、リアリティをもった描写で「猿の腰掛」を描く作品もあれば、この句のように抽象的な把握でその本意を描こうとする作品もあるということ

ひとつだけサルノコシカケあたにかい

有櫛

「猿の腰掛」に猿が座つてるとか、山彦やもののけや魔女や小人が座るといふ発想の句、沢山沢山ありましたね。この句の発想の妙は、そこに何が座っていたと具体的に述べないことで、読者に想像の翼を広げさせるという点です。

「ひとつだけ」という措辞で、他にも幾つかあるということが分かりますし、下五「あたたかい」でその感触に虚のリアリティが立ち上がります。

同じ作者の「おもしろいさるの

こしかけ二枚やらう」は、「おもしろいさるのこしかけ」と読んでもいいですし、「おもしろい！さるのこしかけ二枚やらう」と読むと、大切りの座布団みたいでもあるし、楽しい作品でした。

狼煙守猿の腰掛焼べにけり

可不可

「狼煙守」という人物の出現に虚を衝かれますが、さらにその後展開が巧いですねえ！漢方薬として珍重される「猿の腰掛」も「狼煙守」という役目からすれば、煙を盛大に出してくれる櫓のようなものなのでしょう。こんな光景を見たことがあるはずはないのですが、まるでこの「狼煙守」の傍らで「猿の腰掛」からでてる煙を眺めているような臨場感を愉しませてもらいました。

猿の腰掛老師はいつも「没問題」

梅ウエンティ

●「没問題（メイウエンティ）」中国語で問題ない・大丈夫という意味だそうです。／樫の木

この「没問題」という言葉を、確か浅田次郎著『中原の虹』のシリーズの中で知ったように記憶しています。

「猿の腰掛」という季語に対して「老師」という言葉が付かず離れずの取り合わせ。その「老師」の口癖が「没問題」であるという有り難いような無責任なような

台詞。先ほどの「狼煙守」といい、この「老師」といい絶妙な人物を配することで、「猿の腰掛」という季語が活きてくるのですねえ。

年寄りばかりですからと神棚に猿の腰掛

ねし端石

「年寄りばかりですから」というのは、この家の実情であり、この村の実情でもあるのでしょうか。「年寄りばかりですから」という台詞のニュアンスが諦めなのか達観なのかは分からないけれど、その家の「神棚」には「猿の腰掛」が飾られているという事実、妙な納得を覚えている作者なのでしょう。

（株）猿の腰掛兄弟社 葦信夫

●大好きなよしあきくんと尊敬する夏井先生の両方を選んでもらえる句ができないかなあと思つて以下の二句作りました。猿の腰掛という名のおかしみも季語の本意に含まれているのではないでしょう。かさそうな会社だと思いませんか。／葦信夫

いやはや、実に愉快！この句、まさに、よしあきくんが月曜日で紹介しそうになったので、慌てて金曜日に取り返してきた一句です（笑）。

勿論（株）の部分は「かつこカブ」と読んで下さい。扱っている商品が「猿の腰掛」だけなのかもしれないし、猿の「兄弟」が

経営している会社と読むのも楽しい！一円の資本金で株式会社ができる時代ですから、猿たちだって落ちてた一円玉を資本金にして、会社作れるかもね（笑）。

第79回 2014年9月1日週の兼題

秋草

天

マチボウケと名づけますこの秋草に
るびい

「秋草」の名の一つつを私たちは知らないけれど、名の無い雑草はないのだよ、という発想の句たくさんありましたね。その発想のままだと類想類句の沼に沈んでしまうわけですが、もう一歩先に思いを広げれば、悠々たるオリジナリティを手にすることができるのですよね。

勿論、「秋草」に勝手な名をつけるといふ発想にたどり着いたとしても、そこにも類想の沼はあります。その沼を軽々と跳び越えているのが「マチボウケ」という命名でしょう。

いきなり「マチボウケと名づけます」というフレーズがでくると、読者はキョトンとします。何にそんな名前をつけたんだろう、と。（すっかり者の私は、最初「マンボウ」と読んでしまったので、尚更キョトンとしてしま

ました。）中七の切れは、この台詞を語る人物から離れ、下五「この秋草に」という光景に切り替える効果があります。そうか、「秋草」の小さな花々が咲く野にこの人はいるのだと、腑に落ちるのです。しかも人を待つているのだと。いつもの場所のいつもの待ち合わせでしょうか。いつもいつも待たされるのは私。いつだって待つのは私。風の「秋草」は待つ人の心のようにゆらゆら揺れています。「この秋草」に「マチボウケ」と名をつける女心は、いつもいつも風の中で揺れているのです。

地

秋草を好きに名付けて母の恋

とおと

まさにこれも「秋草」に名前を付けるという発想ですが、どの言葉がオリジナリティを確保しているかという点、下五「母の恋」です。「秋草を好きに名付けて」という行為が、「母の恋」という措辞によつて意味づけされていきます。「母の恋」とは、かつて父と知り合った頃の瑞々しい回想でしょうか。道ならぬ恋をしている母を見つめる娘の思いでしょうか。はたまた、亡くなった父を思い続ける切なさでしょうか。さまざまなドラマが交錯する一句です。

秋草のひかりに裾の濡れにけり
山上 博

朝ドラの『花子とアン』の印象がワタクシの脳にこびりついていてるせいかもしれません、この「裾」が、大正の頃の鮮やかにしてモダンな色柄に思えて、ああ美しい！と感じ取ってしまいました。「秋草」の露ではなく「ひかり」に濡れた「裾」をゆつたりと詠嘆する「けり」が、一句の内容を引き立てます。「秋草」の野を歩いてきての、小さな気づきの一句です。

右手には秋草左手にワルツ あおい

秋の野を歩く光景が「右手には秋草」であり、心の楽しさが「左手にワルツ」なのでしょう。思わず手折った「秋草」のささやかな美しさが、そのまま「ワルツ」の拍子になっていく心持ち。心地良い追体験を楽しませていただきました。

追伸…あおいさんが二人いらっしやるようですので、是非とも姓をつけていただけると有り難く、どちらのあおいさんの句かも、教えて下さいね♪

秋草に火の粉降らせて窯の守

江口小春

●信楽での陶芸の思い出です。小さな窓に赤松のマキを詰め一斉に押し込むと上から炎がさがります。よく言われますが火は生きてる！と思いました！／江口小春

実体験の句はやはり強いですねえ！「秋草に」という光景にかぶさっていく「火の粉降らせて」という意外性を、下五「窯の守」という状況がどしりと受け止めます。小春さんのコメントを読むまでもなく、まさにこの光景が一句にパッキングされている見事な描写力です。

秋草や戦記に遺る空の青 蓼蟲

「秋草」の向こうに秋空の「青」を配する句は折々見るのですが、この句の眼目は中七「戦記に遺る」にあります。眼前にある「秋草」を眺めながら、「戦記に遺る空の青」も今日のような「青」であつたに違いないと作者はしみじみとした感慨を抱きます。「戦記」の中、「空の青」が鮮やかであればあるほど、そこに書かれている時代の凄惨が生々しく思い起こされるのです。

作者蓼蟲さんのコメントもまた味わい深いものがあります。

●何故か青く澄み切った空に終戦の日が重なる。映画やTVが青い空と蝉時雨を玉音放送の背景に使う所為かもしれない。この日、永井荷風は岡山県山中に疎開中の谷崎潤一郎を訪ね、その後列車で岡山市に向っている。車中とて玉音放送は聞いていないが「陰りて風涼し」とある。東京は晴れて、今日で言う真夏日だったようだ。

／蓼蟲

秋草や父は千島列島兵 大塚迷路

リズムの悪い句ではあるのですが、この木訥な調べが「父」という人物を物語っているようで、離れられなくなった作品です。「秋草」の美しさは、内地への思いをかきたてます。「千島列島」という固有名詞が彼の地の来たるべき冬をも想起させます。

●生前父は、千島列島での過酷な軍隊生活を私が聞けば、ぼつぼつ話していました。今思い出せば、そんな軍隊生活を父は否定も肯定もしていませんでした。／大塚迷路

被爆死の軍馬千頭へと千草 稲穂

「秋草」の傍題「千草」の「千」の一字が、こんな使い方をされていることに軽い衝撃を受けました。「被爆」して死んだのは人間だけではなく「軍馬」もいたのだという事実が、「千頭」という数詞の力でもって、読み手の心に食い込んできます。

「秋草」が、（蓼蟲さん迷路さん稲穂さんのような）戦争の記憶に繋がる力を持つ季語であるという事実に驚きました。戦争前後ではないか、という恐れを持たざるをえない昨今の世界情勢が、季語の認識に新たな側面を添えているのかもしれないと、考え込まれた今週でありました。

名月

天

名月のうたげ麗妃は産室へ

中原久遠

「名月」と「満月」の違いとは何でしょう。今週の「俳句道場」にみちるさんが書いて下さっていたように「名月」という言葉の中に、すでにとても素晴らしいもの、という価値判断が入ってしまっている」という点が、この季語に取り組む際の大きなハードルになります。「満月」は、月が最も大きく見える現象そのものですが、「名月」は愛でる心がすでにパッキングされています。なんと難しい季語だろうと、溜息をついていたワタクシの心に、この句が飛び込んできました。

「名月のうたげ」は、一見ありそうな措辞なのですが、後半の叙述によつて、ただの「うたげ」ではないことがわかります。「麗妃」という人物の名前は、読者を二気に中国王朝の世界へ誘います。この人物を、清王朝末期、皇帝の寵愛を受け西太后に疎まれたあの「麗妃」だと読んでもいいですし、中国という国の歴史の中の一人の妃だと考えても良いでしょう。「名月のうたげ」は「麗妃」が無事に世継ぎを産みますように

という願いの宴であり、出産の知らせがくれば、それはそのまま誕生を言祝ぐ宴となるのでしょうか。虚の世界に浮かんだ「名月」は、読み手であるワタクシたちをうつとりと魅了します。「産室」という場合は、月の満ち欠けと出産の関わりを想起させ、「麗妃」という名前の文字通りの麗しさは「名月」という言葉と美しく響き合います。やがて届く出産の報に、座の湧き上がる声が聞こえてくるような心もする佳句であります。

地

名月や酒交わし舞う神と民

紅の子

「名月」の下で「酒」を飲む句、「名月」から「神」という言葉を連想する句それぞれありましたが、その両方の発想を統合すると、このような形になるのだなあと納得しました。「神」と人間がもつともつと近い付き合いをしていた太古のイメージは、まさに「名月」という季語の持つ悠々たる世界だなあと感じ入りました。

名月やアマタボーリの低き声

まどん

前に見た与論島の十五夜踊り(国指定重要無形民俗文化)。その中に「雨賜り(アマタボーリ)」という踊りがあります。「雨賜り、賜り(アマタボーリ、タボーリ)」

「島が富どう 世が富」——。雨乞いの言葉を繰り返しながら踊ります。最初、「雨乞踊」にしようと考えましたが、「雨乞踊」は別の季語だと知り、現地の言葉(歌い方)をそのまま使うことにしました。／まどん

「アマタボーリ」という言葉を初めて知ったのですが、「名月」に神聖なイメージを重ねれば、このような雨乞いの場面も立ち上がってきます。下五「低き声」が一句に、場のリアリティというべきものを添え、雨乞いの祈りの「声」が厳かに「名月」へ立ち上っていくかのような一句です。

名月の今宵百句を還すべし

ボメロ親父

私は毎年仲間たちと一緒に「月百句」(二人で月の句を百句作る)修行をしています。ボメロ親父さんも頑張っているのでしょう。「名月の今宵」には、今年の「百句」を詠み上げてしまおう!という決意でもあり、「名月」への賛美でもあります。「還すべし」という措辞に「名月」に対する敬愛も読み取れますね。

名月や象舎の如き変電所

クズウジュンイチ

この句の場合は「満月」でも成立はするのですが、「名月」とすることで、一年に一度の「名月」が持つ力が「変電所」を「象舎」

のようであると感知させたのかもれない、という読みが広がります。「名月」を愛でる心が「象舎の如き変電所」の暗く大きな影を美しく感じ取らせたに違いありません。

名月と向き合う深夜警備員

大阪華子

今宵中秋の「名月」と向かい合うように立つ「深夜警備員」の姿がそこにあるだけなのですが、「満月」ではなく「名月」だからこその味わいがあります。今夜が勤務でなければ、家族や友だちと月見をしていたかもしれない「深夜警備員」ですが、別の考え方をすれば(仕事とはいえ)じつと「名月」と向き合う贅沢な時間だともいえます。作者の心をよぎるそんな思いが、「名月」という季語をクローズアップします。

名月へ延伸セヨ都営大江戸線

ぐわ

こんな手もあったかと、ニヤリとした作品。「都営大江戸線」といえば、地底の底にあるのではないか(笑)と思うほど長い長いエスカレーターが思い浮かびます。上りのエスカレーターに立つて前を見上げると、一体どこまで続いているのだろうという思いにいつも囚われます。その実感が、「延伸セヨ」という命令形になったのでしょう。「名月」の夜ともなれば、

その思いは一人であります。

名月や眞犯人とその家族 葦信夫

●ヘミングウェイに単語6つだけの小説があります。For sale baby shoes never worn. (売ります。赤ちゃんの靴 未使用。)言葉の「取り合わせ」がすばらしいと思います。無季ですけども俳句っぽい効果じゃないでしょうか?というわけでヘミングウェイ、めざしてみます。／葦信夫

ヘミングウェイのこの逸話を初めて知りました。そこからの発想は、まさにチャレンジ。「名月」という季語の下に、「眞犯人とその家族」という人物を配するだけで物語は動き始めます。この一句から、例えば五つの脚本が書けてしまうような想像が、うのようによと動き出しました。

秋燕

第81回 2014年9月15日週の兼題

天

るるるつと秋燕はいま海の朝

紆余子

オノマトペ(擬態語・擬音語)の表現を使つた投句もさまざまあった今週でしたが、掲出句「るるるつ」の鮮度に強く惹かれました。火曜日「俳句道場」に、「秋燕」は渡る前に一度結集し、そこから

各々が一人旅をするという情報が届いてましたね。個々で渡るということを知らなかった私にとつて新鮮な情報だったものですから、その気持ち「るるるう」というオノマトペに反応したのかもしれない。

季語「秋燕」に挑む際の難しさは、「夏燕」に置き換えても成立するのでは？という点です。この句の場合は「へはいま」という措辞が、日本を去る状況を、「るるるう」という音が「秋燕」の気分を表現しています。

「秋燕」は「しゅうえん」と読みたいですね。「るるるう」「しゅうえん」という音の響きが綺麗です。「秋燕はいま」という措辞から「海」という光景が広がり、さらに「朝」という時間が動き出す構成も鮮やか。朝日の中を飛ぶ「秋燕」の黒と白の流線型は、まさに「るるるう」たる心地。「るるるう」は朝のひかりであり、「海」風であり、「秋燕」の身体感覚でもありえる、多義性をもった秀逸なオノマトペなのです。

「さざなみ」は、秋風が起すさざ波であり、「秋の燕」が次々に飛び立つ波動が生むさざ波かもしれない。「さざなみがう

まれて」の平仮名書きの優しさが、そのまま「秋の燕」を見送る視線に重なっていくようです。

秋燕の旅装整ふ日和かなとおと「秋燕の旅装」という表現から、一瞬燕尾服を思い浮かべましたが、それは一種のサブリミナル効果。「旅装整ふ」という擬人化は「日和かな」という、今日の秋日和を称える表現なのですね。「秋燕」の悠々と発つ静かで明るい「日和」です。

いつにも富士ある日本あきつばめ ハラミータ 富士山は一つだけど？と思っ

はいけません。「日本」には「○富士」と呼ばれる山が沢山あります。「富士」の名は、山の美称として使われます。四国香川県には「讃岐富士」と呼ばれる山があり、愛媛県には「富士山（とみすやま）」と呼ばれる山もありま

す。全国各地探せばいくらでもあるはず。 来年の春、燕たちはそれぞれが目当てとしている「富士」を目指して帰ってくるのだよ、という一句の懐の深さを愛します。

そらがかなしいからあれも秋燕 魔王 一行詩のような眩きに惹かれます。「そらがかなしい」という秋思がひたひたと作者の心を浸す日

は、高い高い空を飛ぶ鳥影もまた哀しく映ります。「そらがかなしいから」に対して「あれも秋燕」は理不尽な断定ですが、この理不尽こそが詩を生み出す装置となっているのです。破調の調べが、切々と胸を浸す愛唱の一句です。

秋つばめハトロン紙のカバーかざと言ふ ねこ端石 この感覚にも共感します。「ハトロン紙のカバー」は本のカバーでしょう。「ハトロン紙」をかけて

あるのですから、安い文庫本の類ではないですね。本を開いた時、あるいは閉じた時の「かさ」という音に、「秋つばめ」が帰っていく

季節の気分を感じている作者。「とと言ふ」は要らないように書いて必要な言葉。秋思が思わず口をついてでてきたという感触の「とと言ふ」であります。

文豪の筆を旅立つ秋燕 緑の手 「秋燕」からオスカー・ワイルド作『幸福な王子』を連想した人たちが多かった今週でしたが、そのイメージを具体的にせず「文豪」という言葉に留めたことで、逆にオリジナリティが生まれたともいえます。「筆を旅立つ」という中七の表現が、「夏燕」ではなく「秋燕」の気分に合致します。

秋燕や動物園にキリンの死 奈津 一句に生き物を二つ入れるのは

とても難しいのですが、そこをパランスよく表現している点が巧い作品です。「動物園」の中にはさまざまな動物がいるのに、なぜ「キリン」が「秋燕」に似合うのだろうと不思議なのですが、「秋燕」ならば仲良しだった「キリンの死」を悼みつつ、渡っていくに違いないと思わせる何かがあるように思

います。 秋燕や牧駆くる仔のたくましく 勿忘草 これも生き物が二つ入った句です。「キリンの死」とは対象的に

潑刺たる「牧駆くる仔」です。「駆くる」という動詞から、この春に生まれた馬の子を想像しました。燕が来た春に生まれ、今はこんなに「たくましく」駆けるようになってる「仔」。上五「秋燕」を見上げる作者の心には、来年の春の「牧」の光景が広がっているに違いない有りません。

歓声を背に乗る列車秋燕 つるちゃん 今週は、ヤクルトスワローズ応援企画ということで、松山坊ちゃんスタジアムに設置された投句箱の中の作品から、一句を選ばせていただきました。

球場の興奮を描いた句は沢山ありましたが、つるちゃんは「列車」の時間の関係で、泣く泣く球場を後にしたのですね。「歓声

を背に」駅へと急ぐ心持ち。「列車」に乗ってからも試合の成り行きが気になってしかたがない気持ちだが、日本を去る「秋燕」の心と重なってきます。つるちゃん、次回は松山に宿泊するつもりで観戦にきてね！

第82回 2014年9月22日週の兼題

落し水

天

落し水臭クテ手賀ハ豊穠ナリ 土井探花

火曜日「俳句道場」にて可不可さんが「落とす」という動詞のイメージとは裏腹に、収穫への期待を内包した明るさがある季語だと論じておられました。台風にも会わず、二百十日も無事に越え、後は収穫だ！という期待を内包した季語「落し水」を、こんなふうに生々しく描写した句を見つけました。

「手賀」とは手賀沼のことですね。江戸時代、新田干拓が行われたこの沼は、行く度もの洪水被害を受けた沼でもあります。コトバンクには、以下のような解説が載っています。

【千葉県北西部の沼。東西の長さ約20km、幅約1km、面積63km²と細長く、最深部の水深約2m。東端から弁天川により利根川に

排水する。古代には印旛(いんぱん)沼、霞ヶ浦に続く香取海(かとりうみ)の入江であったが、利根川の堆積作用によってせき止められ、沼地となった。近世にはたびたび干拓が計画されたが、洪水によって破壊された。1666・67年に国営干拓事業が行われ、土地改良が進んだ。印旛沼手賀沼県立自然公園に属し、釣りの名所でもあるが、最近、沼周辺の我孫子(あびこ)・柏両市などの人口増加によって生活用水の流入が続き、アオコの異常発生など沼の汚染が著しい。

「落し水臭クテ」を汚染臭と読む人もいるかもしれませんが、こは下五「豊穰ナリ」から実りを司る栄養臭だと読みたいですね。稲作もいよいよ大詰めとなってくるのが「落し水」の作業。落ちてゆく水が思いのほか臭いことにあらつ?と気づく、その小さな発見が俳句の核となりました。この豊かな実りを生んだ末の水なのだなあという実感が、「落し水臭クテ手賀ハ豊穰ナリ」という言葉となつて作者の胸中に姿を為した。そんな一句に違ひなからうと思ひます。「臭ク」という動詞のイメージとは裏腹なる「豊穰」の一語の豊かさ。この構造はまさに、「落し水」という季語の構造と同じ。なるほど、こんな作り方があったかと勉強させてもらった作品です。

地

水をはるより易し水落とす

お手玉

水を堰き止めている一枚の板を外すだけ、あるいは一鍬入れて畦を切るだけの作業ですから、「水をはるより易し」はまさに実感です。とはいえ、体験したことがあれば、誰でもこのような率直な言葉を二句に成せるわけではありませぬ。ぼろつと呟いた言葉が、そのまま一句になった作品の妙。俳句の神様がほほえんで下さった一句かもしれません。

落し水入れて太るや信濃川

樫の木

「落し水」を川へ返すという発想の句、沢山沢山ありました。そのラインの発想で金曜日に残したのがこの一句です。「落し水」を「返す」「戻す」等の動詞で状況を述べるのではなく、「入れて太る」と状態を描写した点が巧いですね。勿論、川の名前は動くといえは動くのですが、「信濃川」の滔滔たる豊かなイメージが「太る」という動詞とも響き合います。

一枚は小用ほどの落し水大塚迷路

「落し水」

「落し水」に対して、こんな比喩をもつてくるか?と思わず笑ってしまったのですが、いやいや、

確かにこんな「落し水」の現場もあるな、と納得させられました。「小用ほど」のチョボチョボとした水流がしばし続けば、あつというまに終わってしまう「落し水」ですが、この句の巧さは「二枚は」という上五にもあります。助詞「は」は、他にも色々あるけれどその中のこれは、と指さす働きをもっています。「一枚は」と指さすわけですから、この田は小さな棚田でありましょう。小さな田の一つ一つの水を落とす作業が、一句の背後にありありと見えてきます。

水落す星座増えたる朝より

三島ちとせ

「星座増えたる」という完了の意味が「朝(あした)」にかかってくることに、ささやかな違和感を持つ読者もいるとは思いますが、これは「星座増えたる(夜に続く朝)」と読ませて頂きました。星の美しさが際立つ秋の夜空。「星座増えたる」という実感が、「落し水」の頃だなどという思いに繋がるのでしょう。夜から朝への空の光のグラデーションに、「水落す」音が響いてくる作品です。

水落ちて干からびてゆく雑魚田螺

もね

この発想の句も沢山ありました。色々ヒネった句もあったのですが、掲出句がシンプルにして現場の映像をきつちり描けていると判断し

ました。「水落ちて干からびてゆく」という時間経過が無理なく描けているのが、さりげない巧さ。下五に「雑魚田螺」という言葉が投げ出すように置かれている点もよく考えられています。この「田螺」は憎々しげなジャンボタニシだろうなと思います。うちの近くの田にも干からびた殻がコロコロ転がっています。

落し水ぐあと鴉の息匂う

てい

「鴉の息」って「匂う」という近距離では感じにくいのではないかと思います。ふてぶてしい「鴉」の「息」を生々しく感じ取る作者の感覚を褒めたい作品です。「落し水」が完了すると雑魚や田螺が干上がってくるのを賢い「鴉」は知っています。「ぐあ」と鳴いたひと声に、「鴉の息」を感じ、その匂いを嗅ぎ当てる作者の感性が見事。これも「天」に推したかった作品の一つです。

あしびきの山犬睨む落し水

ちびつぶどう

「落し水」の恩恵を知っているのは鴉だけではなく、「山犬」も、棚田の「落し水」が終わった後に、ささやかな獲物が簡単に手に入ることを知っているのでしょう。「睨む」という動詞も「山犬」を描写する言葉としての確に機能しています。

なんといつても掲出句の特色は、枕詞「あしびきの」を使っている点にあります。俳句における枕詞は十七音のうちの五音を浪費するに等しいわけですから、その浪費がある種の効果を發揮してくれないと、使う意味はありません。優美な枕詞でもある「あしびきの」という上五が「山犬」という禍々しい印象を内包する言葉にくっついていく意外性もさることながら、「あしびきの」は周りの景色を彷彿とさせる効果も持っていますので、枕詞を使うという冒険をここは褒めるべきでありましょう。

不知火

第83回 2014年9月29日週の兼題

天

不知火を灯せさびしき王のため

とおと

今週の火曜日「俳句道場」にて鞍草子さんのコメントに、「不知火」と「狐火」を入れ替えても成立するようではダメなのではないかという指摘がありました。今回の兼題の検証方法の一つに、この考え方は確かにあります。そう考えた時「狐火を灯せさびしき王のため」だと何がどう違ってくるのかを考えていけば、掲出句において「不知火」が主役に立っていることも自ずと分かってくるは

ずです。

前半の措辞「不知火を灯せ」は命令形。誰が誰に向かって何のために命令しているのだろうか？と一瞬の疑問を掻き立てます。後半の措辞「さびしき王のため」はその疑問をはらって尚且つ、一句の世界を広げます。「さびしき王」とは誰でしょうか。戦いによって海に逃れ、船を沈められた王でしようか。朝廷から追放され、遠流の刑に処された王かもしれないね。「さびしき王」は、さまざまな王を連想させ、王の失意を表出させる詩語です。

仮に「不知火」を「狐火」と変えてみましょう。「狐火を灯せさびしき王のため」こうなると、海の光景が消えます。「狐火」は「王」の魂の火であるという読みに限定され、そうなっていると付き過ぎ感が否めませんね。

「不知火」という季語が内臓する暗い海、潮の臭いは「さびしき王」の人生を彷彿とさせ、さらに彼の魂が赤い火となつてゆらゆらと彷徨い出すさまに孤独の匂いが漂います。「王」という存在は生きていた時でも死んでからも「さびしい」人なのだと、そんな思いが読者の心にひたひたとしみ通ってきます。

地

不知火や新羅が攻めてくる噂

初蒸気

こちらの句もまさに「狐火」ではなく「不知火」でなくてはならない一句。「不知火」が見えるぞ、あれは「新羅」の船団が攻めてくる前兆ではないか、そんな「噂」が広がっていく不穏。その不穏が「不知火」のカタチとなつて立ち現れているのかもしれない。

不知火を入れてより目の曇りぎみ

吾平

この句は一見「狐火」でもよいのではないかと思われるのですが、効果はやはり違います。「狐火」にはキツネという生き物の気配がありますから、我が「目」に「入れてより」という詩的肉体感覚は己の体内へと意識される違和感です。が、「不知火」は遠方へ向けられる視界が内包されていますので、「入れてより目の曇りぎみ」には、夜の暗い水平線の映像がぼんやりと浮かんできます。

眼球に入れるモノとして「狐火」は生温かく生臭く、「不知火」は冷たく青白い曇りをもっているような気がします。

これは不知火の匂い月が溶けている

猫ぶぐ

自由律の一句です。「これは不知火」という断定に畳み掛けられ

る「月が溶けている」という咬き、勿論「月」は秋の大きな季語ですが、この句の場合は「不知火」という季語を表現するための背景として機能しています。海では「不知火」が燃え始めているみたいだよ、だつて「月が溶けて」いるのだもの……という不条理な咬きに濃い詩が匂い立ちます。

不知火に貝を漁る人の揺れ

ジャンク堂

沖には「不知火」が立ち、近景として「貝を漁る人」が見えている……と思うのですが、最後の一句「揺れ」によって、一の様相は微妙に変化していきます。「貝を漁る人」たちの姿が、まるで「不知火」となつて揺れ始めているかのような感触。これもまた「不知火」という季語の有する力でありましょう。

不知火や眼の無き魚の二列に

きらら☆れい

「不知火」から「水俣」を連想し、さらに「魚」を食べる猫を描くという発想の句もありましたが、掲出句は「眼の無き魚」という奇形を取り合わせました。さらにこの句を不気味にさせているのが「二列に」という措辞。最初は、水揚げされた「眼の無き魚」が「二列」に並べられているのかと思つたのですが、冷たく暗い海の底で「眼の無き魚」が「二列」に泳いでい

るのか……と思うと、尚更怖ろしい光景に思えてきました。

不知火や産まぬ身呪い飽きました

奈津

もし上五を「狐火」にすると、キツネというものと「産む」という動詞が近すぎることになりました。産むはずのない「不知火」だからこそ、「産まぬ身」が生きてきます。「産まぬ身呪い飽きました」という言葉の奥にゆらめく感情は「不知火」のように、青白い光を放ちます。

不知火や鬼に嗅がるる気配あり

隣安

この感覚にも共感します。「不知火」を見たことはないけれど、それをありあり想像してみると「鬼に嗅がるる」ような「気配」を感じるといふ妄想の実感。「鬼」の生臭い息が、鼻面にふつと臭ってくるような思いがしました。

不知火を見つけて息が緑色

音絵野あよ

こちらは、逆に、自分の「息」の色が変わった気がするというのがです。見つけられるはずがないと思つていたのに、今、目の前に揺れているのが「不知火」だ！と叫んだその息が「緑色」をしているという怪異。他の色ではなく「緑色」に詩的リアリティを感じます。見たこともないものを想像の中

で観察する目、感知するアンテナは、こんなふうに働いて一句をつかみ取るのですね。

今晚の不知火当番俺の船

むじじ

不気味な「不知火」ですが、こんな愉快な句もあつていいでしょう！毎晩「不知火」が出るのを見張っているのだけれど、「今晚」は「俺の船」が「当番」なんだよな。俺の船が当番の夜に、「不知火」で欲しいような欲しくないうような、そんな気持ちを感じられてちよつと笑える一句でした。

第84回 2014年10月6日週の兼題

後の月

天

海溝のとき渋谷を後の月

音絵野あよ

「名月」の後に出てきた兼題「後の月」は手強かったですねえ。少し欠けているハ淋しげというイメージを共有しつつ、愛でる気持ちも入っているし……一体、どの要素を切り取って一句に仕上げているのか悩ましい季語であります。どの句を天に推すかさんざん迷ったのですが、この印象的な一句を推させて頂くことにしました。

「海溝」の一語が深く暗い海底

の亀裂を思わせた瞬間「〜ごとき
渋谷」という言葉が飛び込んでき
ます。「海溝がビルの屹立する、渋
谷に転換する意外性と納得。「海
溝のごとき」という比喩が暗く冷
たい海底を想起させますので、下
五「後の月」の夜という時間がそ
のまま一句を支配していきます。

「渋谷」の駅前から多方向に伸
びる路と屹立するビル群を「海溝」
だと感じ取る作者の心にあるのは、
殺伐たる淋しさでありましよう
か。「くを」という助詞は、経過
していく時間や場所を表現しま
す。作者自身「海溝のごとき渋谷」
を彷徨っているでしょう。頭上
にある「後の月」の持つ淋しさは、
そのまま作者の心と重なっていき
ます。

地
穀霊の太り行く後の月
ハラミータ
「穀霊」という言葉を始めて知
りました。作者の造語かもしれま
せんが、穀物のたましいと解釈さ
せて頂きました。「穀霊」が太っ
ていき、穀物が実る頃の月を「後
の月」というのだよ、という詩的
把握に惹かれます。

後の月塩霊の底湿りけり あい
「名月」と比較する時、「後の月」
は冷たい湿度が成分として多いと
感じます。その感知を作者は「塩

壺の底」に見つけているのです。「塩
壺の底」にたまつている「塩」は
少し湿気て、壺底にガリガリくっ
ついていくのでしょうか。その「湿
りけり」という気づきの詠嘆にリ
アリテイがあります。「塩」の色
もまた「後の月」の色とかさなり
ます。

石室の湿りてあたり後の月 舞
こちらはもっと大きなものの
「湿り」です。「石室」という空間
の冷たい湿りは、「後の月」の持
つそれと似ているのだという感知
作者が鼻先で感じとったであろう
微つばい匂いも内包されている一
句です。

後の月僅かに銀の濕りたる
矢野リンド
「名月」と「後の月」の違いを
色に感じ取った作品です。「僅か
に銀の難じりたる」と把握する作
者の感覚に共感します。「後の月」
が「銀」ならば「名月」は「金」、
作者の手にはもう一句「金」の「名
月」の句もあるのかもしれませんが
ね。

後の月妻のやうなる匂ひかな
小木さん
「後の月」に感じ取る匂いもある
でしょう。「後の月」を「妻の
やうなる匂ひ」と比喩することに
よって「妻」は決して若くはない
妻だろう、という読みが浮かんで

きます。共にある程度の年月を送
つてきた「妻」に対する最上級の
の愛の言葉でありつつ、淋しさも
感知させるのが、この季語の力。
小木さんという作者名が、亡き
妻への思い……という事実を突き
付けます。

竹取のよすがの林後の月 江戸人
「名月」ではない「後の月」の
持つ負の感情が「竹取」の物語に
似合います。「竹取」を「よすが」
として暮らしていた翁の生活を変
えてしまったのが、かぐや姫との
出会いでした。「竹取のよすがの
林」と「林」一字で映像を作り出
すテクニックが見事。これによつ
て「後の月」が光景として立ち上
がってきます。この句も「天」に
推したい作品でありました。

よこむきの鶏の片目や後の月
クズウジュンイチ
「よこむきの鶏」の目が「片目」
であるのは当たり前のことなので
すが、このように敢えて述べると
ころにも詩は発生します。「よこ
むきの鶏の片目」のクローズアッ
プが、そのまま僅かに欠けた「後
の月」のカタチに重なってくるよ
うな不思議な味わい。「や」の切
字の効果をよく知って、使いこな
している作品です。

酒冷めて甘しみのく後の月

可不可
「酒冷めて」ですから、本来は
燗をしていた酒なのでしょう。「後
の月」に見とれているうちに冷め
てしまったのだけれど、「酒冷め
て」のちの甘さ＝美味さを「甘し
」と言い切りました。「後の月」は
負のイメージを内包しているので、
淋しげに詠まれることが多いので
すが、「みちのく後の月」という
後半の措辞が、この地への賛美と
なつて広がります。

第85回 2014年10月13日週の兼題

万年青の実

天

祖母の遺せし美顔帯と万年青の実

初蒸気

「万年青の実」って、縁起の良
いお祝いの品として贈るものだ
という事実は知っていても（いや、
知らない人も多いか……）、昨今
引越や結婚のお祝いに「万年青」
をプレゼントするって人は、そん
なにはいないのだろうと思います。
どこか昭和の匂いのする風習とい
うのでしょうか。「万年青の実」っ
て季語の成分は、言祝ぎ＋昭和
の匂いかなと思っているところに、
この句がじわりとにじり寄ってき
ました（笑）。

「美顔器」とは、辞書には「顔

の染み、しわ、たるみなどを取り、
滑らかで色白な肌にすることを目
的に開発された器具」と解説さ
れております。時代とともに「美
顔器」というもののカタチや性能
も変わってくるのですが、「祖
母の遺せし」という状況によつて
どんな「美顔器」なのか想像がつ
きそうです。

亡くなった祖母の部屋を片付
けていると、不思議なカタチの
不思議な器具が見つかり、一体こ
れは何だ？と手に取っているのだ
でしょう。これ、お祖母ちゃんが使
ってた美顔器よ。え？ヒガンキ？何
それ？なんて会話が交わされて
いるのでしょうか。

お洒落で小綺麗な「祖母」の
鏡台、「美顔器」のそばには椿油
の瓶もあつたりしそうです。そん
なお祖母ちゃんの部屋にもう一つ
大切に置かれているのが「万年青」
の鉢。こちらはお祖父ちゃんの片
身をお祖母ちゃんが大事に育てて
いたのかなあ、と想像しました。
若かりし「祖母」の女としての
日々の象徴としての「美顔器」、
亡き夫との結婚祝いにもらった
「万年青の実」。嗚呼、これぞ言祝
ぎと昭和の匂いの一句だと合点し
た次第であります。

万年青の実熟れて日めくり寂しゅうす

江戸人

「万年青の実が熟れていく日々は、殊更せねばならぬこともなく過ぐす無為の日々なのでしよう。日々の暦「日めくり」は一日一日と減り、その目に見える月日の過ぎゆくさまを「寂しゅうす」と眺める作者の思いに共感致します。

祖父の起居四畳余りや万年青の実

みなと

「日めくり寂しゅうす」の句は、まさにこのような「四畳」の「起居」ではないかと想像致します。隠居部屋に起居する「祖父」は「万年青の実」を愛でることのみに日々を過ごしているのでしょうか。「祖父の起居四畳余りや」の詠嘆の向こうに、無聊の日々がありありと見えてきます。

永らえて実万年青なんて愛でちゃって

とおと

自分が「万年青の実」の愛好家なんぞやってるとは、全く年寄りじみたことになったもんだよ、という爺さんの台詞だな……と読んでいくと、下五「愛でちゃって」に思わず笑ってしまいました。「永らえて」こんな台詞を吐いてるのは、ダンディーなお爺ちゃんかな、その傍らでニヤニヤ見てるお婆ちゃんかな。いやいや、やはり

照れの難じった自嘲だと読みたいたなあ（笑）。

通夜客の進みつづ見る万年青の実

笑松

自宅での「通夜」と読みました。玄関先に並ぶ「通夜客」を「進みつづ見る」という描写がさりげなく巧いですね。「通夜客」たちの視線の先にあるのはどうしりとした鉢に育った見事な「万年青の実」なのでしょう。故人の丹精していたものでしょうか。順番を待つという手持ち無沙汰な、ささやかな時間を「万年青の実」という季語が支配します。

万年青の実、ピシリと家のどこぞ鳴る

めいおう星

「万年青の実」のアップから、一転「ピシリと家のどこぞ鳴る」という描写に切り替える展開が巧いですね。古い家でありましよう家のどこかが「ピシリ」と家鳴りする現象を、昔の人たちは小さな妖怪がいるのだと考えたりもしたようです。「ピシリ」という家鳴りに「万年青の実」がかすかに揺れたような気がする、そんなリアリティも感じられた作品です。

夢に洗ふ鬼の目、玉万年青の実

ハラミータ

「万年青の実」を何かの「目」に喩える句もありました。が、この句のオリジナリティは「夢に洗

ふ」という措辞ですね。「夢」の中で何か赤いものを洗っている自分が出て、なんで私は「万年青の実」を洗ってるんだろうと思議に思い、手の中のモノを繁々と眺めてみると、それが「鬼の目、玉」であることに気付く……という夢。こんなやり方で「万年青の実」を表現できるとは、ちよつと吃驚の一句でした。

そりゃあ姉は堅物ですけど万年青の実

ねこ端石

「そりゃあ姉は堅物ですけど」という台詞だけで、ここにいる人たちの人間関係とか何の話をしているのかとか、もう色んな想像が動き出してきました。そりゃ姉は堅物ですけどね、だから行き遅れて独身を通してのも道理といわれりやその通りですがね。でも、華道教授として己の身を養いつつ、あれでいて心遣いの細やかな、優しいところもあるんですよ。なんてね。「万年青の実」は、まさにこの「姉」そのもののような風格と堅物感がありますなあ（笑）。

風水によれば万年青の実は東

田中憂馬

「風水」に拘る人もいるんですよなあ。「万年青の実」はたしかに縁起の佳い物ですけどね、アナタ、庭の片側に植えちゃあダメですよ。すぐに植え替えないと災いがきますよ。なんてね。

「万年青の実」を縁起物として贈り贈られる人たちは「風水」を信じやすそうな気がする、ってのはワタクシの一方的な偏見ではありますがね。

洪牙利の旗は血の色万年青の実

登美子

「洪牙利」は、ハンガリーと読みます。国名ですね。ハンガリーの国旗ってどんな色だっけ？と確認してみました。赤緑白の三色旗でした。赤は血、白は純潔、緑は希望を表すというこの国旗。赤には、血の歴史も象徴されているのでしょうか。「洪牙利」という当て字の字面が思わぬ効果を持った作品です。

おもとのみねんくみのいろですよ

ひろしげ7さい

「洪牙利の旗は血の色」の句の近くに、この一句を見つけて思わずにつこり。「おもとのみねんくみ」という発想は同じラインに違いありませんが、「1ねん2くみのいろですよ」という身の丈の把握が実に対象的。「1ねん2くみ」の色は赤。運動会の赤組は「おもとのみ」の色なのだと思議する一年生がいるという愉快に、乾杯でありますよ！

鰯

天

鰯掛ける針にたちからをのみこと

有櫛

たかが「鰯」の句に「たちからをのみこと」という言葉がでてくるとは思っていないかったので、とにかく吃驚しました。

「鰯」は釣るというよりは「掛ける」という表現がたしかに似合っています。ネット検索してみるとこんな解説もありました。

【ボラは専門的に狙う場合、ボラ掛け針と呼ばれる引っかけ針で釣る。冬のボラは目に脂肪がついてあまり視力が良くないので赤いひらひらしたものをエサだと思つて近づいてくる。そこを引っかけのわけである。】

その解説の傍らに添えてある写真、太い釣り針三本が放射線状に束ねられたシロモノ。これで「鰯」を引っ掛けるのが、一般的な釣り方なのだそうです。赤い疑似餌にふらふらと近づいてきた「鰯」をこの太い針で引っ掛ける場面を想像すると、「たちからをのみこと」という比喩が、生き生きと力強く働いていることに気付きます。「たちからをのみこと」とは、「日本神話で、天照大神（あまてらすおおみかみ）の隠れた天の岩屋の

黄落

天

パエリアのエビは有頭黄落す

天宮風牙

火曜日「俳句道場」の季語深耕にて、とおとさん、土居探花さん、可不可さんが指摘して下さった、季語「黄落」の特徴、覚えてますか。「散りながらもどこか明るい華やき」「いさぎよさや驚き、明るさ」「都会的で洋画的イメージ」、これらの感覚にも共感しますし、また紆余子さんの「黄落は現象そのもののみを指しているのか、それとも黄落している葉も詠んでいいのか」という問題提起も、この季語を考えていく上で重要なポイントだと思います。特に、後者に関しては、歳時記にこれといった明解な区別が書いてあるわけではないのですが、個人的な感覚としては「黄落」は落ちる現象を愛でる言葉というニュアンスで捉えています。

そんなことを考えながら、「黄落」を二物仕立てで描いた句はないかなあ……と選句していたのですが、いきなり、あまりにも美味そうなこの句に心を驚掴みされてしまいました（笑）。「パエリア」とは「パエリアまたはパエリージャ（バレンシア語：paella）は、米ど

鰻おどる上海パンスキングの夜

あつちゃん

「上海パンスキング」とは『上海パンスキング』は、斎藤憐作の戯曲。中華民国期（昭和初期）の上海を舞台に、時代に翻弄された人々を描いた作品」だとネット辞典には説明されています。その舞台を観たこともないのですが、「上海パンスキングの夜」という言葉に魅力があります。

「おどる」とするか「はねる」とするか迷ったとのコメントが附されていましたが、たしかに両者の効果は違いますね。「おどる」であれば、劇中のジャズ演奏の場面が猥雑な明るさをもつて立ち上がってきますし、「はねる」であれば迫る軍国主義の時代に翻弄される人々の点景が映像として見えにくる感じになります。作者あつちゃん描きたかったのはどちらでしょうか。

神代より泥の甘しと鰻跳ねる

鞍草子

こんな発想もあつたのかと、驚きました。「神代より泥の甘し」という把握そのものに詩があります。特に「甘し」は「鰻」に成りきらないと生まれない措辞ではないでしょうか。いやはや、参った！という一句でありました。「鰻」と「泥」の関係肯定的に受け止めると、こんな句も生まれるのですね！

のだ、と、次々に「鰻」への共感が重なってきました。

鰻とんだ競艇場の見える海 竹春

「鰻」が跳ぶ光景が「競艇場の見える海」へと展開するカメラワークが巧いですね。「鰻」のアップから広がっていく映像をきっちり描いています。俳句においては「見える」という措辞は基本的には不要ですが、この句の場合は必要な一語であります。

輸出車の並ぶ埠頭や鰻跳べり 太

こちらは港の光景。「輸出車の並ぶ埠頭」という措辞が一気に光景を立ち上げます。俯瞰した映像を思わせるのが「並ぶ」という動詞。「埠頭や」という詠嘆も、その効果を後押しします。下五「鰻跳べり」の動きが一句のアクセントにもなります。

鰻飛んで二日荒れたる木場の海

江戸人

「鰻飛ばや木場の丸太の深眠り」という句もありました。どちらも巧いなあとあります。「木場の丸太の深眠り」という擬人化も「木場」の様子を巧く表していますが、「二日荒れたる木場の海」は時間経過を含めての表現。「二日」荒れた「海」は河口からの濁った水も流れこんでいるのでしょうか。時間と情景を見事に描写した作品です。

鰻蹴つて夕日と臭み分かち合ふ

ハラミータ

同じ臭いを表現した句ですが、「鰻」は蹴られています。外道とはいえ、ここまでされる「鰻」も気の毒ですが、そこに強いリアリティがありますね。「夕日」の赤が「臭み分かち合ふ」という表現に実感を添えているのだらうと思います。

自転車 骸骨沈む鰻の河 初蒸気

こういう光景って、まさにアルアル感ですね。「自転車の骸骨」という比喻が読者の脳内にそのさまをありありと見せてくれますし、「沈む」という動詞から「鰻の河」という展開も非常に映像的です。「自転車の骸骨」の傍をぬるりと泳いでいく「鰻」の姿が見事に見えてきます。

橋脚の水深を擦る鰻の鬱

めいおう星

「鰻」はなぜあんな汚い河口で平然と生きているのだらう。なぜ跳ぶのだらう。そんな思いに対する答えが「鬱」の一語で表現されている作品。そうか、「鰻」は鬱々として臭い水の中で生き、その「鬱」が凝って臭い身となるのかも知れない。「鰻」はその「鬱」を持て余して、重い体を宙に抛ちたくなるのかもしれない。同じ跳ぶ魚トビウオの跳ぶ動機とは、全く違う理由で「鰻」は跳んでいた

地

釣果へとしぶしぶ加へ鰻の数

矢野リンド

釣り人は「鰻」を外道だといいますが。釣つても捨てる。釣つて帰ると嫌がられる、そんな「鰻」も今日は「釣果」の一つに加えねばならぬか、という日もあるでしょうね。「釣果へとしぶしぶ加へ」という措辞のリアリティに思わず笑った作品です。

捨てられし鰻の臭気が満ちる夜

紅あずま

「捨てられし鰻」という扱いは「鰻」の宿命というヤツでありましょう。堤防に「捨てられ」ている「鰻」が「臭気」を放ちだす「夜」。「鰻の臭気が満ちる夜」という措辞が、暗い足元から立ち上ってくる実感を表現します。生臭い夜の風がぬるく鼻に集まってくるような作品です。

地

しなやかに黄落へむく馬のくび

軒余子

ころとして知られるスペイン東部バレンシア地方発祥の、米と野菜、魚介類、肉などを炊き込んだ料理」とネット辞書には書いてあります。米の上にこれぞとばかりに重ねられた貝やエビが特徴のこの料理。パエリア鍋にくつついたお焦げの香ばしい香りまでもが、実に美味しい一品です。

「パエリアのエビは有頭」これだけの措辞で、「パエリア」が映像としてありありと再現されている点がなんとも見事。(米を着色する材料として使われる) サフランの黄色、有頭エビの赤を描いているだけなのですが、熱々のパエリア鍋が運ばれてきた時の印象はまさにこの通り。鮮やかな切り取り方です。「有頭」の一語もいかにも豊かな印象です。

黄落の激し仁王の動けぬほど

丸山清子

「馬」のちよつとした表情を切り取った二句ですが、「しなやかに」の一語が「馬のくび」の質感も表現していて、巧いですね。上五中七「しなやかに黄落へむく」までは何が「しなやか」で何が「むく」のか分からないまま、下五で「馬のくび」が出てくる語順が、この句の魅力を作り出しています。

この句で最も誉めたいのは下五。上五中七で「パエリア」のことだけを描写し、カットが切り替わり、卓上の「パエリア」からこのレストランを包む「黄落」への展開、実に巧いですね。「黄落」の窓、秋のひかり、硝子のひかり、店内のざわめき、ワイングラスの音、香ばしい香り、有頭エビの赤、サフランの黄色。「黄落」という季語が、全てを包み込む空間が立ち上がってきます。「黄落」の黄色とサフランの黄色が、豊かに調和した作品。ああ、「パエリア」が食べたくなってきました！

「仁王」が動けないのは当たり前なのですが、「黄落」の激しさに「動けぬほど」の感動を覚えている作者自身の感覚が、「仁王」に転化されています。「仁王」像のいる山門の前で、「黄落」の激しさに身を置く作者がありありと見えてくる佳句です。

カムイ棲む山黄落の火ぶた切る

勿忘草

「カムイ」とは「アイヌ語で神格を有する高位の霊的存在」を意味します。「カムイ棲む山」は、この地で最も高い山なのでしょう。「黄落の火ぶた切る」という措辞が、巧いよね。「黄落」の黄色のイメージに対して、「火ぶた」の火色のイメージが重なってくる点も大きな魅力です。

恐竜の眼窩明るき黄落期

雪うさぎ

これもいいなあ！「黄落」は黄色の葉がきらきらと落ちるひかりの光景を指しますが、「黄落期」という傍題には時間の幅がのっかってきます。敢えて「黄落期」を使う意味のある句(下五を五音にしたいから「期」を付けてみたというのではない句)には、なかなかお目にかかれないのですが、この句は「恐竜」という存在が「黄落期」という季語を支えます。絶滅してしまった「恐竜」たちの「眼窩」にこの明るい「黄落」が映っていた時代もあったのではないか、という想像そのものが詩。これも「天」に推したい句の一つでした。

寝袋に黄落を聞く樹海の夜

山上博

「黄落」は黄色という色彩に特徴があるわけですが、それを「夜」の闇の中の、しかも「寝袋」の中で感知する展開にもつてきたのが、意欲的な試みです。「寝袋」の中に「黄落を聞く」という夜の静けさ。「樹海の夜」ともなれば、その静けさに凄みがでてきます。深い深い闇の夜です。

無口なる木に黄落の理由をきく

ジャンク堂

「ニューメキシコ北方のジカリラ・アパッチ族の話によれば、彼らの祖先が大地に現れたころは、

木は話すことができたそうです」とのコメントも添えられています。たが、しゃべるはずのない木を「無口な木」と表現した点に詩があります。「黄落の理由をきく」は、「黄落」の木ならば交信ができそう、という詩的共感を誘います。

黄落を斜めに渡る山師かな

クスウジュンイチ

「山師」には三つの意味があります。①鉱山の発掘や鉱脈の発見・鑑定をする人。②山林の伐採や立木の売買に従事する人。③投機的な事業で金儲けをたくさんむ人。また、儲け話を持ちかけて他人を欺く人。どの意味にとるかで、それぞれ光景が変わってきますが、私は①の意味で詠みましました。なぜそう思ったのだろうと、改めて考えてみると、「斜めに渡る」という措辞が、鉱脈を探して岩肌から岩肌へと動いていく人物を思わせたのかもしれません。「黄落」の黄色と、岩の灰色が映像として美しいと思ったのかもしれない。

黄落を毎晩ずっと歌ひけりまこち小学生俳人まこち君の一句ですが、上五「を」の使い方に技があります。「黄落に」「黄落の」「黄落や」と色々別の助詞を入れてみると、その違いが分かるのですが、「黄落を」の「を」は経過していく時間と空間を意味します。「黄落」という時間と空間を「毎晩」歌っているのは、誰でしょうか。何でしょうか。なぜ「毎晩」歌うのでしょうか。小さな謎が読者の心にさまざまな陰影を投げかける作品です。

かみぶきみたいねきょうのころくはひろしげ7さい

もう一人の小学生俳人のつぶやきにも惹かれました。本人はそういう気持ちで作ったのではないのだろうとは思いますが、平仮名書きのこの句には、そこはかない哀しみが漂っているように思えます。「かみぶき」のような「こころく」の中で、人は哀しみという言葉を始めて知るのかもしれない。と、そんなことを感じさせられた作品でした。

夜寒

第88回 2014年11月3日週の兼題

天

夜寒なりじきにこの子は雪も知る

茨城翔子

まずは、本サイトが底本としております講談社版「新日本大歳時記」の「夜寒」の解説を紹介しておきます。

【冬になるには少し間のある晩秋の頃、夜になって少し肌寒さを

覚えることをいう。火が恋しいと感じられる季節であるが、暖房を入れるには幾分早く、一枚羽織つてしのいだり、はやばやと寝に就いたりする。昼夜の気温差が大きく、間近に迫る冬の訪れを肌で感じる。夜は部屋を閉め切ることが多くなり、外に向かいがちだった気持ちや屋内の身近なものに向ければ、しっとりとした心持ちになつていく。こんな夜を重ねるうちに、しだいに本格的に冬仕度を調えていくことになる。昼間は晩秋、夜は初冬という行きつ戻りつする季節や寒暖の振れを情趣深いものとして、昔から詩歌の題材に好まれた。」

この解説を書いているのが、太田かほりさん。美事だなあと拝読しました。個人的な夢として、いつか『百年歳時記』を編纂したいと考えているのですが、お手本にしたいような解説文です。特に、「外に向かいがちだった気持ちが屋内の身近なものに向けられしっとりとした心持ちになつていく」という季語の心理的な部分の把握。深く納得した次第です。

さて、今週の「天」に推した一句に話を戻しましょう。「夜寒」と「雪」の季重なりですが、明らかに「夜寒」が主たる季語ですね。上五「夜寒なり」と断定し、その断定の力が中七下五「じきにこの子は雪も知る」の思いを際立てています。

それにしても「じきにこの子は雪も知る」という叙述、巧いですね。これだけの言葉で、今年生まれした赤ん坊が目の前で眠っているのに「夜寒」の夜を過ごしているのが分かります。夜の空気を冷たく感じて、赤ん坊に「一枚着せかけたところでしょうか。」

何気なく呟いたようにみえますが、「じきにこの子は雪も知る」の助詞の使い方が絶妙です。例えば以下の例と比較してみましょう。「じきにこの子も雪を知る」こうなると、他の子もそうだったように「この子も」雪というモノを「知る」ことになるよ、という意味ですね。他の子もこの子も「雪を知ることが当たり前のこととして描かれています。」

対する掲出句の「じきにこの子は雪も知る」の、「この子は」の「は」は、他と区別して一つを指さす働きを持った助詞です。他の子もいるんだけど、まさに目の前で眠っている「この子」は、と取り立てて言うわけです。この「は」の語だけで、作者の愛情の目線が表現されます。さらに「雪も」の「も」は、他にも色々あることを示す働きを持つ助詞です。「この子」はすぐに「雪」も「知る」ことになるよ、他にも沢山のことを一つ一つ体験しながらすくすくと育っていくに違いないよという、これもまた愛の一語の「も」なのです。やがて「雪も知る」ことになる「こ

の子」は今、生まれて初めての「夜寒」の夜の中で、すやすやと寝息を立てているのでしょうか。

地

降嫁せし出雲の国の夜寒かな

しげる

高円宮家典子さまと出雲大社千家国麿さんのご成婚のニュースからの一句ですね。「降嫁」とは「皇女または王女が臣下にとつぐこと」と辞書にはありますが、とはいえ嫁ぐ先が出雲大社の神事を担う出雲国造を代々務める名門の家ですので、悲壮感めいたものがあるわけではありません。

が、作者の視線が優しい一句ですね。嫁いだ先の「出雲」は西の地とはいえず、冬の寒さは厳しい土地でもありません。深秋の「夜寒」に慣れず、心細いお気持ちになられる夜もあるのではないのでしょうか、という心のこもった御挨拶句であります。

太りゆく凶星エボラ夜寒し

めいおう星

こちらは「エボラ」出血熱のニュースからの一句。「太りゆく凶星」とは、禍々しい不吉な赤い星でしょう。その星こそが「エボラ」であるよ、という名指しの告発。不安を掻き立てるような「凶星」は、季語「夜寒し」の世界にその存在感を膨らませていきます。

カタコンベ湿りて匂う夜寒かな

公毅

「カタコンベ」とは「古代キリスト教徒の地下墓地。迫害時には礼拝所としても使用された」場所です。「カタコンベ」という響きが、「湿りて匂う」という措辞や「夜寒」という季語の手触りに似合います。かび臭くて冷たい空気が、読者の鼻先に再現される一句です。

硫黄来る夜寒の原に眠りたり

理酔

「硫黄来る」をどう解釈するかによつて句中の場面が変わってきますが、ひとまず「硫黄」の臭いが漂つて「来る」と、解釈させて頂きました。「夜寒の原に眠りたり」は野営キャンプでしょうか、山小屋での仮寝でしょうか。「硫黄」の臭いが、心を不穏に掻き立てる「夜寒」であります。

沈みゆくエレヴェーターにある夜寒

雪うさぎ

「エレヴェーター」の句はよく見るので、句材そのものに新鮮味がある作品ではないのですが、「沈みゆく」が「エレヴェーター」の中にいる人物の感覚を描写しつつ、そのまま「夜寒」という季語の中に、まさに沈んでゆくという叙述が巧いですね。さらに、「夜寒な」紫煙吸ひ込む換気扇「所在なく瓦斯に手かざす夜寒かな」「動かざる夜寒の壁のわが火影」など

の何気ない句も実に映像をよく切り取つていて、この作家の実力に改めて感じ入った次第です。

闇のよな猫ひざに寄る夜寒かな

江口小春

「夜寒」と「猫」の句、沢山ありましたね（笑）。その中で、金曜日に残したのがこの一句です。中七下五猫ひざに寄る夜寒かな」は完全なる類想ですが、上五「闇のよな」という比喩に個性があります。「闇のよな」を、ただの黒猫だと読むだけでは勿体ないですね。外から戻ってきた冷気と湿気を身にまとっている黒猫だと読むと、「闇のよな」という比喩が生きてきます。それによつて「夜寒」という季語がリアリティをもつて迫ってきます。

部屋中の夜寒が宿るベン先の

あつちゃん

「部屋中の夜寒が宿る」のが、何だというと「ベン先の」だという、この焦点の当て方が巧いですね。滑らかな万年筆とかではなく、昔ながらの力リカリ音のするような「ベン」なんだろうと思います。音だけでなく、指先のひつかかる感触も含めて「夜寒」を表現した作品です。

マイルスに夜寒の針が触れし音

ジャンク堂

こんなかすかな「音」に「夜寒」

神無月

天

みくまりの夜はしづまりて神無月

有櫛水母男

を感じる人もいるのですねえ。「マイルス」とは、マイルス・デイビス。最近、CDではなくレコードで聴きたいというマニアも増えていくと聞きます。「夜寒の針が触れし音」が、読者の耳にもありありと蘇ります。ジージーという静かな雑音の後に、トランペットの響きも聞こえてくる「夜寒」の夜は深くと更けていきます。

糠床の中に夜寒のたなごころ

今野澤 夢

なるほど、これも実感だろうなあくと納得しました。「糠床」の中に手を入れた、「糠」の冷たさに「夜寒」をさらに感じ取る「たなごころ」。同じ光景を描くにしても、さまざま語順が考えられるのですが、この語順は絶妙。「中に」の「に」という助詞の選択も適切です。「糠床の中の夜寒のたなごころ」と比較すると、その効果に気付いてもらえるはずで

雑巾をジャノメミシンで縫う夜寒

位子

光景の懐かしさに立ち止まってしまいました。「ジャノメミシン」という固有名詞と助詞の力が、何気ない出来事を小さな詩にします。♪母さんが夜なべをしてゝなんて歌がありますが、掲出句の光景もまた、ある時代の母さんの姿を象徴しています。

「みくまり」とは「山から流れ出る水が分かれる所」を意味します。漢字で書くと「水分」、私のパソコンでは「みくまり」と打てば一発でてくる漢字です。実生活では馴染みの無い言葉ですが、知ってみるとなんと美しい日本語なんだろうと思います。

分水嶺（ぶんすいれい・雨水を異なった水系に分かつ山の峰々）から、それぞれの水系へと水は分かれていくわけですが、その水を分けることも、実は神さまの役目なのです。「水分神（みくまりのかみ）」という神さまの名をご存じでしょうか。辞書には「日本神話で、水の分配をつかさどる神。天水水分神（あまのみくまりのかみ）と国水分神（くにのみくまりのかみ）があり、豊作の神として信仰された」と解説されています。

人間が生きたるために必要な水の分配を司る「みくまり」の「夜」の分配の世界にあるのは、その「夜」の静けさのみです。神がみな出雲へと旅立った「神無月」の夜には、一体誰がどのように水を分配してくれるのだろうか、という作者の思いにハツとします。「みくまりの夜はしづまりて」という措辞のあとに浮かび上がる「神無月」という季語の存在に圧倒された一句でありました。

地

何はさておき神有月の湯に浸かる

不知火

「神無月」の傍題「神有月」は、出雲の地を意味する季語でもあります。その働きをなんとかうまく使ったかと思わず膝を打ちました。出雲に到着した旅の宿。「何はさておき」まずは温泉に浸かうではないか、という旅の楽しさ。「神有月の湯」に首まで浸かった作者の口をついて出た言葉が、そのまま俳句になりました。

神の留守炉は生きているか死んでいるか

大塚迷路

こちらも「神無月」の傍題「神の留守」をうまく使いこなしただけです。「炉は生きているか死んでいるか」の「炉」は原子炉でしょう。廃炉への何十年の工程の中の「今」に対する、問いかけの言葉だと読みました。「神の留守」という季語が不安な思いを掻き立てます。

かくりごとめかす日記や神無月

とおと

「かくりごと」は、初めて知った言葉でした。調べてみると、「顕事（あらわごと）」に對比する「幽事（かくりごと）」だと分かりました。「かくりごと」とは「神事（しんじ、かみごと）と同意語」で、「神職者の仕事や、神様の仕事（人間たちのお願いを聞いたり、罰を与えることなど）のこと」なのだそうです。

まるで自分が神の立場にあるかのような書き方をしている「日記」とは、何やら不穏な心持ちがします。「神無月」だからこそ、その重いが募るよという一句です。

盛塩の碧き光や神無月

夢蟲

「盛塩の碧き光や」という描写が巧いですね。料亭などの門前に置かれている「盛塩」を思い出した。昼間ではなく、夕暮れ時を思ったのは、料亭という想像からかもしれないませんが、「碧」の一字の効果でもあったかと思えます。

以下、夢蟲さんのコメントも紹介しておきます。

●近所の一軒、玄関に盛り塩を欠かさない。日暮れが早くなつて気付いたのだが塩は光を蓄える性質を持っているようだ。終電を降りて通りがかったも微かに浮上って見える。／夢蟲

絵馬の馬ついて行きたる神無月

ぼたんのむら

「絵馬の馬」もついて行きたくな、という発想が楽しい作品です。

絵馬は、奉納された大きな絵馬を想像しても、願い事を書く小さな絵馬を想像しても、それぞれの味わいですね。「神無月」の句としては軽やかな作品でした。

神無月紙の薄さの月上げて

舞

「神無月」は冬の初めですから、さまざまものが冬めいて感じられる季節。そんな夜には「月」も頼りなげに見えるのでしょう。「紙の薄さの月」という表現が巧いですね。「月」との季重なりではありませんが、「神無月」が主たる季語として、一句の光景を統べています。

猿山に猿おらび合ふ神無月

みちる

こういう発想の句を想定してなかったで、この迫力に、おおつ！と押されました。「猿山」を動物園の人工の猿山だと読んでもいいのですが、私は野生の猿が住んでいる「猿山」だと読みました。

今日はやけに「猿」が「おらび合ふ」なあ……という眩きが「神無月」という季語と響き合います。季語から想像される冬ざれの光景を、猿の叫び声がますます蕭条たるものにさせます。

家系図はみんな彦の字神無月

四万太郎

代々続いてきた名家なのでしょう。「彦」とは、男子の美称。「容

姿や才に秀でた男子」という意味も持っています。ひよつとすると、海幸彦や山幸彦の時代から続いてきている「家系図」？なんて読めるところも楽しいですね。

神無月こはたらちね助産院

葦信夫

「たらちね」とは「母」という言葉に掛かっている枕詞。なんとまあ、素晴らしい名前の助産院でしょう！ まさかほんとにあるのか？ いやいや作者の命名だろうと思つたら、作者コメントにこんな文言。【検索したらこの名前の助産院がほんとにあつてびっくりしました！】 いやはや、凄いい名前を見つけましたね（笑）。神さまがみんな出雲に行つてしまった月でも、「たらちね助産院」は健やかな出産を約束してくれてるようで、なんとも優しく頼もしい助産院です。

第90回 2014年11月24日週の兼題

ジャケツ

天

ジャケツの腕の淫靡に折れ曲がる
クズウジュンイチ

火曜日の「俳句道場」にて「ジャケツ」と「ジャケツ」の違いについて情報交換しました。元々「ジャケツ」というのは、毛糸で

編んだカーディガン・ジャケツのことを指していたんだけど、現代の歳時記の「ジャケツ」は、もつと色んな素材の上着（スーツよりくだけた上着）を意味するものになつていましたね。

ひとまず兼題は「ジャケツ」です。出来れば「ジャケツ」ではなく「ジャケツ」の句をいただきたいと選句していたワタクシの目に、こんなヘンな句が飛び込んできてしまいました。申し訳ないですが、「ジャケツ」の「物仕立てとして「淫靡」などという言葉が機能するとは思つてもいまいませんでした。

今、脱いだ「ジャケツ」がそこに置かれていたのでしょうか。ハンガーに掛けられているのかもしれないですね。その「腕」の当たりが生身の人間の痕跡そのままだ「折れ曲がる」という描写はできるかもしれないが、それを「淫靡」と描写したとたん、この「ジャケツ」は生々しい存在として、臭い始めます。生ぬるい体温を持ち、生臭い息を吐き、生温かい「淫靡」な臭いを発し始めるのです。脱ぎ捨てられた「ジャケツ」をここまで生々しく表現できる感覚は、まさにクズウジュンイチという作家の持つ奇才でありましょう。いやはや驚きました。

地

古着屋の倫敦臭きジャケツかな

樫の木

こちらは「ジャケツ」部門で「天」に推したかった作品です。毛糸編みの古い「ジャケツ」を「古着屋」で見つけたのでしょうか。イギリスの紳士が着ているような「ジャケツ」だなあという印象が「倫敦臭き」という比喩となつたに違いありません。

同じような発想で「ジャケツ」を脱げば倫敦の夜霧のにほひ」という緑の手さんの句もあつたのですが、この感覚を季重なりにならぬよう表現すれば、樫の木さんの作品になるのかと思います。「ジャケツ」と「ジャケツ」の違いを読み解いていくにも、対照的な二句であります。

ジャケツの憤死している赤いソファ

三重丸

「天」に推した「ジャケツ」は「淫靡」でしたが、こちらは「憤死」です。一日の労働の果ての「憤死」と読むか、男女の関係における「憤死」と読むか、さらにさらにドラマは枝分かれしていきまう。そんな想像を掻き立てるのが「赤きソファ」の存在かもしれないなと思います。

ジャケツの鳥のかたちに眠りをり

内藤羊卓

「淫靡」「憤死」の次は「鳥のかたち」です。こうなると一気に優しくなりますね。「ジャケツ」を二つに折つてソファに置くと、なるほどこうも見えますね。「眠りをり」は「ジャケツ」の持ち主であり「ジャケツ」自身であり、と重ねた読みを展開してもよいかと思ひます。

ジャケツや同志が眠る丘の上

えちくらい

「同志」とは、かつて戦争を共に戦つた兵士でしょうか。大学紛争の仲間、文学運動の仲間、新しいプロジェクトに挑んだ仕事仲間、さまざま「同志」が浮かんできます。「同志が眠る丘の上」に付む「ジャケツ」は、（兵服やスーツではない）初老のイメージ。静かな時間と思ひを、季語「ジャケツ」が表現しています。

おさがりのジャケツ何の臭いだろ

三島ちとせ

お父さんから叔父さんから先輩からもらった「おさがりのジャケツ」を、ありがとうございませう！と手に取つてみると、今まで嗅いだことのない「臭い」がしているのに気付きます。ナフタリンでも煙草でも酒でもない、未知の「臭い」。誰かの人生が染みだ「臭い」の「ジャケツ」は、ずつしりと

重く作者の手にあります。

ジャケツの裏に象やら戦車やら

葦信夫

「ジャケツの裏」を描いた作品も何句かあつたのですが、「象やら戦車やら」という取り合わせの妙に笑つてしまいました。が、案外すぐく有名なデザイナーのセンスかもしれないと、小市民のワタクシは微妙に畏れ入っております（笑。「くやらくやら」という述べ方も軽やかで、句意に似合っていますね。

ジャズメンのジャックのジャケツは蛇紋

ゴマ四郎

「ジャケツ」の「ジャ」という音で遊ぼうという発想の句も幾つかありましたが、その中ではこの句が最も季語としての「ジャケツ」を表現できています。「ジャズメン」「ジャック」「ジャケツ」「蛇紋」で順々に光景が完成し、映像的にも焦点が絞られていく構造も巧いです。

山小屋のやうな貴方のジャケツよ

こま

「山小屋のやうな」が「貴方」にかかるのか、「ジャケツ」にかかるのか、はたまた「貴方のジャケツ」全体にかかるのか、多少読みを迷いましたが、最終的には同じイメージに収れんしていくので、これはこれで良いかと納得し

ました。「山小屋のやうな」という比喩は、「貴方」という人物の人格であり体格であり人柄であり、また「貴方」の「ジャケット」を着せかけられた時の作者の心持ちでもあるのでしょう。さりげない恋の句かなあ。

ジャケットや磯の香りのウエスキイ

田中ブラン

この句を読んだとたん、ある「ウエスキイ」の香りをありありと思ひ出しました。なんと驚いたことに、作者のコメント欄にあった具体的な酒の名前が、まさにワタクシの鼻腔に香ってきた酒の名！こんなこともあるのだと吃驚して思わず「地」に選んでしまいました（笑）。田中ブラン君、いつか一緒に酒飲もうな♪

●ツイードのジャケットとラフロイグ！（川強烈な個性を持つアイラ島のスコッチ）／田中ブラン

第91回 2014年12月1日週の兼題

冬の鴟

天

誰もゐない楽しい家や冬の鴟

杉山葵

なんだ、この句は……と、立ち止まってしまいました。「誰もゐない」という負の言葉と「楽しい家」という正の言葉。詩は、意味を捻

るところにも発生しますが、この句は意図的に捻ったというよりは、作者のナマな心持ちを語ってみるとこうなったのだろうと思います。

自分の暮らす「家」に戻ってきた時の心のゆらぎに対して自問自答してみると、「誰もゐない楽しい家」という言葉がコロンと結実していたという感触です。

さみしさと折り合うのが上手というか、さみしさを営めることに安らぎを求められるというか、そのような感情がそのままこの詩語となったのでしょうか。「誰もゐない楽しい部屋」ではなく「誰もゐない楽しい家」であることが、一句のニュアンスを深めます。

「誰もゐない楽しい家や」というフレーズ（特に「や」という詠嘆）は、「家」に入ろうと「家」を見上げている姿を想像させます。庭にきている「冬の鴟」を目にとめたのかもしれないね。「誰もゐない楽しい家」にいる安らぎとさみしさの配合に癒やされるワタクシ。そんな自分に「冬の鴟」を重ねる時、美しい寂寥感のようなものが、一句の奥行きとして広がってきます。

「誰もゐない楽しい家」で過ごす作者の日常にささやかな変化をもたらすものが、庭にくる「冬の鴟」だと読んでもいいですね。静かで冷やかで安らかで少しさみしい、そんな美しい日常が冬の水のようにながれていく暮らしで

す。

地

黄金の飛礫のごとく冬の鴟 麗門

ワタクシは「鴟」のことを「ちよつと上品な雀」だとずーっと思つてました。愛らしくも精悍な表情ですし、まさかこの子がカエルたちを枯れ枝に突き刺す?!と驚きました。「黄金の飛礫のごとく」という比喩は率直な感想だと思ひますが、「冬の」と関する意味があるのかどうか、少し迷いました。最終的には「黄金」という色と「冬」という季節の持つ色のイメージが綺麗だなあと思ひ直しての、地選です。

此処方彼ノ玉川上水冬ノ鴟

あつちやん

なるほど、こうきたかという一句。「玉川上水」は太宰治が愛人と情死した場所です。「此処方彼ノ」という感慨は太宰への傾倒を示す言葉であると読むこともできます。「冬ノ鴟」の沈潜した悲しみがひたひたと冷たく伝わってくる作品です。

鍵穴にびしりと火花冬の鴟

雪うさぎ

玄関のドアでしょうか、車のドアでしょうか。「鍵穴」にキーを突っ込んだとたん「びしり」と飛ぶ「火花」にハッとします。手に伝わる

小さな衝撃が、そのまま「冬の鴟」の静かな攻撃性のイメージと重なります。

詩の賛として言葉あり冬の鴟

トレ妮庵

「鴟」から「賛」という言葉を連想する句は山のようにありましたが、「詩の賛」という詩語にしちゃうというところに工夫があります。「詩の賛として言葉あり」という定義は「冬の鴟」の静かな表情に象徴されるようでもありません。

冬の鴟啼きてわれらの二万年

葦信夫

「冬の鴟」の哲学者のような横顔がみえてくる作品です。秋の鴟と比較して、あまり甲高くは鳴かないのが「冬の鴟」ですが、一声高く啼いた「冬の鴟」は「われらの二万年」を見透かしているかのようです。

眼球に死角一点冬の鴟 有櫛水母男

普段「死角」なんてものは意識せず生きていくわけですが、「眼球に死角一点」と言われるとそれを意識せずにはいられない心持ちになります。その「一点」を目標として「冬の鴟」が自分の「眼球」の「死角」を突きにくるのではないかと、そんな妄想を抱きました。

土塊の乾きの匂う冬の鴟 紅の子

嗅覚で「冬の鴟」を描くという発想もあつていいでしょう。この句の巧さは、「土塊の乾きて」ではなく「土塊の乾きの」とした点です。「乾きて」だと状況を述べたことになりませんが、「乾きの」とすることで句の主体が明確になります。それによって「土塊」の傍らにいる「冬の鴟」も鮮明にみえてくるのです。

冬の鴟人を泣かせて貯めた錢

日暮屋

読んだとたん、この「冬の鴟」がまるで『ベニスの商人』のシャイロックみたいに見えてきて、「人を泣かせて貯めた錢」を手にしてある人の自嘲や悲哀や悲しみが綯い交ぜになつて迫ってくるような気がしました。泣かせる台詞でありますよ、日暮屋さん。

冬鴟の尾ほどのさやうなら

紆夜曲雪

「冬鴟の尾」を単位とすること、詩を醸し出した作品、秋の鴟とは違う沈静した「冬の鴟」、しかもその「尾」が揺れるほどの「こゑ」で告げる「さやうなら」とはなんと切ない別れの言葉でしよう。一語一語が次の言葉を引き出しつつ、イメージを構築していくテクニクも実に巧い作品です。

同時投句「立ち止まる僧の手にみな冬の鴟」の虚の世界にも強

鯨

く惹かれます。美しい「僧」たちと「冬の鴉」の静謐な美しさ。いつかの機会に丁寧な鑑賞文を書きたい！と触発された作品です。

天

鯨待つ砲手の涙の乾きけり

クズウジュンイチ

「鯨待つ砲手」という人物を一句の世界に置いてみるだけならば誰にでもできますが、この人物に強いリアリティをもたせられるか否かが、かなり高いハードルです。

一句を読んだとたん、行ったこともない南氷洋の捕鯨船の甲板に自分がワープしていることに驚きました。荒れる波、上下に揺れる船、冷たい波飛沫、悴む手、鯨が近くにいと分かる緊張感、「砲手」の横顔。垂れた「涙（はな）」が、そのまま乾いているという描写、なんたるリアリティでしょう。さらに「瞬も気が抜けない時間の経過が「乾きけり」という詠嘆となります。

「けり」は過去の助動詞ですが、元々は「気づき」を意味する語であつたそうです。その状況は兼ねてからそこにあったのに、今、ハッとワタクシが気付いた！という意味で、詠嘆や強意を示す言葉と

して変化しました。「鯨待つ」という状況「砲手」という人物、その「涙」がバリバリに「乾き」きつているという状態、それらが抜き差しならぬ映像として読み手に迫ってくる、迫力の「けり」の一句でありました。

地

オキアミの雪崩るゝ如く鯨割く

藻川亭河童

引き揚げられた「鯨」の腹を割いたとたん、さつき飲み込んだばかりであろう「オキアミ」が「雪崩」のように崩れてきたというのです。「オキアミ」という小さなモノから、「雪崩るゝ」という比喩へ、さらに「鯨割く」という状況へ、よどみなく映像化される言葉の連続。いやはな見事な作品です。

輸送機の眼下はるかに鯨の背

スズキチ

飛行機ではなく「輸送機」の二語が活きています。物資を補給するために飛んでいる飛行機は、どこを目指しているのでしょうか。私は、南極の観測基地への食料補給の場面を想像しました。「眼下はるかに」に広がる南氷洋、小さくみえる「鯨の背」は、この任務におけるささやかな楽しみでもあるのでしょうか。

西ノ島育つ鯨が来たる日も 奈津

「西ノ島」噴火のニュースに驚いたのも束の間、さらにどんどん島が広がっている事実が圧倒されます。「西ノ島育つ」と言い切った後に出現する「鯨が来たる日も」というフレーズが、実におおらかな詩。「鯨」たちにとっては、大自然のこのような変化は、驚くべきことではなく、共存していくべき当然の環境なのでしょう。

以下、作者奈津さんのコメントも掲載しておきます。

●西ノ島が旧島をどんどん飲み込んでいく様に驚愕。自然界は常に人知の遥か上を見せつけるな……。鯨は頭の良い動物らしいから、海の中で起こっていることなど人間の何百倍も知っているような気がします。／奈津

鯨飛ぶかつて前肢だったもの 理子

「鯨」が哺乳類であるということは、知識として理解しているのですが、なかなか納得しにくい感覚です。が、「鯨」の鰭を「かつて前肢だったもの」と表現されると、あの跳躍力が腑に落ちます。「かつて前肢だったもの」を波に叩きつけ、「鯨」は「前肢」が「前肢」であった頃の空を恋うかのように波飛沫をあげて飛ぶのです。

星幾つ死なば鯨は人となる

ヤスハル

「鯨」が哺乳類として陸にいた

時代そして海を選んだ時代、そんな悠久の時間に思いを馳せれば、いつか「鯨」が「人」になる日もくるのではないかと妄想も生まれます。「星幾つ死なば」は仮定形、星が幾つ死んだとしたら、鯨は人になれるのでしょうか、という句意として読ませていただきました。

使古した歯ブラシと目太くじらを捕る理由

ねこ端石

自由律の一句です。「使い古した歯ブラシ」というモノと「日本がくじらを捕る」という行為が「理由」という一語で並立に並べられる不可思議な説得力。「歯ブラシ」は常に使い古されるように、「日本がくじらを捕る理由」にも、これといった理屈があるわけではないでしょう。当たり前のこととして「歯ブラシ」は古び、当たり前のこととして「日本」は「くじら」を捕り続けるのです。

映写機の光ずどんと鯨撃つ

はまゆう

古い白黒ニュース映像のワンシーンが生々しく蘇ってきました。画面の傷がバチバチと光る「映写機」の映像。その画面には捕鯨の現場が映し出されています。「映写機の光ずどん」が、かの時代の映像の手触り。この時代の捕鯨は、食料を確保してくれる華々しい仕事であつたに違いありません。

鯨の血のいろ晴れの日のそらのいろ

葛城蓮士

先ほどの句の映像ニュースが、いきなりカラーになったかのような感触の一句。巨大な「鯨」が「血のいろ」は、捕鯨船の向こうに広がる「晴れの日のそらのいろ」とのあいだで強烈なコントラストを生み出します。表記の工夫が、一句の内容をひそやかに支えています。

瞑想の鯨はきつと歯が痛い

田中ブラン

哲学者みたいに「瞑想」している「鯨」って「きつと歯が痛い」んだよ、という発想そのものが愉快な詩です。こんな「鯨」とお友達になつて、哺乳類と歯痛について真面目な議論をかわしたいものだと思えます。工藤直子さんの「哲学するライオン」みたいな「瞑想の鯨」です。

牡丹鍋

第93回 2014年12月15日週の兼題

天

牡丹鍋これは銀次の十題目 理醇

今でこそ、牡丹の花のように猪肉を盛りつけ「牡丹鍋」という名を美しく表しておりますが、元々この名は花札から生まれた隠語です。「葉喰」という季語があるよ

冬至粥

天

災の字は火の水ると冬至粥

花屋

「冬至粥」は厄災や邪気を祓うという意味を持つ風習。厄災の「災」は、「火」という字が入っているのに氷っているような気がするよ、という発想に惹かれました。

最初読んだ時、「災の字は火の水ること」という比喩が「冬至粥」の温度を下げているような気がして、ちと不味い冬至粥か？とも思いました。食べ物の季語は、美味しように描くのが基本だと考えますので、そこがちよいと引つかかったわけですが、よくよく考えてみると、「災の字は火の水ること」という措辞の後に、沸々と煮る火は連想されるではないか、と思ひ直しました。

牡丹鍋村の娘がまた消える

可不可

最近「村の娘」が神隠しにあつたように、一人また一人と消えてしまう事件。まるで日本昔話のようないきなり事件。「牡丹鍋」が煮える炉端で、村の男たちはこの謎について話し合っているのでしょうか。「牡丹鍋」からこんな発想も生まれるのだと、愉しませてもらいました。

なつてきました(笑)。いやいや、賭け事はやつてはいけませんよ、初蒸気くん。

煙草吸う人にしなれた牡丹鍋

清水ゆうこ

なるほど、こういう場面を想像しても「牡丹鍋」には似合うんだなあ。「煙草吸う」人物と「しなだれる」人物、男と女のやや下卑た光景が「牡丹鍋」という季語の世界に展開されます。「しなだれ」ている女の着物の裾の肌襦袢が「牡丹」の赤なのだろうと、そんな妄想もうまれてきました。

鼻と尾は酒に化けたる牡丹鍋

蘭丸

火曜日だったかな、富士山さんが「役場に駆除した猪の尻尾を持って行くと1本1万円で補助があるそうです」という情報を寄せた場面です。除される生き物としてのイノシシの哀れも、現実であります。

一升瓶灰に突き立て牡丹鍋

江戸人

中七「灰に突き立て」の野卑な動作が「牡丹鍋」という季語の持つ一面を描きます。猪を撃つてきた男たちが「牡丹鍋」をつつきつつ、今日の成果を語り合っているのでしょうか。囲炉裏の「灰」に「一升瓶」を突き立てて、男たちの酔いはますます深くなつていきます。

ハイライト五箱掲げてよばれる牡丹鍋

初蒸気

「ハイライト」という煙草の銘柄が、何やらリアル。この「五箱」はお礼だなと思っていたのですが、いやいや酒飲みながら「牡丹鍋」喰いながら、最後は煙草をかけて花札始めたりするのも？なんて妄想が膨らむと、だんだん面白く

り、血肉のこびりついたそれをガリガリと嚙る「犬」が、ありありと見えてきます。さりげないですが、「傍らに」という措辞の効果も大きいですね。

「天」に推したい一句でありました。

脂身の厚みおそろし牡丹鍋

毛利あづき

これは率直な感想。始めて食べた猪肉の「脂身」は「おそろし」というしかない「厚み」であり、毛穴に棘みたいな毛の名残(?)が残っていて閉口したことを思い出しました。こういう句は、言い切ったもん勝ちかなあ。

鉄黒き匂いをさせて牡丹鍋

カリメロ

こちらは印象。「鉄黒き匂い」は作者のおつかなびつくりの印象であり、色の印象でもあり、臭みの印象でもあるのでしょうか。身体には良さそうな気がするけど……という躊躇めいたものが、この措辞から読み取れます。「牡丹鍋」から始めずに、この語順にしたのは大事な配慮でありました。

傍らに骨齧る犬牡丹鍋

樫の木

「犬」という存在を取り合わせる句も幾つかありましたが、この句の描く光景は明確。猟犬のご褒美としての「骨」が土間に転が

うに、江戸時代には獣肉食が禁忌とされていました。花札の「猪」が「牡丹」の絵と取り合わせられていたので、この名がつけたという話は、皆さんご存じの通りです。盛りつけの牡丹の花のイメージは後付けの理由なんですよ。が、時代を経て、さまざまなイメージを重ねつつ熟成していくのが季語という言葉。そんな季語「牡丹鍋」を吟味していくうちに、この句が目にとまりました。

なんととっても巧いのは、「これは銀次の十頭目」という表現。この措辞だけで、「銀次」が猪撃ちであり、この世界に少しずつ慣れてきている男であることが読み取れます。さらに丁寧に読み解いていけば「これが」ではなく「これは」ですから、他にも撃つた猪の肉はあるんだけど「これは」銀次の撃つたヤツだよ、というニュアンスになります。このあたりの助詞の選び方がベテランらしい巧さです。

花札の隠語としての「牡丹鍋」の世界に「銀次」という名が似合いますし、季語の持つ色のイメージ「牡丹」の赤、「銀次」の「銀」の取り合わせもニクイ作品です。

地

牡丹鍋喰がせ胎児を弾ませる

中原久遠

これ絶対、味噌味の「牡丹鍋」

うに、江戸時代には獣肉食が禁忌とされていました。花札の「猪」が「牡丹」の絵と取り合わせられていたので、この名がつけたという話は、皆さんご存じの通りです。盛りつけの牡丹の花のイメージは後付けの理由なんですよ。が、時代を経て、さまざまなイメージを重ねつつ熟成していくのが季語という言葉。そんな季語「牡丹鍋」を吟味していくうちに、この句が目にとまりました。

これは率直な感想。始めて食べた猪肉の「脂身」は「おそろし」というしかない「厚み」であり、毛穴に棘みたいな毛の名残(?)が残っていて閉口したことを思い出しました。こういう句は、言い切ったもん勝ちかなあ。

鉄黒き匂いをさせて牡丹鍋

カリメロ

こちらは印象。「鉄黒き匂い」は作者のおつかなびつくりの印象であり、色の印象でもあり、臭みの印象でもあるのでしょうか。身体には良さそうな気がするけど……という躊躇めいたものが、この措辞から読み取れます。「牡丹鍋」から始めずに、この語順にしたのは大事な配慮でありました。

傍らに骨齧る犬牡丹鍋

樫の木

「犬」という存在を取り合わせる句も幾つかありましたが、この句の描く光景は明確。猟犬のご褒美としての「骨」が土間に転が

なつてきました(笑)。いやいや、賭け事はやつてはいけませんよ、初蒸気くん。

煙草吸う人にしなれた牡丹鍋

清水ゆうこ

なるほど、こういう場面を想像しても「牡丹鍋」には似合うんだなあ。「煙草吸う」人物と「しなだれる」人物、男と女のやや下卑た光景が「牡丹鍋」という季語の世界に展開されます。「しなだれ」ている女の着物の裾の肌襦袢が「牡丹」の赤なのだろうと、そんな妄想もうまれてきました。

牡丹鍋村の娘がまた消える

可不可

最近「村の娘」が神隠しにあつたように、一人また一人と消えてしまう事件。まるで日本昔話のようないきなり事件。「牡丹鍋」が煮える炉端で、村の男たちはこの謎について話し合っているのでしょうか。「牡丹鍋」からこんな発想も生まれるのだと、愉しませてもらいました。

「冬至粥」は厄災や邪気を祓うという意味を持つ風習。厄災の「災」は、「火」という字が入っているのに氷っているような気がするよ、という発想に惹かれました。最初読んだ時、「災の字は火の水ること」という比喩が「冬至粥」の温度を下げているような気がして、ちと不味い冬至粥か？とも思いました。食べ物の季語は、美味しように描くのが基本だと考えますので、そこがちよいと引つかかったわけですが、よくよく考えてみると、「災の字は火の水のこと」という措辞の後に、沸々と煮る火は連想されるではないか、と思ひ直しました。

「災」という字はいかにも厄災っぽいよ、だってこの一字は「火」が氷つてみたいじゃないか、という思いが「冬至粥」を煮るという行為を意味あるものにします。厄災をやっつけるように、「災の字」を溶かすように、「冬至粥」を煮る「火」はあたたかい色に揺れています。熱々の「冬至粥」をふうふう食べれば、人々の心にある氷った「災」をこごとく溶かし

てくれるに違いありません。喉から腹におちてくる粥の熱さこそが「災」が溶ける実感となつて、季語「冬至粥」を表現します。

「冬至」という言葉の持つ冷たいイメージが「氷る」の一語に、「粥」の二字が持つ熱いイメージが「火」に一字に、それぞれの言葉が巧く印象を重ね合っているところもよく工夫された作品です。

地

冬至粥瓦斯的の幾帳面 鞠月

こちらは「冬至粥」を煮る「瓦斯的の炎」を描いた二句。「几帳面」という擬人化が、「冬至粥」という風習をきちんと実行している人物の横顔を思わせます。少し青みがかった「瓦斯的の炎」は、律儀に実直に「冬至粥」を煮立たせていきます。

喉元に邪鬼の一匹冬至粥 今野淳彦

「邪鬼」「邪気」という言葉がでてくる句が沢山届いた今週ですが、なるほどこういう展開もあったかと愉快になりました。「喉元」にいる「邪鬼」は、熱々の「冬至粥」にやつつけられてしまうのでしょう。自分の喉元に巣くつている「邪鬼」は、言いたいけど言えない悶々とした思いかもしれませんし、もと根源的な「邪」の存在なのかもしれません。

灰汁色の夜のしつぽや冬至粥 妙

「灰汁色の夜のしつぽ」という比喩に惹かれます。小豆の「灰汁」の色かなあと読みました。ここことと煮る行為が「夜のしつぽ」という感覚とも響き合います。「や」の詠嘆の後、季語「冬至粥」の画面に切り替わる構造も、内容に似合っていますね。

仏壇と雀に小分け冬至粥 しげる

「仏壇」に「冬至粥」を供えるという発想の句はいくらでもあるかと思いますが、「仏壇と雀」となると、一茶翁のような好々爺のイメージ。「小分け」という行為が季語「冬至粥」をほのぼのと描きます。勝手な読みですが、「仏壇」には婆さんの位牌があり、長年連れ添ってくれた妻を思いながら暮らす日々が見えてくるような気がします。

よく世話をするとほめられ冬至粥 ちえ

「よく世話をすると」と誉められているのは、お嫁さんでしょうか。義父も義母も病氣だったり認知症だったりする、そんな家を支えているお嫁さん。よく世話してあげてやるよねえ、アンタは、なんて誉めてくれているのは親戚のオバサンでしょうか。冬至の日には「冬至粥」をコトコト煮る、できたお嫁さんであります。

十日目の一人湯治や冬至粥 小市

「十日目」「一人」という数詞が良い効果を生み出している一句。気長に治療していく「湯治」ですから「十日目」は、少しずつ身体が楽になつてきたなあという感じでしょうか。「十日」「湯治」「冬至」の韻がなだらかに調べを作り出す。

冬至粥すかすか骨にしみとほる いさ

「冬至粥」が「すかすか」ではなく、「すかすか骨」と読みました。骨粗しょう症みたいな「すかすか骨」ですね。熱い熱い「冬至粥」が胃の腑にしみ通るという発想はあるかと思いますが、我が「すかすか骨」に「しみとほる」という実感が愉快な作品です。

冬至粥放屁の割れる仕舞風呂 竹庵

「仕舞風呂」の悲哀めいたものはあまり感じませんで、飄々たる俳諧味の一句と読みました。腹一杯「冬至粥」を食って、おおいこれぞ邪気も厄災も祓いまくったぞうと言いながら、一日の疲れを落とすべく「仕舞風呂」に入る。満足の「放屁」一発が、己の尻の下で「割れる」という愉快。日々を生きてる実感に共感します。

福引

天

福引の玉に目玉がついてゆく 午後

「福引」は、あまり離れたものを取り合わせるのが難しい季語であると同時に、一物仕立てで描くには怖ろしいほどの類想類句が想定されるわけで、やってみると実に難しかったよね。そんな中、この一句の率直なりアリティにノックアウトされました。

「福引の玉」で7音ですから、ここからどんなオリジナリティのある詩句を展開していくか、あるいは「福引の玉」のリアリティを描き切るか、方向性は二択になりますが、掲出句は迷わず後者の路線をとりました。

福引器の玉の出口にじっと目をこらしていると、勢いよく「玉」が飛び出しコロコロ転がります。その「玉」が何色であるのかを追う視線。それを「目玉がついてゆく」とは、よくもまあ言えたものだ！と爆笑しました。「玉」を視線が追う、コンマ何秒の「目玉」の動きを、こんなふうに描写できるのが作者の実力。「目玉」というモノを自分の肉体の部位として明確に意識できているのが、さすがです。

北海道で牛を飼うことを生業

にしている鈴木牛後さんは、第1回『大人のための句集を作ろうコンテスト』最優秀賞を受賞した作家です。受賞作81句「根雪と記す」は、賞品のミニ句集として流布され、読者の心に深い感動を呼び起こしました。

正直なところ、牛後さんが掲出句のような俳諧味のある作品も書かれるとは思ってなかったで、そういう意味での意外性も含めて、愉しませてもらいました。

地

福引器しぶしぶ吐ける玉は白 とおと

「白」を外れ玉だと読めば、中七「しぶしぶ吐ける」の擬人化は、作者の心情をのつけた表現。逆に「白」が当たり玉だすれば、「福引器」が「しぶしぶ」特賞の玉を吐いたとも読めます。いずれの読みをとつても愉快な作品でした。

福引や廻しきらぬに赤い玉 井上じろ

こちらの「赤い玉」は間違いない外れ玉でしょう。念をこめて、さあ特賞の金の玉を出してみせるぞ！と「福引器」のハンドルを握ったと思ったとたんに、「赤い玉」がポトリ。ええー、嘘だろ！中七「廻しきらぬに」がそんな光景をありありと見せてくれます。

厳かに引けど福引き外れけり

しおあん

「厳かに引けど」という措辞が、心理かつ情景としてのリアリティを表現。厳かに引こうが、何気なく引こうが、「外れ」は外れなんだよね。下五「けり」の切れ字も厳かです（笑）。

ここまで三句見てくると、季語「福引」のリアリティは、「しぶしぶ吐ける」「廻しきらぬに」「厳かに引けど」という細部の描写の工夫から生まれているということが分かります。

ろろんとうたいたる福引の旗

緑の手

「福引」はこですよ、とたなびいている「旗」に目を付けた一句。なんといつても「ろろん」というオノマトペが秀逸です。誰にでも特賞が当たりそうな気分にさせる「旗」は、いかにも「ろろん」という気分。「うたいたる」という擬人化も楽しい一句です。

福引の品の埃のしらじらと

菜月

「福引」も最終日となつてくると、まだ当たっていない賞品には「埃」もたまつてきます。水曜日のお便り情報によると、特賞は最終日最後の1時間に入れる？なんて話もありましたが、そんな事実も含めて「福引の品の埃」はいかにも「しらじらと」そこにあります。

福引や張り子の干支を下げ帰る

銀命堂

「福引や」と二度切りつつも、中七「針子の干支」が賞品であったことが分かるのが下五「下げ帰る」ですね。大きな「張り子」が当たった嬉しさと半ばの困惑を想像すると、さらに愉快。さて、どこに飾ろうかと思案しつつの帰宅です。

福引や干支の張り子の中を鈴

はまゆう

偶然とはいえ、こんな句を発見！ 銀命堂さんと一緒に「福引」を引いたんじゃないかと思いたしたよ、はゆうさん（笑）。「干支の張り子の中を」の「を」が巧いですね。「鈴」が「張り子」の中を行ったりきたりしつつ鳴るさまが、この助詞一字で表現されています。

議題 福引の景品の件

ボメロ親父

商店街とか町内会とかの年中行事で行う「福引」なのでしよう今日の「議題二」は「福引の景品の件」なんだよなあ、これがまた毎年もめるんだよなあという町内会長の嘆きでしょうか。はたまた、「福引の景品」の決定権をほぼ握る商店街婦人会長の鼻息でしようか。「福引」の現場そのものから、少し離れた場面にジャンピングしてみるのも、発想法の一つですね。

福引の二等の象当たらぬやう

クズウジュンイチ

「福引」の賞品にどんなものがあるかを述べた句は沢山ありましたね。その筆頭がティッシュペーパーでしたが（笑）、逆にあり得ない賞品をもつてくるのも愉快な発想。そんな馬鹿な？と疑うのではなく、「二等の象」という不条理を愉しめばよい作品です。

ひよいと来て福引当てた京子ちゃん

みつこ

毎年毎年、抽選券をコツコツ溜めては引いてるのに、今まで一度だつて当たったことがないのに、「京子ちゃん」たら「ひよいと来て」ひよい引いて「福引」のハワイ旅行当てちゃうんだから、まいっちゃうわよ！ なんて、愚痴を含んだ笑い。いやはや「京子ちゃん」という名のリアリティに一票です。

第96回 2015年1月12日週の兼題

寒蜬

天

しみじみとお世話になろう寒蜬

春爺

今週の兼題「寒蜬」の難しさは、「浅蜬」でもただの「蜬」でもないんじゃないの？といわれる句に「なりがち……」ということでしょう。そういう意味で選句もさんざん

迷ったのですが、最初は何気なく選んでいたこの一句の滋味が、じわじわとしみ込んできました。「しみじみく蜬」と言葉遊びのような句なので、うっかり油断していたのかもしれない。

春の季語「蛤」「浅蜬」「蜬」を詠み分けるのも難しいのですが、冬の季語「寒蜬」の場合は「薬効があるとされている」という特徴が一つのポイントになりますね。そのイメージが一句にうまく入ってくると思うのだろなあと思います。

さて、掲出句にもどりましょう。「しみじみとお世話になろう」は、まるで小津安二郎の映画のお父さんが呟くような台詞です。この言葉に「寒蜬」という季語が取り合わせられるだけで、まさに映画のワンシーンのような光景が立ち上がってきます。

厨の桶の中で砂抜きをしている「寒蜬」を眺めているのでしようか、一腕の蜬汁の温かみを両手に感じていたのかもしれない。滋養に満ちた「寒蜬」の汁を一口吸ると、身体中にしみ渡る心地良い熱さ。一人暮らしを続けると強情に言い張ってきたけれど、もうそろそろ考え直してもよい頃かもしれない。「しみじみとお世話になろう」という気持ちがゆつくりと広がってくる、そんな場面。

この季節の「寒蜬」は身体によいから「お世話になろう」という

地

寒しじみ真水にすくふ朝の妻

有櫛水母男

なんと健康的な朝の台所でしょう。昨夜、塩水につけて砂抜きをしておいた「寒しじみ」をさらに「真水」で洗っているのでしょうか。掬いあげる「妻」の手の美しさまでみえてくるようなフレッシュな一句。「朝の妻」という時間の表現が、巧いですね。

寒蜬浸すきちんとした暮らし

鞠月

さきほどの「朝の妻」の暮らしは、まさにこんな感じなのだろうと思います。寒の頃になれば「寒蜬」を食べるといって、日本人の食文化を当たり前のように丁寧に実践していく「きちんとした暮らし」の清々しさ。「寒蜬」を浸した水のなんと美しいことでしょう。

寒蜬集えど音の寂しかり

カリメロ

「寒蜬」の小ささが「集えど」という表現になり、さらにそれを箆で洗うのだけれどその「音」の

冬芽

天

タイワンリス冬芽を蹴つて翔ぶ翔ぶ

小泉ルリ

悩みましたよ、今週の兼題「冬芽」。春を待つもののイメージが強いので、(動かない「冬芽」だっけど)そこには内なる躍動感があつて欲しいなあと、贅沢な思いをもつての選句でした。好きな句がたくさんあつたのですが、今週はこの一句を推すことに決めました。

「タイワンリス」について、ネット辞書にはこんな解説がありまして。「リス科の哺乳類。中形で、背側が淡緑褐色、腹側が灰褐色。四肢が短く、耳が短く丸い。主に樹上で暮らす。台湾の原産。伊豆大島をはじめ日本各地で野生化。」そうなのか、台湾にしか住んでいないという種ではないのかと、納得。日本各地で野生化しているという情報も、この句にさらなる勢いを吹き込んでくれたような気がします。

地

百万の冬芽の疼く大樹かな

みちる

このような光景を詠んだ句もあつたのですが、「百万」という数詞と「疼く」という動詞が、一句を堂々と立てています。全ての「冬芽」が疼き出すと「大樹」はゆっくりと目を覚ますのかもしれない。

城山の空は冬芽に明け渡す 野風

「空」と「冬芽」を描いた句も沢山ありましたが、この句は「城山の空」と具体的な映像をしつかりと描き、さらに「明け渡す」という複合動詞でオリジナリティを重ねます。擬人化は、意図が見え

殺生の歯にもかからぬ寒蜷

深呼吸

「蜷」を描くときに、「蛤」「浅蜷」よりも小さいという点の一つのポイントになります。それを「歯にもかからぬ」とは言い得て妙。「殺生の歯」という表現も、食うことでしか生きられない人間の性を巧く言い止めました。「歯にもかからぬ寒蜷」を食うて、滋養をいただくという皮肉も微量入っているでしょう。

広言の断酒怪しや寒蜷 たんと

飲み過ぎた深夜、二日酔いの朝「寒蜷」の熱い汁は五臓六腑にしみ渡ります。「断酒」するつていながら、また二日酔いの頭をかかえて「寒蜷」を飲んでいるという自己嫌悪が、俳諧味に満ちた一句に仕立てられました。

いやいや、ひよつとすると、この「寒蜷」を味わうためには、やはり深酒をしないと、なんてへそ曲がりな意味の「広言の断酒怪しや」なのかもしれませんね。そういうえば、水曜日のお便りに大塚迷路さんが、似たようなことを書いていたなあ(笑)。

寒蜷墓標のごとく湖に杭 檉の木

一読、六道湖の光景を思いうかべました。一句を読めば、「湖」が「蜷」の産地であるに違いないと推測できますし、「寒」の二字が一句の光景を寒々と描き出します。全体がモノトーンの印象になりますので、「墓標」という言葉とも響き合います。

井戸の神祀り大粒寒蜷 江戸人

「井戸の神祀り」という措辞で、なぜか時代小説の長屋の井戸端を思い出してしまったのですが、そんな偏った読みをしなくても、津久浦々にある「井戸」を思えばいいですね。そんな井戸には水神様の御札が祀つてあるところも多いでしょう。「井戸の神」は水の神そのおかげで、今年もこんな「大粒」の「寒蜷」をいただけるよ、という感謝の一句。小さいという「蜷」の特徴を踏まえた上での「大粒」という表現が活きています。

初七日の庫裡の華やぎ寒蜷 雨月

「寒蜷」の滋養は、嘆いている人たちの心をも慰めます。「初七日」の法要が執り行われている本堂。かたや「庫裏」では、精進落としの料理の準備がすすんでいます。その賑やかな準備のさまを「庫裏の華やぎ」と表現したのが巧いですね。その場面から「寒蜷」とカッパが変わる映像も鮮やかです。

青べかの地をたづねれば寒蜷

あつちやん

季語「寒蜷」を描くために産地の名前を詠み込む発想の句はたくさんありましたが、直接地名を詠み込まず「青べかの地」と表現したところに工夫があります。「青べか」とは山本周五郎の小説『青べか物語』ですね。小説の中にでてる「貝と海苔と釣場で知られる根戸川の下流にある漁師町・浦柏町」は、千葉県浦安市が舞台となっています。若き日にこの地に住んでいたことがある著者の実体験をもとに描かれた小説です。

小説で読んだ「青べか」の地を訪れてみると、なんと見事な「寒蜷」であることよ、というさや

かな感嘆。収穫の場を思つてもよいし、市場に並んだ「寒蜷」でも、汁椀の中の「寒蜷」でもよいでしょう。山本周五郎さんの文章もまた「寒蜷」のように滋味深い味わいです。

すぎると失敗しますが、この「明け渡し」は嫌味なく「冬芽」と「空」の関係を言い得ています。

鳥葬の部落幾千もの冬芽

中原久遠

「鳥葬の部落」といわれると、アンデスを思い浮かべるくらいが私の貧しい知識ですが、高地の乾いた空気の中で「幾千もの冬芽」は光り始めるのでしょうかね。「鳥葬」という言葉のインパクトが一人歩きせず、歴史という背景を含んだ光景として季語「冬芽」を際立めます。

牛の眼のひかりの先の冬木の芽

牛後

牛飼いの牛後さんならではの作品、美しいですね。「牛の眼」の濡れた大きな「ひかり」、視線をたどると「冬木の芽」の光がそこにあります。春を待つ思いは、牛も人も「冬木」も同じなのですね。

冬芽ほのあをし阿修羅のまだ愁眉

緑の手

「冬芽ほのあをし」と描写し、そこから一気に「阿修羅のまだ愁眉」と阿修羅像の映像をダブラせます。阿修羅像の眉間の皺がいつか無くなるわけではないのです。「まだ愁眉」という詩句が、まだほの青い「冬芽」を匂い立たせる佳句です。

炊き出しの湯気を仰ぎて冬木の芽

芭治留

言葉の経済効率が良い作品です。「炊き出し」の一語で、被災現場やホームレス村のような場所が「一気に立ち上がり」ます。「湯気を仰ぎて」で作者の立ち位置も明確に表現。見上げた先にある「冬木の芽」へと見事に視線が動いていきます。

御手植えの梟の木冬芽恙なし

こりのらはしに

これも言葉の経済効率が抜群。「御手植え」の一語で、かつて皇室のどなたかがここを訪れ植樹をなさった木がそこにあることが分かります。さらに植えたモノが「梟の木」であるというのが、いかにもお役所的チョイスだなぁというリアリティ。「冬芽恙なし」という平和で平穏な下五も、この句には絶妙な効果です。

冬芽あえかに服部時計店の前

江戸人

●所沢市に数十年住み続けていて、あまり電車ででかけない私にとつて、東京はまさに大都会（？）。「銀座の柳」は歌にも歌われているので知ってはいるのですが、果たして今でも、銀座の服部時計店前に柳があるかどうかは定かではありません。／江戸人
○江戸人さんのコメントにあるように、「服部時計店の前」という

表現で「銀座の柳」を連想させるところがこの句の眼目。さまざまな木の「冬芽」を「木蓮の冬芽」「櫟の冬芽」とか具体的な名前を出して書くのではなく、こんな方法もあつたか！と拍手を贈りたくなつた一句です。

冬木の芽ピカソと話できる人

バーバラ

「冬木の芽」と「ピカソ」の取り合わせがいいなあと思います。どちらも内なる強いエネルギーをもっているイメージ。さらにこの句の展開が面白いのは、「ピカソ」本人がどうだこうだではなく「ピカソと話できる人」という別な人物が出てくることです。「ピカソと話できる人」「ピカソの絵画と話ができる人」という意味。「ピカソ」の難解な絵画を独自の解釈によって味わえる人、ということでしょう。「ピカソと話できる人」はきつと「冬木の芽」の言葉も分かる人なのでしょう。

ヒーローは泣かない逃げない冬木の芽

カリメロ

この軽やかで明るい悲壮感もいいなあ。「冬木の芽」に、我慢して困難に立ち向かい未来を見つめる姿を重ねる発想の句は山のように届きましたが、その発想をこんなふうに表現するだけでオリジナリティがアップ！「ヒーロー」だって、しんどい時や泣きたい時や逃

げたくなる時があるに違いないよという思いが、作者の心を励ましたことのない）ハルビンの痛いように青い空が見えてきます。これは、「や」の一字の詠嘆がなせる力技でしょう。

第98回 2015年1月26日週の兼題

採氷

天

「ハルビンの空筒抜けや採氷す もね」
「ハル濱」は「ハルビン」と読みます。「市名の由来としては、白鳥を意味する満洲語、平地を意味するモンゴル語、榮譽を意味する女真語などの諸説があり定まつていない」とネット辞書には解説してありますが、旧満州国における歴史も含めてさまざまな連想が広がる固有名詞です。
ネット辞書のさらに解説は続きます。「夏と冬の温度差が非常に大きい顕著な大陸性気候である。1月の平均気温は-28.6℃と世界の大都市の中では最も寒い部類に入る。朝の最低気温は平均で-26.6℃にまで下がり、10度以下まで下がることもあるが、非常に乾燥していて降雪はほとんどない。この寒さのため、ハルビンは氷の町と言われている。」

氷の町と言われている「ハル濱

の空」を「空筒抜けや」と表現することによって、（個人的には見たこともない）ハルビンの痛いように青い空が見えてきます。これは、「や」の一字の詠嘆がなせる力技でしょう。

この地で実際に「採氷」が為されているかどうかは不勉強にして知らないのですが、採氷の作業において雪は品質を落とす要素となるという事実を知り、「非常に乾燥していて降雪はほとんどない」というハルビンの気候の特徴は「採氷」にうってつけに違いないと推測します。「ハル濱の空筒抜けや」は、読者にハルビンの「空」を見上げる視線を高く大きく広げ、そして下五にて湖面にひろがる「採氷」の光景を筒抜けの冷たさと明るさで描き上げました。

地

氷切る鋸の鋼に湯気揺らぐ

クラウド坂上

「採氷」する人物の背中から湯気が上がるという句も含めて「湯気」の類句はそれなりの数が届いたのですが、「氷切る」という傍題を使い「鋸の鋼」から「湯気」がたつという視点に絞ったことで成功しました。「氷との摩擦でも熱は出るので、氷から湯気が出るのです」とは、作者クラウド坂上くんの弁。「鋸の鋼」の質感が「湯気揺らぐ」という現象に説得力

を持たせませす。

採氷の削り屑には火の匂ひ みちる

同じ場面を違う方向から感じ取った二句。「採氷の削り屑」に「火の匂ひ」がするという措辞は、先ほどのクラウド坂上くんの作品が語る事実、みちるさん独自の詩的感覚を加えたもの。「氷」と「火」の対比が詩的感興を呼びます。

採氷のすれすれに在るただの水

大塚迷路

「採氷」は基本的には作業を意味する季語ですが、「採氷の（氷）」が句意の中に吸収されているのか？というケース。「採氷」された氷の周辺にある水に着目した句がなかったわけではないですが、「すれすれに在るただの水」という把握の仕方が、いかにもこの作家らしい視点。「すれすれ」「在る」「ただの水」それぞれの言葉に含蓄があります。以下、めろさんの名言。

●ボーダーラインという言葉は結構無責任です。ぎりぎりの合格とぎりぎりの不合格、どっちが不幸？水になった水と氷にならなかった水、どっちが幸せ？／大塚迷路

採氷でふ湖伐つて売る仕事

三重丸

○「てふ」は「ちよう」と読み、「くという」を意味します。「採氷」

とは「湖」を伐つて売る仕事であるよ、という定義そのものが詩となりました。モノを切り売りすれば、そのモノは次第に無くなっていくものなのに、「湖」は無くならない。確かに不思議な仕事であります。以下、三重丸さんの納得の呟き。

●原料は天然の水。考えてみるほかに、季節を違え、場所を違えるだけで成立する、奇妙な生業なんだなと思う。／三重丸

採氷の鋸屑雪に足の跡 甘泉

「採氷の鋸屑」が残っており、さらにそこに降った「雪」に足跡がついている。同じように水が凍ったもののなかに、「採氷の鋸屑」と「雪」の区別が明らかに分かったところ、作者の小さな発見と感動があります。「採氷」の作業にとつて、雪は品質を左右する迷惑なものだということを、今回知りました。箒で掃きながらの作業をしていた、その「足の跡」かもしれませんね。

採氷池の屋号はためく御空かな

まごん

NHKニュースで日光の採氷の様子がおんエアされたという情報もありましたね。その画像からのテレビ吟行かもしれませんが、「屋号はためく」というさまによく目をとめたものだと思います。テレビではなく、自身の脳内吟行から

「採氷池の屋号はためく」様子をつかんだのであれば、これはもう天晴れな想像力。下五の「御空かな」の詠嘆のなんと晴れ晴れとした光景でしょう。

採氷や湖の棺となる銚 あつちやん

「の」を主格とするか、所有格とするかで意味は変わってきます。私は、ひとまず主格と読んでみました。「採氷」によって氷が切り取られ、「湖」が「棺」のようにぼつかりと空いていく様子ですね。「採氷」の音や声は、「湖」が「棺」となる「銚」なのだよという把握が実に詩的な作品です。

採氷夫にぺんぎんが混ざつてゐる

中原久遠

可愛いし笑えるし、まるでアニメみたい！と思うのですが、いやいやこういう光景が現実としてありえるんじゃないの？とも考えられます。平仮名書きの「ぺんぎん」が人間面してるようで、そんな小さな配慮もまた、この作家の持ち味です。

百蔵は水も挽けば豚も飼ふ

葦信夫

固有名詞を使わせたら、この人の右に出る人はいないかもしれないよ（笑）。行ったこともない村の会ったこともない「百蔵」爺さんが、我が眼前にありありと見えてくるのですから、大したもんで

す。「氷も挽けば豚も飼ふ」という淡々たる措辞が、ナレーションのごとく読者の耳に響いてきます。

第99回 2015年2月2日週の兼題

冬服

天

しんしんとソムチャイさんの冬服に
るびい

以前みんなで取り組んだ兼題「ジャケツ」と兼題「冬服」との違いって何だろう？それをすいぶん考えさせられた今週でした。

「ジャケツ」の場合は、モノとしての特徴やリアリティが非常に大きなポイントになるわけですが、「冬服」は「春服」でも「夏服」でもない「冬服」であることが、一句の中で活きているか否かが重要になってくるかと考えます。そんなことを思いつつ選句をしておりますと、この句が心に飛び込んできました。なんととっても「ソムチャイさん」という固有名詞が見事に機能していますね。南方からの留学生でしょうか、観光客でしょうか。着慣れない「冬服」を着ている「ソムチャイさん」のぎこちない、それでも冬という季節を新鮮な気持ちで体験している表情まで想像できそうです。

しかもこの句を非常にうまく演出しているのが「しんしんと」という上五のオノマトペ。「しんしんと」は冬の冷気でありつつ、降ってくる雪のイメージを膨らませます。さらにそのオノマトペを見事に受け止めているのが、最後の助詞「に」です。この助詞が目に入っただとたん「しんしん」なるものが今「冬の服」に降ってきたという印象を見事に構築します。いやあ、こんなやり方があったか！と感心した作品です。

地

冬服の詐欺師に鬘の白髪かな

クズウジュンイチ

「冬服」という言葉がもつ暗いイメージを活かすことを考えて、さまざまな人物を想定する発想は当然ですが、「詐欺師」はややわざとらしい感じもしますが、そこに一点のリアリティを加えることで一句が嘘っぽくなくなる。それが「白髪かな」という押さえですね。こういうテクニクは学びたいところです。

冬服入れてやろうお米も入れてやろう

ねこ端石

これは親心というヤツですね。ならば何を入れてやってもいいのですが、「冬服」と「お米」ってほぼ死活問題ですよ（笑）。このチョイスがなんとも笑えるというか、切ないというか。「入れてやろう」のリフレインも哀愁が

あつて、好きです。

冬服に潜める顎の領きぬ

紗蘭

こちらは「冬服」を着ている人物を描写した作品です。「潜める顎」の表情、その「顎」がさらに深く潜む動作があり、領いたのだと分かる。このあたりの描写が映像としてしっかりと描けています。地味な句ですが、確かな技術を持った二句です。

源氏名の燐寸の残る冬の服

加和志真

「冬の服」のポケットに何かが入っているという句は沢山ありましたね。その中で「燐寸」という発想も当然あるだろうから、ただの「燐寸」では面白くない。だから「源氏名の燐寸」としてみる。こういう発想の流れでオリジナリティを確保しています。巧いのは「残る」という動詞。あの日のあの「燐寸」だという記憶が「冬の服」という季語を通して、蘇ってきます。

冬服を脱いで脱輪を助ける

理醇

こんな場面をさりげなく活写できるのがベテランの味ですね。「冬服を脱いで脱輪」までだと、自分がやっちゃったのかと思うのですが、最後の動詞の展開が巧いね。「助ける」の一語で登場人物が二人以上いることが分かり、「冬服」を脱いで手伝おうとする人物

がありありと見えてきます。このあたりの言葉の選び方が巧いんだよね。

冬服の我だけ異物丘と空

山香はし

ほおーこういう展開もあるのかと、感心しました。冬という季節の「丘」の上に立ち「空」を見上げた時、「冬服の我だけ」が「異物」であると感じる、この感性そのものが詩です。「異物」という言葉が「冬服」のみならず冬という季節そのものも描いている、非常に興味深い手法でした。

硝煙の匂ひ

雪つさぎ

「云氏」という人物を想像するヒントとして「硝煙の匂ひ」のついた「冬服」だけがそこにあるという、まるでスパイ映画みたいな作品です。「冬服」は当然ながらさまざまな人物がでけますので、その中でオリジナリティを発揮するには、こんな発想に飛んでみるのも一手です。

冬服や巨大看板には戦車

三島ちとせ

うわー、こんな取り合わせもありかと驚きました。完全なる取り合わせの光景。黒っぽい「冬服」たちが蠢く街を睥睨するように「巨大看板」がある。そしてそこには「戦車」が描かれている。こ

うなると「冬服」がまるで軍服めいた印象として、再認識されるかのような効果があります。現在のきな臭い社会情勢を象徴するかのような光景です。同時投句「冬服のリボン心臓より高い」の描き方も巧いですね。

冬服でねむる

紆夜曲雪

こんな眩きがそのまま俳句になるのは、やはり季語の力というやつでしょう。「冬服でねむる」という状況に対して、「どうしたらいいのか」という眩きがさまざまに困難を生々しく思わせませう。私もこんな眩きを胸に「冬服」のままで眠ったことがあるなあと、父の危篤が続いていた夜のことを思い出しました。二十三歳の自分がこの一句によって、怖ろしいほど鮮やかに蘇ってきました。

「どうしたら」は「どうしたら」が正しかったのではないかと思ひますが、「どうしたら」と書きたい気持ちもわかります。

作者紆夜曲雪さんの思いはこんなところにあつたかと、ドキッとしたコメントも付されておりました。

●人質二名の命がどうなるのか、この二週間後には判明しているのでしょうが、しかし……。こうやって句の題材にすることにも後ろめたさはありませんが……。／紆夜曲雪

白梅

天

白梅を挿頭しやりたし相撲取

きらら☆れい

「挿頭し」は「かざし」と読みます。「相撲」が秋の季語なので、季重なりなんです。正月場所が終わる頃の光景を思えば「白梅」との取り合わせに違和感はありませんし、「白梅」が主役の季語として描かれていることはいうまでもありません。

鼻肩にしている「相撲取」に「白梅」を「挿頭し」てやりたいとは、なんと目出度い思いでしょう。今場所の活躍への賛辞でしょうか。新人幕の頃から気に掛けていた力士の新十両祝いの思いかもしれませんね。堂々たる大銀杏を思うか、やつと結えた小さい髷を思うかで、一句の味わいは変わってきます。

「挿頭（かざし）」とは「上古の日本人が神事に際して髪や冠に挿した草花のこと」を指します。「相撲」も元々は神事として始まったものですから、このあたりの言葉の選び方もよく考えられています。

「相撲取」の髷に「白梅」を指すなんて、よく思いついたものだと感心したのですが、もう一句「髷

第100回 2015年2月9日週の兼題

に白梅遠藤か勢か」という花屋さんの句を見つけて吃驚！偶然の発想かもしれませんし、テレビ中継あるいはニュース映像にてこの光景が映し出されたのかもしれない。花屋さんの作品の固有有名詞もいいですね。「遠藤」と「勢」、対照的な四股名が味わいになっています。

どちらも「天」というわけにもいかず困りましたが、季重なりを見事にこなし、「挿頭」という言葉を句やかに描いている点で、きらら☆れいさんの一句に軍配をあげました。「白梅」の気品は、相撲界に似合うという新しいイメージをいただけたこと、お二人に感謝したいと思います。

地

白梅のがくはよほどに赤くある

山風禪

一物仕立てからは、この一句を推します。「白梅」を見た印象を率直に述べた言葉がそのまま俳句になっているのが魅力です。「がく」を漢字で書かず、「白梅」「赤く」の視覚的印象を意図している点にも共感します。「よほどに赤くなる」という措辞がまっすぐに読み手の脳に入り、作者が見たのと同じ光景を、脳内に再生させる力がある作品です。

白梅へ尾をかぐやかす鳥の朝

紅夜曲雪

勿論「紅梅」でも成立はするのですが、「白梅」であることの効果を佳しとした作品。「白梅」の清々しい白は、「鳥の朝」の空気を風を美しいものにします。方向を示す助詞「へ」の一字が「尾をかぐやかす」という描写をさらに生き生きさせます。

白梅の樹下や他界の子の遊ぶ

中原久遠

「白梅」でなくてはならない必然性とは、こういう句のことをいうのでしょうか。「他界の子」は美しいたましたでしようか。「白梅の樹下」にある異空間を、俳人の目はキャッチします。美しくも怖ろしい一句です。

白梅は静かなる群衆を飼ふ

紀貫之

さきほどの「他界の子」が虚に大きく踏み出しているとすれば、こちらの一句は実の世界の向こうに、かすかに虚が見えるという作品。桜を見る人々は浮かれますが、「白梅」を見るのは「静かなる群衆」であるという詩的把握が素晴らしいですね。下五「飼ふ」が虚の世界にかすかに触れる一語となっています。

白梅にわがたまのをを繋ぎおく

とこと

ふたたび虚の世界の一句。「たまのを」とは「玉を貫き通した細いも。また、その宝玉の首飾り。2《玉をつなぐ緒が短いところから》短いことたとえ。3《魂（たま）の緒の意から》生命。いのち。」と三つの意味がありますが、この句の場合は「いのち」と読めばよいでしょう。

「白梅」という存在は我が「たまのを」を繋ぐ木であるという断定に詩があります。「繋ぎたり」ではなく「繋ぎおく」という複合動詞の効果もよく考えられていますね。「わがたまのを」は句やかな「白梅」の元にて、うっとり漂っているのです。

闇に白梅拘束の続報は

ミル

日本人拘束事件に世界中の人たちが釘付けになっていた頃が、この兼題の切でした。同じ思いを持った人々たちからの投句、それぞれに心打たれました。その中でこの句を金曜日に推しましたのは、抽象的な描き方ではなく、「闇に白梅」という映像と「拘束の続報は」という現実の思いが、心理表現として取り合わせられていることです。「くは」の余韻に、追悼の思いも滲んできます。

白梅や千年前もここに人

山香はし

万葉集には「梅」がたくさん詠まれていることは、火曜日「俳句道場」の季語雑学部の情報にもありましたね。万葉集が編纂されたのは奈良時代末期、奈良時代は「平城遷都の710年から長岡遷都の784年までの、奈良に都がおかれていた時期」ですから、まさに千年以上前には、「梅」が咲いていたということです。「白梅」の林の中に立ち、「千年前もここに人」という時代への感慨は、生きて在ることへの実感に繋がります。

泣き声が白梅よりもずっと先

葛城蓮士

不思議な句ですが、現実にもこのようなことはありえるだろうと思います。「白梅」を目指して歩いていると、かすかに「泣き声」が聞こえてくる。それは、「白梅よりもずっと先」から聞こえてくるのが分かる。かすかな「泣き声」に揺れるかのように「白梅」は風にちりちりと香っています。「泣き声」という音の遠近感が、「白梅よりもずっと先」という視覚の描写で表現されるテクニク。勉強させていただきました。

白梅ひらくマリアの呼吸の音たてて

緑の手

「白梅」と「マリアの呼吸」と

の取り合わせのなんと美しいことでしょう。聖母「マリア」の印象、マリア像の白などが「白梅」の高貴なる香気に似合うのですね。上五が字余りになっていますが、「白梅や」ではなく「白梅ひらく」とした効果も成功しています。

惜しまれるのが下五。「マリアの呼吸」でかすかな呼吸音は想像できますので、敢えて「音たてて」と言わなくてもいいかと。下五の推敲によって、さらに佳い句になり得る一句です。

白梅や僧の隣りて少し酔ふ

木好

「僧に隣りて」ならば、作者自身が酔っていることになりそうですが、「僧の」ですから、作者の隣に僧が坐り、「白梅」を愛でつつ酒を飲んでいられるでしょう。「白梅」の香りに「酔ふ」と読むことも可能ではありますが、そう解釈すると「少し酔ふ」という下五の表現は、もともと違ったものになるべきかと思えます。

「白梅」の香気に、少し聞こし召し過ぎたのでしょうか。そんな「僧」をほのぼのと眺めつつ、句やかに美味い清談の酒です。

白梅のお宮の裏のラブホテル

初蒸気

「白梅」が高貴や気品のイメージを持つているとなれば、それを逆手にとるのも二手。「白梅のお宮」は誰もが発想する光景ですが、そ

こから「くの裏の」ときて、さらに「ラブホテル」と、映像をパースさせるテクニクがニクイね。こんな場所ありそう、というアル感の作り方が、ほんとに巧い作家であります。

第101回 2015年2月16日週の兼題

蛤

天

あはすためひらく法悦蛤に

破障子

火曜日「俳句道場」季語深耕にて、皆さんからでてきたキーワード、覚えているでしょうか。上品、格式、春の匂い、雛祭り、貝合わせ、浮き世離れ、正体不明、蜃気楼……。こんな複雑なイメージを内包しているのが、「寒蜈」でも「浅蜈」でもない「蛤」の特徴。その「蛤」らしさをどう表現するか、さまざまなパターンを想定しておりましたが、こんな想定外の一句に出会い、大変驚きました。「法悦」とは①仏法を聞いた喜び、②法喜、③うっとりするような深い喜び、陶酔、と辞書の意味が二つありますが、②と解すればよいでしょう。一枚貝である「蛤」に対して「あはすためひらく法悦」という詩的把握に、まさにうっとりいたします。

下五「蛤に」の「に」は非常に悩ましい選択ですが、「は」と指を指すような助詞は強すぎますし、ましてや「や」「ぞ」「よ」と詠嘆しては身も蓋もありません。

「に」は、「あはすためひらく法悦（が）蛤に（あるよ）」というニュアンス。一見、不器用にもみえる助詞「に」が、一枚の貝を合わせた時の乾いた音を生々しく思わせるのだと気づき、ほおくと感心した次第です。

「蛤」は「貝合わせ」の貝でもあり、夫婦和合の象徴でもあるわけで、「あはすためひらく法悦」はエロティックな匂いもする表現。「蛤」の貝肉の色や大きさが艶めかしくもありシニールでもあり、いやはや、これから「蛤」を食べる度に「あはすためひらく法悦」という詩語を思い出すに違いない、愛唱の一句です。

地

蛤を酒で煮立てて既に酔ふ こま

「蛤の酒蒸し」の句も幾つかありましたが、「蛤を酒で煮立てて」という事実を述べるだけでは、詩ではなくレシビですね。この十七音を詩にしているのは、下五「既に酔ふ」という実感の言葉。「既に酔ふ」で、作者は下戸であることが想像できますが、「酒」の香りも「蛤」の酒蒸しも好きであることも同時に伝わります。「既に

酔ふ」の陶醉感もまた、一種の法悦でありますね。

この碗はこの蛤に無礼なる

雪うさぎ

上品さ、格調、高価さが「蛤」の特徴であれば、このような切り口もあつていいですね。「この」をリフレインさせることで、読み手の脳内に、「この碗」と「この蛤」の格違いの様子をありありと想像させるのですから、巧いもんです。下五「無礼なる」の俳味も利いています。

「なる」は連体形。下五を連体形で終わらせることについては賛否両論ありますが、掲出句の場合「無礼なり」と言い切るのは強すぎるか、という配慮だと思います。下五の後の空白に「無礼なる（ことよ）」という詠嘆が隠されている、あるいは「無礼なる（この碗）」という具合に意味が戻っていく効果を狙っている、と考えたいと思います。

蛤やはらから集ふ遊山箱

こりのらはしに

「はらから」には①母を同じくする兄弟姉妹。また、一般に兄弟姉妹。「島にかへる娘二人はらしく／源おぢ 独歩」「親族（うがら）／万葉集⁴⁶⁰」②同じ国民。同胞（どうほう）。と二つの意味がありますが、この句の場合は①ですね。

「遊山箱」とは【外遊びに弁当などを入れて持参する小型の重箱】のこと。私の生家にも古い遊山箱ありました。小さな二段重ね、さらに小さな三段重ね、引き出しのような五段重ね。それぞれに竹製の上品な取っ手がついていました。一族郎党それを提げて、爺さんの船に乗って、向かいの島へ磯遊びに行くのが、春の楽しみの一つでした。

掲出句を読んで、あの「遊山箱」に入っていたかもしれない煮蛤をこの目で見たとような気持ちになりました。上品な賑やかさ、春らしさが「蛤」という季語を彩ります。

蛤や御幸の間にて顔合せ るびい

「顔合わせ」とは、両家の両親が初めて会うという場面でしょうか。席上の御膳には上品な「蛤」のお清まし、かぐわしい匂いを放っています。初めての「顔合わせ」の席は「御幸の間」。幾久しうの思いが広がります。

百人の宴蛤ひとつずつ スズキチ

こちらは披露宴でしょうか、祝賀パーティーでしょうか。「百人の宴」の百人の御膳には、目出度い「蛤」が鎮座しているのでしょう。自分の御膳を眺めつつ、立派な「蛤」だなあ、これと同じ「蛤」をよく「百」も揃えたものだなんて思いながら、長い祝辞が終わるのを待っているのかもしれない

（笑）。

蛤を買って帰るといふ英断

ボメロ親父

「寒蛸」でもなく「浅蛸」でもなく「蛤」らしさをどう表現するかという命題に対して、「英断」の一語がこんなふうに使えるという愉快。勿論「桜鯛」でも「鯛」でもいいじゃないかといわれれば確かにそうなのですが、「蛤」という季語は「蛸・浅蛸・蛤」の二枚貝三択を想起させるので、「蛤」を買って帰るといふ英断の俳味が楽しめるというもの。「英断」で買って帰ったのに、子どもたちはあんまり喜んでくれなかったりするのかもしれない、とちと笑えます。

蛤やむかし洲崎は遊郭ぞ

トレ媚庵

「蛤」にちなんだ地名を入れる発想のなかでは、この句を金曜日に推しました。「むかし洲崎は遊郭ぞ」は歴史的事実を述べただけの言葉ではありますが、「蛤や」という詠嘆と「むかし洲崎は遊郭ぞ」という感慨が巧くバランスをとっています。「蛤や」の詠嘆によって、酒の味や身肉の肉々しい造形やらが想起され、「洲崎」「遊郭」の「むかし」の栄華が読み手の心に沁みてまいります。

蛤に商売女のごとき舌 初蒸気

「蛤の舌」を詠んだ句も幾つかありました。その中で、掲出句とともに小木さん作「蛤の小利口さうな舌である」にも惹かれました。「小利口さうな舌」という感覚に共感したのですが、ひよつとするところの感じは「浅蛸」かも……と思ひ直し、こちらの掲出句を金曜に推した次第です。

「蛤」から「遊郭」を思う人もいるわけですから、「商売女」という言葉にたどり着いても不思議ではありません。大きな「蛤」の「舌」がしどけなく伸びているさまをこう比喻するところに、皮肉な感情が発生します。時代小説の中に出てくる「食売女」「飯盛女」という言葉を思い出したのも、季語「蛤」に触発された連想かもしれません。

蛤や眠らぬコンビチナートの火

まどん

「蛤」の産地である海の光景は、洲崎に遊郭があつた頃からどんな様変わりしています。砂に眠る「蛤」たちと「眠らぬコンビチナートの火」との対比が巧いですね。この対比によって、「蛤」という季語の現場の一面が描き出されます。少し油臭い「蛤」を想像させるのも、この句の言葉の力でありましょう。まどん君、巧くなつてきましたねえ。

俳句ポスト365とは松山市が運営する、俳句の投稿サイトです。毎週新しいお題（兼題）が出題され、結果が発表されます。また、俳句を学べる「俳句道場」などもあります。どなたでも無料で参加出来ます。



俳句の街 まつやま 俳句ポスト365 とは？

<http://haikutown.jp/>

出張俳句ポスト365

俳句甲子園 東京会場編

2014年6月15日

第17回俳句甲子園、関東地区大会東京会場となった羽田空港にて、出張俳句ポストを開設しました。

兼題は高校生に合わせ「ソーダ水」。俳句甲子園の参加選手やスタッフ、観戦に訪れた方々など、多数投句に参加して下さいました。



出張俳句ポスト365

ヤクルト戦編

2014年8月23・24日

セ・リーグ公式戦、東京ヤクルト対横浜DeNA戦にて出張俳句ポストを開設しました。

8月のまだまだ暑い最中ではありましたが、暦の上では秋。兼題を「秋燕」とし、ヤクルトのホーム戦を俳句で応援しました。



出張俳句ポスト365

愛媛マラソン編

2015年2月8日

今年も第53回愛媛マラソンに俳句ポスト365の特設ブースが登場しました。

当日は春の風の吹き荒れる中、ランナーとして参加した俳句ポスト投稿者や応援団が多数訪れ、大いに盛り上がりました。



出張俳句ポスト365

松山の物産と観光展編

2015年2月19〜25日

さっぽろ東急百貨店にて開催された、第16回四国松山物産と観光展に出張俳句ポストを開設しました。来場者の方に、松山の文化の一つとして、俳句をひねって頂きました。

今年度も各地で出張俳句ポストを開設予定です。開催の告知は俳句ポスト365サイトにて行います。



365オフ会

2015年1月12日

2015年1月12日成人の日、松山市立子規記念博物館にて、「365オフ会」を行いました。

当日は、日本各地から約40名が集結。選者である夏いつき氏の進行の元、俳号でしか知らなかった俳句ポスト365の投稿者の姿が明かされることに、歓声が上がりました。

オフ会の後半は句会ライブ。発表された俳句を元に、インターネットでは味わえない、リアルな俳句談義に花を咲かせました。



世界へ、そして100年後の未来へ、 俳都松山が今動き出す!!



2015年 夏目漱石 松山赴任120年

2016年 夏目漱石 没後100年

小説「坊っちゃん」発刊110年

2017年 夏目漱石・正岡子規生誕150年

第72回国民体育大会えひめ国体開催

俳句ポスト365選者

夏井いつき プロフィール

昭和32年生まれ。松山市在住。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身、「第8回俳壇賞」受賞など。俳句集団「いつき組」組長として創作活動&指導に加え、俳句の授業（句会ライブ）、全国高等学校俳句選手権「俳句甲子園」の創設「俳都松山宣言」起草にも携わるなど幅広く活動中。テレビラジオのレギュラー出演、MBS「プレバト!!」俳句コーナー出演中。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」選者、朝日新聞愛媛俳壇選者、愛媛新聞日曜版小中学生俳句欄選者。著書に、句集「伊月集 梟（マルコボ・コム）」、「100年俳句計画（そうえん社）」「子規365日（朝日新書）」、「絶滅寸前季語辞典（ちくま文庫）」、「超辛口先生の赤べん俳句教室（朝日出版）」など多数。2015年1月、季刊「俳句新聞いつき組」を創刊。



「俳句ポスト 365」
PC・スマートフォンサイト



<http://haikutown.jp/post/>



「俳句ポスト 365」
Facebook ページ



<http://www.facebook.com/haikupost>



「スマイル松山ハイク&安心ナビ」
松山市公式アプリ



<http://smile-matsuyama.com/>

松山市